

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第143集

松川遺跡発掘調査報告書

県道水沢・玉里線改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

松川遺跡発掘調査報告書

県道水沢・玉里線改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7300箇所及以上遺跡が知られております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。特に道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の江刺市松川遺跡は、北上川東岸の自然堤防状の微高地に立地し、昭和63年の発掘調査によって平安時代の住居跡や掘立柱建物跡と土坑等が発見され、平安時代には集落が営まれ、それ以降も継続されていたことが明らかとなりました。特に、住居跡と掘立柱建物跡が遺跡内の立地を異にしており、場の使い方を示す例として貴重な資料になるものであります。

この報告書が広く活用され、新学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力、ご支援を賜りました岩手県土木部水沢土木事務所、江刺市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成元年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

- 1、本報告書は、江刺市田原字大日前21-4ほかに所在する松川遺跡に対する発掘調査の結果を収録したものである。
- 2、本遺跡の発掘調査は、一般国道水沢-玉里線田原地区道路改良事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と岩手県土木部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
- 3、岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はNE17-0366、遺跡略号はMK-88、発掘調査面積は1,130㎡である。
- 4、発掘調査期間は昭和63年4月11日～6月27日、整理期間は昭和63年11月1日～平成元年3月31日である。
- 5、野外調査は高橋與右衛門・斎藤博司、室内整理は高橋與右衛門が担当した。
- 6、本報告書の執筆は、Ⅰを昆野靖、Ⅱ～Ⅴを高橋與右衛門が担当した。
- 7、石質鑑定は佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）、馬歯の鑑定は小林和彦氏（八戸市立博物館）に依頼した。
- 8、野外調査では、江刺市教育委員会、相原康二氏（岩手県立図書館）、本堂寿一氏（北上市立博物館）、伊藤博幸氏（水沢市教育委員会）、宮本長二郎氏（奈良国立文化財研究所）、室内整理では藤沼邦彦氏、小井川和夫氏（東北歴史資料館）のご指導をいただいた。
- 9、野外調査では梅沢茂雄氏はか24名のご協力を得た。
- 10、本報告書の編集・校正は高橋與右衛門が担当した。
- 11、本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 12、本報告書の凡例は以下のとおりである。

①遺構実測図の縮尺率は、住居跡と土坑は $\frac{1}{50}$ 、掘立柱建物跡は $\frac{1}{100}$ 、溝跡と柱穴群は $\frac{1}{20}$ である。

②遺物実測図の縮尺率は、土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器、金属製品、石器とも $\frac{1}{5}$ ・ $\frac{1}{10}$ であるが、遺構・遺物とも各図版にスケールを付し、その旨明示した。

③本報告書の遺構実測図に使用されるスクリーンパターンは、次のとおりである。



④土師器の実測図の調整技法や残存程度は、次のように表現した。



本文目次

I、調査に至る経過	2	(1)、縄文土器、弥生土器	88
II、位置と立地及び環境	3	(2)、土師器	93
1、位置と立地	3	(3)、須恵器	97
2、江利市の遺跡	6	(4)、中国青磁	100
III、野外調査と整理の方法	12	2)、土製品	100
IV、検出遺構と出土遺物	15	3)、金属製品	100
1、遺構と遺構内の遺物	15	(1)、鉄製品	100
1)、住居跡	15	(2)、銅製品	101
2)、掘立柱建物跡	48	4)、石器	102
3)、土坑	58	V、まとめ	107
4)、溝跡	72	1、遺構	107
5)、柱穴群	82	2、遺物	111
2、遺構外の遺物	88	VI、鑑定	117
1)、土器類	88		

図版目次

第1図 岩手県全区	1	第26図 F 2住居跡 (遺物-3)	47
第2図 試掘溝と調査区域	2	第27図 F 2住居跡 (遺物-4)	48
第3図 遺跡の位置 (5万分の1)	3	第28図 B10掘立柱建物跡 (遺構)	49
第4図 江利平野の地形分類図	4	第29図 C13掘立柱建物跡 (遺構)	51
第5図 基本層序	5	第30図 C19掘立柱建物跡 (遺構)	53
第6図 江利市の遺跡	7	第31図 C22掘立柱建物跡 (遺構)	55
第7図 グリッド配置図	13	第32図 D24掘立柱建物跡 (遺構)	57
第8図 A26住居跡 (遺構)	15	第33図 E28掘立柱建物跡 (遺構)	58
第9図 A28住居跡-1・2 (遺構)	17	第34図 B3土坑 (遺構)	59
第10図 A28住居跡-1・2 (遺物-1)	20	第35図 B13土坑 (遺構)	59
第11図 A28住居跡-1・2 (遺物-2)	22	第36図 B16土坑 (遺構・遺物)	61
第12図 A28住居跡-1・2 (遺物-3)	23	第37図 B24土坑 (遺構・遺物)	61
第13図 A28住居跡-1・2 (遺物-4)	24	第38図 C5土坑 (遺構・遺物)	62
第14図 A28住居跡-1・2 (遺物-5)	25	第39図 C11土坑 (遺構)	63
第15図 B27住居跡 (遺構)	28	第40図 C12土坑 (遺構)	64
第16図 B27住居跡 (遺物)	28	第41図 C14土坑 (遺構・遺物)	65
第17図 D1住居跡 (遺構)	31	第42図 C21土坑 (遺構・遺物)	66
第18図 D1住居跡 (遺物-1)	34	第43図 C24土坑 (遺構)	67
第19図 D1住居跡 (遺物-2)	35	第44図 D10土坑 (遺構)	68
第20図 D1住居跡 (遺物-3)	36	第45図 D13土坑 (遺構)	68
第21図 D28住居跡 (遺構)	38	第46図 D14土坑 (遺構)	69
第22図 D28住居跡 (遺物)	39	第47図 D15土坑 (遺構・遺物)	70
第23図 F2住居跡 (遺構)	41	第48図 D16土坑 (遺構)	72
第24図 F2住居跡 (遺物-1)	44	第49図 溝跡配置図	73
第25図 F2住居跡 (遺物-2)	46	第50図 A31溝跡-1・2 (遺物)	76

第51図	B14溝跡(遺物)	78	第61図	遺構外の遺物(須恵器-1)	98
第52図	B19溝跡(遺物)	79	第62図	遺構外の遺物(須恵器-2)	99
第53図	D1溝跡-1・2(遺物)	82	第63図	遺構外の遺物(土製品)	100
第54図	柱穴群(遺構)	83	第64図	遺構外の遺物(金属製品-1)	101
第55図	遺構外の遺物(縄文土器)	89	第65図	遺構外の遺物(金属製品-2)	102
第56図	遺構外の遺物(弥生土器-1)	90	第66図	遺構外の遺物(石器-1)	103
第57図	遺構外の遺物(弥生土器-2)	91	第67図	遺構外の遺物(石器-2)	104
第58図	遺構外の遺物(土師器-1)	94	第68図	遺構外の遺物(石器-3)	105
第59図	遺構外の遺物(土師器-2)	96	第69図	検出遺構全体配置図	109
第60図	遺構外の遺物(土師器-3)	97	第70図	土師器分類図	114

表 目 次

第1表	江刺市の遺跡	9	第2表	柱穴群計画一覧表	86
-----	--------------	---	-----	----------------	----

写真図版目次

写真図版1	完掘後遺跡全景(空中写真)	122	写真図版20	遺構06(溝跡-3)	141
写真図版2	A・調査前遺跡近景	123	写真図版21	遺物02(遺構内の遺物-2)	142
	B・調査前遺跡近景	123	写真図版22	遺物03(遺構内の遺物-3)	143
写真図版3	A・相掘り風景	124	写真図版23	遺物04(遺構内の遺物-4)	144
	B・現地説明会風景	124	写真図版24	遺物05(遺構内の遺物-5)	145
写真図版4	A・田原小学校見学会風景	125	写真図版25	遺物06(遺構内の遺物-6)	146
	B・基本層序	125	写真図版26	遺物07(遺構内の遺物-7)	147
写真図版5	遺構1(住居跡-1)	126	写真図版27	遺物08(遺構内の遺物-8)	148
写真図版6	遺構2(住居跡-2)	127	写真図版28	遺物09(遺構内の遺物-9)	149
写真図版7	遺構3(住居跡-3)	128	写真図版29	遺物00(遺構内の遺物-10)	150
写真図版8	遺構4(住居跡-4)	129	写真図版30	遺物01(遺構内の遺物-11)	151
写真図版9	遺構5(住居跡-5)	130	写真図版31	遺物02(遺構内の遺物-12)	152
写真図版10	遺構6(建物跡-1)	131	写真図版32	遺物03(遺構内の遺物-13)	153
写真図版11	遺構7(建物跡-2)	132	写真図版33	遺物04(遺構内の遺物-14)	154
写真図版12	遺構8(建物跡-3)	133	写真図版34	遺物05(遺構内外の遺物-2)	155
写真図版13	遺構9(土坑-1)	134	写真図版35	遺物06(遺構外の遺物-3)	156
写真図版14	遺構00(土坑-2)	135	写真図版36	遺物07(遺構内外の遺物-4)	157
写真図版15	遺構01(土坑-3)	136	写真図版37	遺物08(遺構内外の遺物-5)	158
写真図版16	遺構02(土坑-4)	137	写真図版38	遺物09(遺構外の遺物-6)	159
写真図版17	遺構03(土坑-5)	138	写真図版39	遺物02(遺構外の遺物-7)	160
	遺物01(遺構内外の遺物-1)		写真図版40	遺物01(遺構外の遺物-8)	161
写真図版18	遺構04(溝跡-1)	139	写真図版41	遺物02(遺構内外の遺物-9)	162
写真図版19	遺構05(溝跡-2)	140			

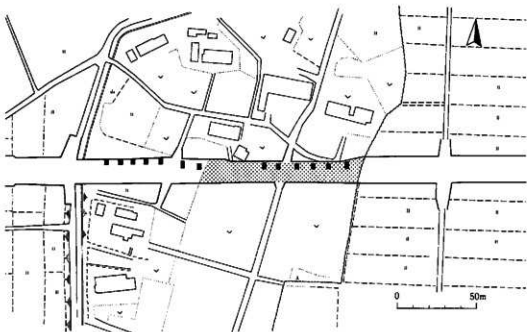
I. 調査に至る経過

一般県道玉里水沢線の江刺市田原地区道路改良事業は、水沢市佐倉河字鏡田から江刺市田原字大日前まで総延長4,603m、幅員10～12mの道路新設事業であり、昭和48年度に着工し、昭和63年度完了の事業である。

田原地区の遺跡には御免遺跡、松川遺跡、中屋敷遺跡等があり、道路改良事業にかかわる埋蔵文化財の取扱いについては、岩手県土木部、水沢土木事務所と岩手県教育委員会との間で協議された。

昭和62年10月29日付け「水土1240号」により水沢土木事務所長から県教育長あての「埋蔵文化財包蔵地の内容確認調査について」依頼があり、同年11月10日、県教育委員会文化課による松川遺跡の試掘調査が実施された。試掘調査は道路用地の13箇所に試掘溝を設定して行われ、遺構及び遺物の有無を確認した結果、東側のトレンチから多数の土器と数棟の竪穴住居跡が発見された。このため、同年11月12日付け「教文439号」により県教育長から水沢土木事務所長あて東側部分の全面的な発掘調査を必要とする旨回答した。これをもとにさらに両者間の協議を重ねられ、県教育委員会文化課は調整のうえ昭和63年度における岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘事業に組み入れることとした。

これにより、当埋蔵文化財センターは昭和63年4月8日付け委託契約により調査に着手することとなった。



第2図 試掘溝と調査区域

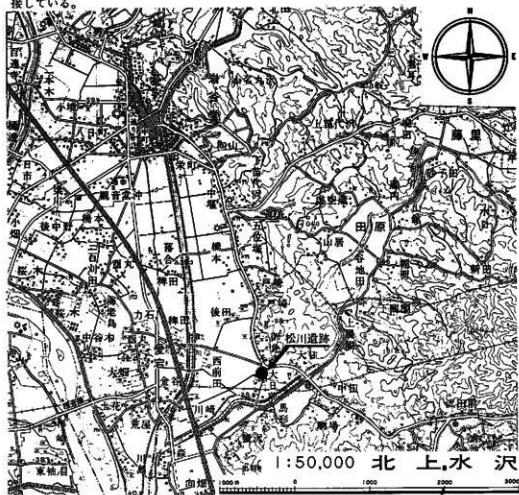
II. 位置と立地及び環境

1. 位置と立地

【位置】 (第1・3図)

松川遺跡は、江刺市田原字大日前21-4を中心とする場所にあり、東日本旅客鉄道東北新幹線水沢・江刺駅の東方2.3km付近、江刺市役所の南方4km付近に位置する。

北上川中流域の県南中央部を占める江刺市は、昭和30年に旧江刺郡内の岩谷堂町、田原村、広瀬村、稲瀬村、愛宕村、藤里村、伊手村、玉里村、米里村、梁川村の1町9箇村が合併し、その市域は南北約28km、東西約24km、総面積360.77km²を有する。北側は北上市と和賀郡東和町、東側は遠野市と気仙郡住田町、南側は東磐井郡大東町、西側は水沢市と胆沢郡金ケ崎町に境を接している。



第3図 遺跡の位置

市の中心街は市域中央やや西寄りの岩谷堂地区にあり、ここから県都盛岡まで約57km、水沢市役所まで南西約7km、北上市役所まで北西に約12kmの距離がある。

遺跡は、江刺市役所から県道北上・一関線を南へ3.7km進み、県道水沢・玉里線との交差点から玉里方向へ1.3km東に進むと田原大日前地区内に到着し、同地域に所在する江刺市立保育所の南200mに位置する。

〔立地と周囲の環境〕 (第4図)

岩手県岩手郡を水源とする北上川は、岩手県を南北に縦断して流れ、流路の長さ243km、流域面積10,720km²を有する東北最大の河川であり、流路、流域面積とも岩手県がその4分の3を占めている。



- | | | |
|------|------------------|------------|
| 砂礫段丘 | 沖積段丘 | 旧河道 |
| 丘陵地 | 扇状地 | 河原 |
| 山地 | 傾斜面 | 谷底平野および泥炭原 |
| 自然堤防 | ▲ 新幹線ルートにかかるとる遺跡 | |

第4図 江刺平野の地形分類図

域面積10,720km²を有する東北最大の河川であり、流路、流域面積とも岩手県がその4分の3を占めている。

当遺跡の所在する江刺市は北上川中流域の東岸地帯の一角を占めている。西岸は奥羽山脈の東側斜面を開析する北上川によって形成された江刺平野によって占められ、その後背には隆起準平原である北上山地が広がる。段丘面の発達は不良であるが、標高80m前後の村崎野段丘相当面や、同60m前後の金ヶ崎段丘相当面も観察され、稲瀬付近に比較的広く分布する。

また、北上山地を開析する広瀬川・人首川・伊手川の両岸にも小規模な段丘面がみられる。

北上川の河岸低地である江刺平野は、北上山地から

流れて北上川に合流する広瀬川・人首川・伊手川と胆沢川、そして蛇行する北上川の旧河道によって大小数多くの自然堤防状の微高地と後背低地が形成される。

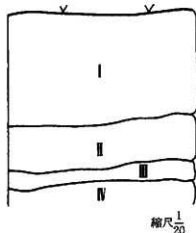
遺跡の立地する田原字大日前は、北東から南西流する伊手川と南流する北上川の合流部付近に位置し、当遺跡は両河川によって形成された自然堤防状の微高地上に立地する。自然堤防の北側は標高100m前後の丘陵地が続き、南側斜面には標高60m前後の小規模な低位段丘が張りつく。東側は伊手川の河岸低地で比高が最大1m前後である。西側は約3mの比高で北上川東岸の河岸低地が連続する。遺跡の立地する自然堤防は東西180m、南北250mの広さを持ち、南に向かって僅かに傾斜している。調査範囲は地形を横断する東西100m、南北11mであるが、遺物の地表分布からみて遺跡は地形のはほぼ全面に広がるものと考えられる。

[地質と基本層序] (第5図・写真図4B)

江刺平野の基盤は新第三系鮮新統玉里層であるが、下部に凝灰質頁岩と砂岩が発達し礫質部を挟み、上部に数層の亜炭層を挟在する。基盤は下位から砂礫層、粘土層の順に平均層厚7.47mが堆積する沖積層に不整合におおわれる。沖積層の地質構成は一部を除いて様な連続性を示し、南に厚く北に薄く堆積する。

L = 40.20 m

当遺跡の基本層序は以下のとおりであるが、層位は上層からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層とした。



- Ⅰ 7.5YR 3/2 黒褐色シルト
- Ⅱ 7.5YR 2/1 黒色シルト
- Ⅲ 7.5YR 2/3 暗褐色粘土のシルト
- Ⅳ 7.5YR 6/6 だいだい色粘土

第5図 基本層序

第Ⅰ層 黒褐色土 表土で砂質シルト、調査時まで畑の耕作土である。礫の混入は殆どないが、全体が砂質である。層厚が20cm～25cmとはほぼ一定し、遺跡全面を覆う。

土師器・須恵器を主とする遺物を包含し、溝跡2条は埋土に本層が堆積する。

第Ⅱ層 黒色土 シルト、やや粘性があり、若干の砂粒を含む。ほぼ全面を覆うが、地形によって層厚0cm～30cmと差がある。土師器・須恵器のほか縄文土器・弥生土器を若干含む。本層の上面で検出された遺構は、Ⅰ層を埋土とする溝跡2条のみである。

第Ⅲ層 灰黒色土 粘土質シルト、良くしまった層である。縄文・弥生土器が少量含まれる。本層は調

査範囲の中では西端部のみを確認されている。古代の遺構はいずれも本層の上面で検出され、Ⅱ層を埋土とする。層厚は0cm～20cmである。

第Ⅳ層 明褐色土 シルト混じりの砂で一部は砂礫層をなす。無遺物層であるが、遺構が検出される。層厚は確認していない。

以上の堆積状況は、微高地上の一般的な層相である前記の状況と大きく異なるものではなく、当遺跡の載る地形面を自然堤防状の微高地として大過ないものと考えられる。

2. 江刺市の遺跡 (第1表・第6図)

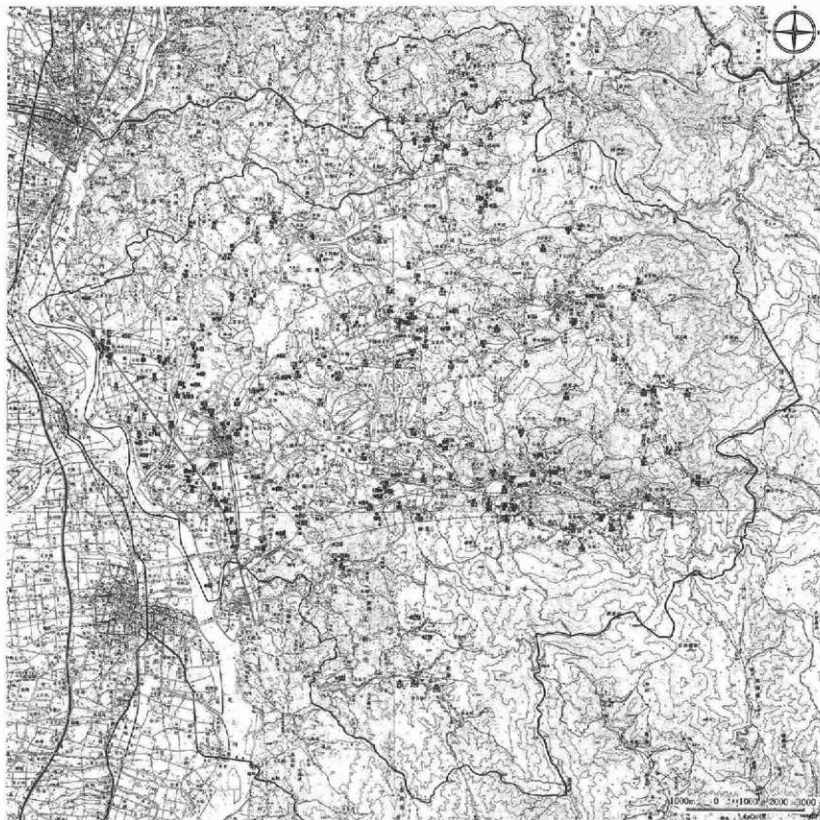
当市内には225箇所の遺跡が知られているが、これらは梁川地区33箇所、広瀬地区42箇所、愛宕地区23箇所、岩谷堂地区22箇所、玉里地区25箇所、米里地区21箇所、藤里地区18箇所、伊手地区25箇所、田原地区18箇所に分散して所在する。しかし、発掘調査されたのは東日本旅客鉄道東北新幹線建設や一般県道北上―関線の建設に関連して調査された15箇所と、農地圃場整備の際に調査された2箇所の17箇所のみのため、全遺跡の性格を把握することは困難であることから、発掘調査された遺跡を主体にして、各時代ごとにその状況を概観することとする。

旧石器時代の明確な遺跡は知られていないが、岩谷堂地区の大名野から出土した局部磨製石斧や稲瀬地区の鷲羽衣台出土の縦長剥片やナイフ、文殊堂山出土の剥片などがこの時代の遺物とされているが、発掘調査による出土遺物ではないため出土層位が不明である。

縄文時代の遺跡は95箇所と多数存在するものの前期以降が多く、草創期・早期は少ない。その中で五十瀬神社前遺跡は東北新幹線関連遺跡として昭和49年に発掘調査され、中期終末の集落跡が発見されている。その他、大谷地・上野・向畑・合ノ沢の各遺跡から早・前期、隈園・根岸などの遺跡では前・中期、岩間・地の神・石間・青篠・七下り・柏原・上野・久田・二渡・元町等の遺跡から中期の遺物がそれぞれ出土している。後期の遺物は岩間・角屋・大名野・石山・隈園・精進合等の遺跡から出土し、晩期のそれは大谷地・梁川・柳沢の各遺跡から出土している。これらの遺跡が発掘調査されることによって、この時代の様相が明確となるであろう。

弥生時代の遺跡は14箇所知らされているが、発掘調査されたのは昭和45年と同52年の2回実施された沼の上遺跡、同53年に調査された兎Ⅱ遺跡が多く、遺物を出土したが、住居跡が発見されておらず、集落であるかは明確にされていない。しかし、兎Ⅱ遺跡から出土した土器片に稲穂の圧痕がみられ、当地の弥生時代は稲作と大きな関連をもつことが明らかになった。その他七下り・法印山・柳沢・石山・青篠・大日堂山などの遺跡から遺物が出土している。

古墳時代の遺跡については、集落・古墳ともに存在が知られていない。奈良時代についても遺跡が3箇所存在とされるが、未調査のため明確でない。



第6図 江戸市の遺跡

番号	遺跡名	所在地	種類	番号	遺跡名	所在地	種類
131	次丸館	中島	城	179	唐内洞窟	幕内	住居跡
132	大塚	忠田	館	180	沼尻	城	城跡
米里地区				181	掛の上古墳	横瀬沢田	跡跡? 地
133	天正寺跡	六石刈田	寺	182	上七小星	上小屋	布
134	中島堰	上樋茂井野	敷	183	上七小星	築場・上長沢中間	地
135	火石町古館	白山通	城	184	下七小星	居内前窟西方の山頂	散
136	本山古館	上樋茂井野	城	185	下七小星	下浅倉251	布
137	羽掛山古館	長合沢	城	186	下七小星	宇都良	地
138	角掛山古館	森下	城	187	下七小星	新山	館
139	馬丸洞窟	兄和田	住居	188	下七小星	上伊手	布
140	高丸洞窟	高岡ヶ岡	敷	189	伊谷	荒谷	地
141	高丸洞窟	高岡ヶ岡	敷	190	伊谷	上伊手	館
142	大丸洞窟	大森前	寺	191	伊谷	上伊手口跡	布
143	大丸洞窟	峰ノ後	寺	192	伊谷	下伊手御堂	地
144	大丸洞窟	後沢	寺	193	伊谷	久田	跡
145	大丸洞窟	中樋茂井野後免	敷	194	伊谷	沢田	跡
146	北新田開拓地	北新田	敷	伊手地区			
147	大谷地開墾地	大谷地	敷	195	久富	田	散
148	白山堂	北野	敷	196	久富	小中田戸跡	布
149	白野	野里	敷	197	久富	小中田戸跡94	地
150	鳥谷森合墳	小里原(正子合)	城	198	久富	館下94	館
151	精進	中沢	敷	199	久富	館下松の木田	城
152	小原古	榎岸	敷	200	久富	馬場先	布
153	細	榎岸	敷	201	久富	隅川	地
154	榎	榎岸	敷	202	久富	角屋115	館
155	榎	榎岸	敷	203	久富	上伊手地の神	地
156	古	下谷地	敷	204	久富	上伊手野	跡
157	阿茶山	阿茶山	敷	205	久富	馬場先	館
158	阿茶山	阿茶山	敷	206	久富	久田愛宕	地
159	山居	芦草	敷	207	久富	久田	跡
160	二	二股	敷	208	久富	久田猪の子	地
161	中山屋	中屋敷	敷	209	久富	久田猪の子	跡
162	中山屋	中屋敷	敷	田原地区			
163	根津	根津	敷	210	高野	高野前	散
164	重古	重古	敷	211	高野	下醍醐	布
165	重古	重古	敷	212	高野	下醍醐	地
166	重古	重古	敷	213	石	石原字石山大日前	跡
藤里地区				214	石	石原字御免	地
167	白石	字白石	敷	215	石	石原字石山大日前	跡
168	三州	前村	敷	216	小田代館(城)	小田代	城
169	藤	智福	敷	217	小田代館(城)	小田代	館
170	藤	智福	敷	218	小田代館(城)	小田代	跡
171	智福	山居	敷	219	小田代館(城)	小田代北	跡
172	智福	山居	敷	220	小田代館(城)	小田代天立峠	跡
173	勝草	幕内愛宕山	敷	221	小田代館(城)	河内大直	跡
174	毘沙門洞窟	幕内	敷	222	大田代館(城)	大田代高根下	跡
175	妻の神古墳	中宿	敷	223	大田代館(城)	大田代宿の平	跡
176	若上	若神子	敷	224	大田代館(城)	大平宿の平	跡
177	若上	上長沢	敷	225	大田代館(城)	大平宿の平	跡
178	花立	浅井字藤子山花立	敷				跡

(江刺市史から転載)

Ⅲ 野外調査と整理の方法

1. 野外調査

[調査区の設定と遺構名の命名] (第7図)

調査範囲が東西約100m、南北約10mと東西に長く、さらに平面直角座標第X系の東西座標軸にほぼ平行すること、遺跡全体からみれば調査範囲が10%前後と狭いことから、公共座標軸を利用して調査区を設定した。具体的には、調査範囲の東端に $X = -93605$ 、 $Y = +31720$ を基準点1、同西端に $X = -93605$ 、 $Y = +31624$ の基準点2を設置し、この2点間を結んだ線を基軸線とした。東西方向は基準点2を起点として東に向かって3mごとに33分割し、南北は2点間を結んだ $X = -93605$ を基軸として南に3mごとに2分割、北に同4分割した。調査区の命名は、東西は西から1~34、南北は北からA~Gまで名称を付し、実際の呼称はこの東西と南北の名称を組み合わせて北西隅の交点名からA1、B2、C3のように呼ぶことにした。なお、調査区上の基1はE34、基2はE1の交点に相当する。

[遺構名の命名]

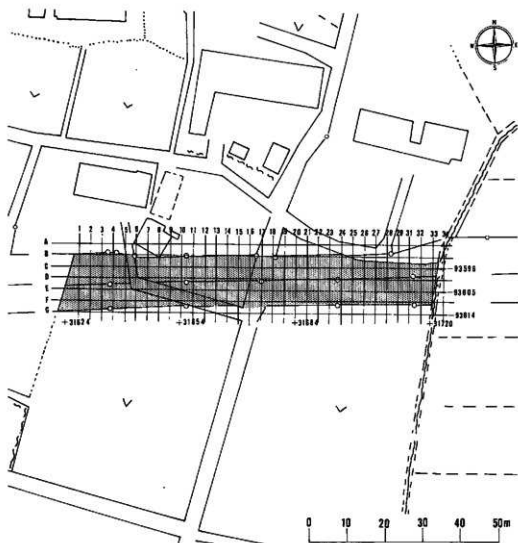
発見の予想された遺構が住居跡、土坑、溝跡等であったことから、遺構の種類名を略号化せずそのまま呼称することとし、それに各遺構が位置する調査区名を組み合わせ、A1住居跡、B2土坑、C3溝跡のように命名し、同調査区内に同種の遺構が複数存在した場合は、A1住居跡-1、同-2とした。予想外であった掘立柱建物跡も同様の方法で遺構名を決定した。

[粗掘りと遺構検出及び精査] (写真図版3A)

地表面に土師器や須恵器の破片が散在するのを確認したこと、県教育委員会事務局文化課による試掘調査によって住居跡の存在が確認されていたことから、粗掘りは全て人手によって行われた。調査前の地目は畑であったが、一部は工事による擾乱を受け土層に乱れがみられた。表土除去に当たって層位ごとに発掘することを旨としたが、Ⅱ層が薄くⅢ層を欠く地点はⅠ層とⅡ層の判別が困難で、同時に除去した部分も多い。

遺構検出はⅡ層、Ⅲ層、Ⅳ層各上面で行ったが、ほとんどの遺構はⅣ層の上面で存在が確認されている。

検出された遺構は、住居跡の場合は4分法、土坑は大型の場合4分法、小型の場合は2分法で精査し、溝跡は適宜土層観察用の畦畔を残して埋土を除去した。掘立柱建物跡では柱穴掘り方を明確に検出した後柱痕跡の確認に留意し、半載して断面観察を行った。



第7図 グリッド配置図

【実測と写真撮影】

検出された遺構は、精査の各段階に合わせてその都度各種の実測を行った。住居跡の場合は、埋土土層図、柱穴や貯蔵穴・カマド等細部の埋土土層図、遺物出土状況の平面図、完掘後全体平面図、カマド断ち割り断面図などの実測図を作成したが、その他の遺構も住居跡に準じて実測図を作成した。実測図の縮尺率は平面図、土層図とも20分の1を基本としたが、カマド関係の土層図や断面図は10分の1で作成した。他の遺構も必要に応じて適宜使い分けた。また、実測図は検出された全遺構について作成した。

写真撮影は、35mmカメラ2台による白黒とカラースライドの2種類、6×7版カメラによる白黒の写真を撮影した。実際の撮影は、各種の埋土堆積状況や各断ち割り断面、遺物の出土状況と各個体別の細部写真、一次と二次の発掘全景と各遺構細部などについて行った。

【室内整理】

野外調査で得られた遺物や実測図、撮影された写真など各種の資料は、室内整理の段階で次のように処理、整理し、報告書作成の基礎にするとともに、資料化を行った。

各実測図は遺構ごとに分類し、それらを一括して整理番号を付した後整理カードに記入して整理し、その後の使用に利便を図った。また、報告書に使用された各種の実測図は、原因を点検の上トレースしたが、作成された実測図の中から選択して使用した。

撮影された写真は、ネガアルバムにベタ焼き写真と一組みにして収納した。カラースライドはスライドファイルに収納した。収納した各アルバムは各ページごとに連番号を付し、さらに1コマごとに連番号を付して整理カードに記入した。報告書にはその中から選択して使用した。

遺物は、現地で水洗いした後出土地点等の注記をした。その後、各出土地点ごとに仕分けを行った後、各出土地点ごとに復元作業を行い、それらは引き続き実測図を作成した。実測図は実物大で作成され、そのままトレースしたが一部はトレース段階に縮小や拡大してトレースした。なお、報告書に掲載した遺物の中で、実測不能のものは写真のみを掲載した。

【報告】

報告書は以上の作業・手順を経た後、その成果を集成して編集したが、報告書の細部や体裁については例言に記した。

IV 検出遺構と出土遺物

本遺跡の発掘調査では、住居跡-7棟、掘立柱建物跡-6棟、土坑-15基、溝跡-7条の遺構と、土師器-破片8199点195個体、須恵器-破片202点49個体、弥生土器-破片267点40個体、縄文土器-破片500点23個体、土製品-3点、石製品-38点、金属製品-14点の遺物が出土している。以下、遺構と遺物に大別してその詳細について記述するが、遺構内から出土した遺物は、出土した当該遺構の項で記述し、大別による遺物の項は遺構外から出土した遺物だけを対象とした。なお、遺跡全体の遺構配置図は第71図に示した。(写真図版1)

1. 遺構と遺構内の遺物

1) 住居跡

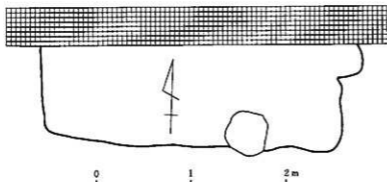
調査範囲の東端に5棟、西端に2棟が分散して位置し、東端の4棟は相互に重複する。

(1) A26住居跡

[遺構] (第8図、写真図版5A)

調査範囲の東端に近いグリットA26・A27にまたがって位置し、北側が調査区外に延びる。掘掘り時に表土直下のⅢ層上面で検出されたが、この付近の表土は層厚25cm位と薄いことと、削平によってⅡ層を欠除することから遺存状態が悪く、層厚1cm弱の黒色土の広がりとして検出された。

検出された規模は東西3.35m、南北1.30m、壁高1cm前後で、隅丸方形の平面形を示すと推定される。主軸方位は不明であるが、南壁はほぼ東西を示す。埋土は若干の炭化物粒や砂粒を含む粘性の強い黒色シルトの単層である。



第8図 A26住居跡

壁の状況は残存不良のため判然としない。床面はしまりがよくほぼ平坦であるが、東方に向かう約5cmの比高で低くなる。壁溝は検出されない。

柱穴と推定される土坑は未検出である。南壁際南東隅部寄りに重複する柱穴状土坑は新しい時期の柱穴状土坑である。

その他、カマドや貯蔵穴などの関連する施設は未検出であるが、カマドは未調査部分に位置する可能性が高い。

[遺物]

全く出土していない。

[遺構の時期]

出土遺物がないため不明であるが、平安時代に位置づけられる可能性が高い。

(2)A28住居跡-1

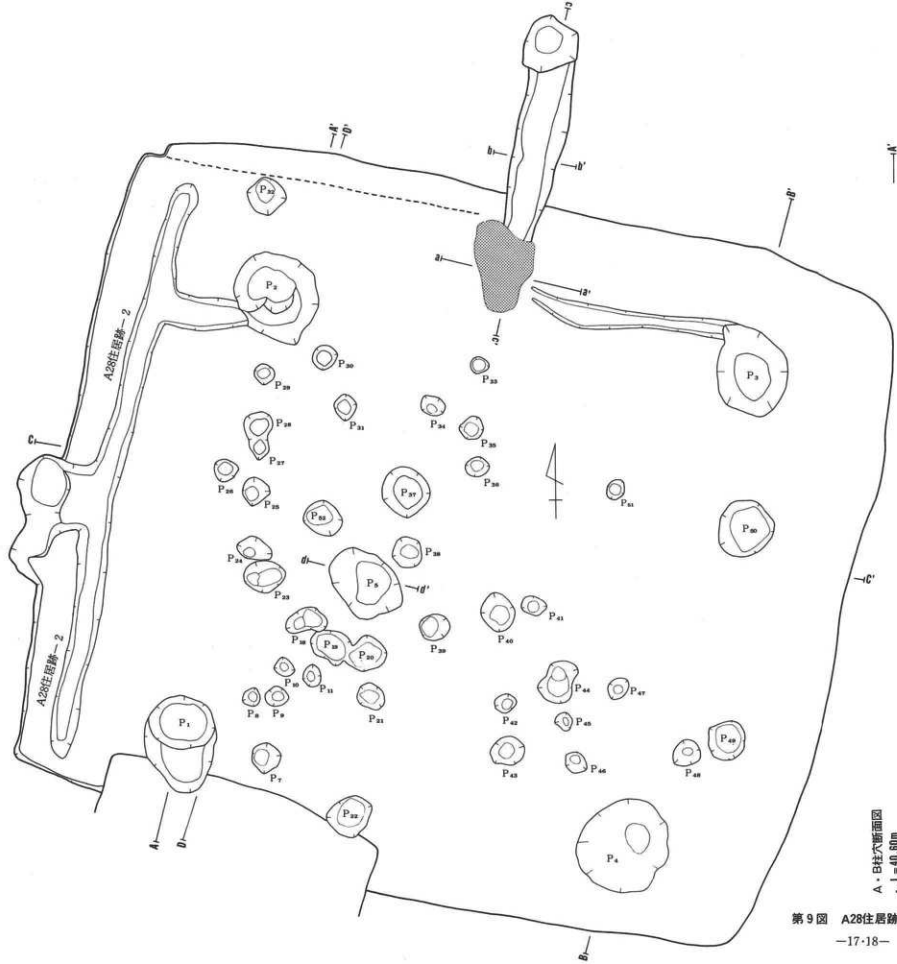
[遺構] (第9図、写真図版6)

調査範囲東端部のグリットA28-31、B28-31、C29-31にまたがって位置し、ほぼ同じ位置でA28住居跡-2と重複するほか、西壁でB27住居跡、南壁の南西隅部寄りでD28住居跡とも重複する。新旧関係はD28住居跡より古いものの、他の2棟より新しい。この付近はA26住居跡同様表土が薄いことによって後世の削平が著しく、東側約半分の壁が消滅している等遺存状態が不良である。

A28住居跡-2と重複する西壁は未検出であるが、床面に掘られた南北方向の溝は壁溝と考えられることと、床面の色調変化から東壁の位置を推定すると、東西約8m南北約7.5mの規模で、平面形は主軸方位をN-13°Eにもつ隅丸の長方形を示すと考えられる。埴土は上層の黒褐色砂質シルトと下層の橙色砂質シルトの地山塊に細分され、上層には黄褐色地山粒、炭化物粒、焼骨片、礫等を混入し、南側の本層に土器片が多量に含まれる。

壁の明瞭な北壁北西隅寄りの壁高が約4cmである以外は、削平や他遺構との重複によって不明であるが、ほぼ直立する壁は僅かな丸味をもって床面と接続する。床はIV層の橙色砂質シルトで構築され貼り床はない。床面には若干起伏があり東側が7cmの比高で低くなる。西壁際と推定される床面に長さ6.2m、幅23cm~33cm、深さ6cm~9cmの溝が南北方向に掘られており、これが壁溝と推定される。また、同溝北端部の南方1.3mから東方に長さ80cm、幅30cm~35cm、深さ8cmで東端がP2と接続する溝と、P3から西方に向かって長さ2.1m、幅15cm~25cm、深さ10cmでカマド左側に連する溝が掘られているが、位置から考えると壁溝とはならない。

床面から46個の柱穴状土坑が検出されている。規模は径10cm台から1mまで各種あり一様でないが、20cm台が19個と最も多く以下30cm台9個、40cm台8個の順でその他は1~2個と少ない。



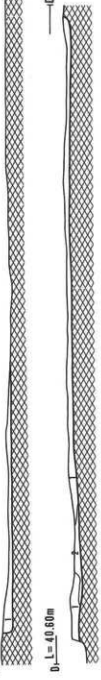
A・B柱穴断面図
A₁L=40.60m



B₁L=40.60m



C₁L=40.60m



A-Aライオン注記

1. 1.5VR1/22 無機色シタト
2. 1.5VR1/24 無機色シタト

B-Bライオン注記

1. 1.5VR1/22 無機色シタト
2. 1.5VR1/24 無機色シタト
3. 1.5VR1/25 無機色シタト
4. 1.5VR1/24 有機色シタト

C-Cライオン注記

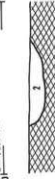
1. 1.5VR1/22 無機色シタト
2. 1.5VR1/24 無機色シタト
3. 1.5VR1/25 無機色シタト
4. 1.5VR1/24 有機色シタト

a・b・cライオンガマド階断面図

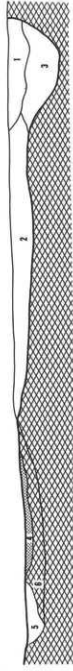
a₁L=40.60m



b₁L=40.60m



c₁L=40.60m



A-28住-1柱穴計量表

階	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂		
1F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
2F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
3F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
4F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
5F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
6F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
7F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
8F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
9F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
10F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
11F	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

※ライオン注記
 1. 1.5VR1/22 無機色シタト
 2. 1.5VR1/24 無機色シタト
 3. 1.5VR1/25 無機色シタト
 4. 1.5VR1/24 有機色シタト
 5. 1.5VR1/25 有機色シタト
 6. 1.5VR1/24 有機色シタト

第9図 A28住居跡-1・2

深さも10cm以下から50cm台まで各種あり、その中で最も多いのは10cm台の18個、10cm以下の9個、20cm台の8個、30cm台の7個であり、平面形は方形気味や円形・楕円形、断面形は円筒形がほとんどである。検出位置をみると、壁寄りには少なく南西部に集中する傾向がある。全体的にみると、平面的な規模は20cm以下の浅い例が多いことは支柱と考えるにも問題がありそうである。規模や位置から考えP1～P4が本住居跡の支柱穴と推定され、ほぼ対角線上に配置されている。貯蔵穴と推定される土坑はない。

カマドは北壁の中央やや西寄りに設置されるが、削平が著しいことにより、燃焼部焼土、煙道部・煙出し部のみが遺存する。袖部は床面上にその痕跡を残しておらず全く不明である。燃焼部の焼土は北壁の南35cmに南北に長袖をもつ東西60cm、南北85cmのやや歪んだ楕円形状に広がり、約10cmの層厚をもつ。煙道部は燃焼部焼土から北壁の北方へ1.7m延び、幅35cm～50cm、深さ5cm～20cmで煙出し部に向かって傾斜する断面が浅いU形に近い溝状をなすが、掘り込み式なのか削り貫き式なのかは不明である。煙出し部は径約55cm、深さ30cmで平面形が楕円形を示す土坑である。

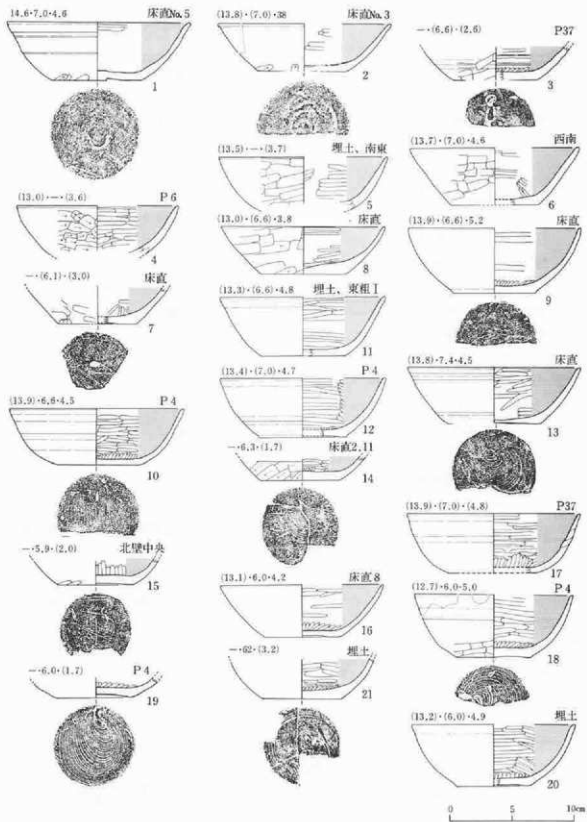
[遺物] (第10～14図1～61、写真図版21～24)

南西部寄りの床面直上や埋土内から少量の須恵器片を含む土師器の破片が多量に出土している。しかし、少破片が多く、その中から61点の実測図や拓本図を掲載した。

土師器

1999点の破片の他実測された55点が出土している。器種には坏・甕・鉢・小型土器があり、各器種とも実測個体を含む。

坏(1～22・24・54～56) 口縁部138点、体部217点、底部132点の合計487点の破片と実測個体26点が出土している。全てロクロ使用成形で3点(54～56)以外は内面が底部横方向か放射状、体部横方向へラミガキ後全面黒色処理される。底部切離し技法には回転糸切り無調整(18～21と他に5点)と同再調整(13～17と他に7点)の他に回転糸切り再調整(1～3の他に3点)を含むが、大多数は底面が全面に及ぶ再調整によって底部切り離し技法が不明である。体部が内湾して外傾(6以外)と直線的に外傾(6)する器形があるものの、前者が圧倒的に多く、体部外面が横方向のヘラズリ調整される個体(4～8)と無調整の個体(9～13・16～21)があり、前者はさらに底部付近のみが調整されるもの(1～3・15)と体部中位付近まで(7)や口縁部まで調整されるもの(4～6・8)に分けられ、調整個体が多い特徴をもつ。大きさは口径が14.6cm～12.7cmであるが平均すると13.5cmとなり、ほとんどは13cm台である。底径は7cm～5.9cmの範囲で平均すると6.5cmとなり、器高は4.8cm～3.8cmで平均4.6cmとなる。このような器形は口径に対して底径が約0.5と比較的底径が大きく、器高が低いことを示している。内面黒色処理されない3点(54～56)は底部切り離し技法が回転糸切り無調整であり、



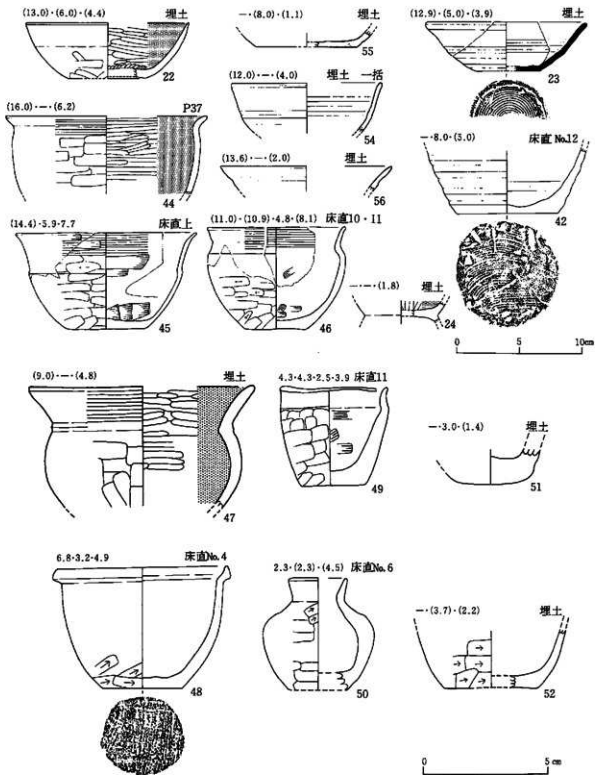
第10図 A28住居跡出土遺物(1)

体部が内湾して外傾（54）や端部が軽く外反する（56）器形がある。体部の内外面や底部内面に再調整は全くなくロクロ目を良く残し、胎土も前者に比較して砂粒の混入が多く全体として粗い。

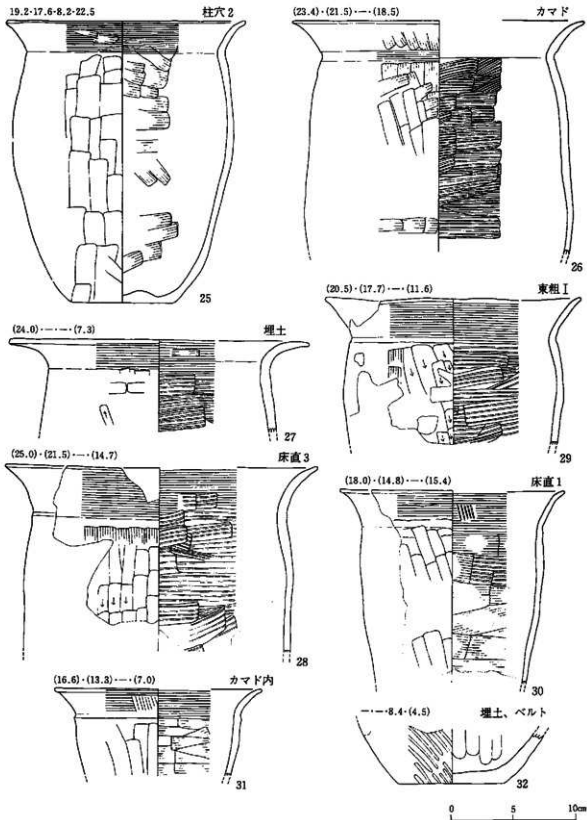
高台付坏（24）一破片1点と実測された1点の2点出土している。いずれも体部～口縁部と高台の疊付部を欠失し、全体的なことは不明である。ロクロ使用成形され、内面が底部放射状・体部縦方向のヘラミガキ後黒色処理されるが、底部切り離し技法は高台の付着によって不明である。高台は貼付け高台であり、高台内底面はナデ調整される。体部外面はロクロ目を残す。

壺（25～42）一口縁部82点、体部1362点、底部29点の合計1473点の破片と18点の実測個体が出土している。ロクロ使用成形の4個体（38～41）と非ロクロ使用成形の8個体（25～32）の2種類あり、その他に体部下位～底部を残す個体も37は前者らしい。他は後者による成形と推定される。器形は前者と後者では若干違いがある。前者は底部から軽く内湾して外傾する体部は中位～上位が直立気味になって頸部に移行し、口縁部は直線的に外反し口唇部は角張って上方に挽き出され受口状をなす。器面調整は外面が縦方向にヘラケズリされ、上位は無調整の例（40・41）や並行叩き目をもつ例がある。内面は縦方向のヘラナデの例が多く、上位は無調整でロクロ目を良く残すものもある。全体的には左右対称の均整のとれた長胴形である。一方、後者の器形は底部から内湾気味に外傾する体部が上位（25）や中位（26）に最大径をもって頸部に向かって軽く傘んだり、底部から体部がほぼ直線的に外傾し、頸部に段をもって口縁部は外反や直線的に外傾する。口縁部は端部に向かって器厚を減らし、口唇部は小さな丸味をもっておさまる。器面調整は、体部が外面に縦方向のヘラケズリ、内面に横方向のヘラナデやハケメ、口縁部は内外面ともヨコナデである。全体的には頸部径と底部径の比率が小さく、前者に比較して器高が低く底部径の大きいズン胴形に近く、左右対称とならない器形を示す例が多い。底部外面に木葉痕をもつ例（33・35）もあるが、ケズリやナデ調整によって不明なものも多く、両者間に差はない。大きさには両者とも大・中・小の3型がある。

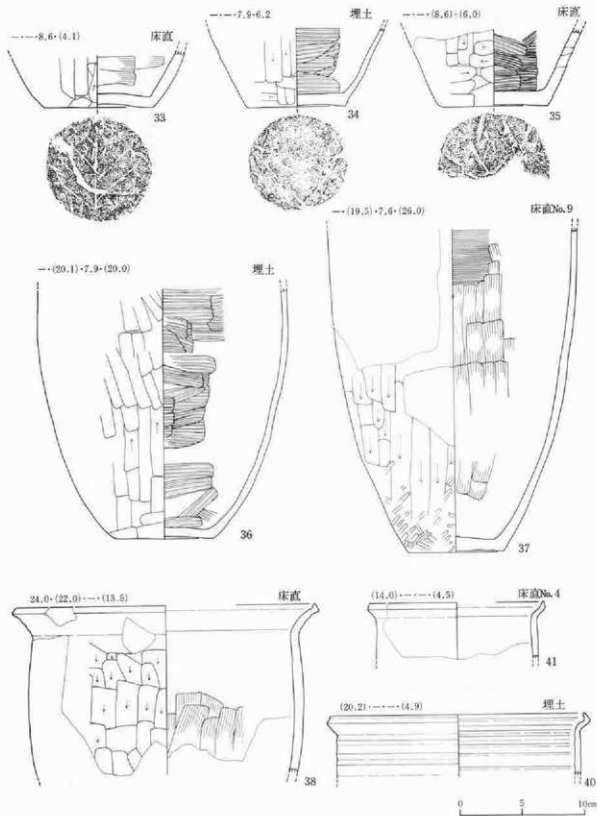
鉢（43～46）一口縁部9点、体部23点の合計32点の破片と4点の実測個体がある。実測個体には内面が全面にミガキ後黒色処理される2点（43・44）と無調整非黒色処理の2点（45・46）があり、破片は全て前者に含まれる。前者の器形は底部径が比較的大きく、体部が球形に近い膨らみをもち、頸部径が大きく口縁部が外反し、口唇部は丸くおさまる。体部の内外面はヘラミガキで調整され、口縁部は外面ヨコナデ、内面はミガキである。後者はロクロ使用成形された可能性が強く、前者より全体的に小型である。底部からやや内湾気味に外傾する器形と強く内湾して外傾する器形の2種があり、両種とも頸部に段をもって口縁部が外反や外傾し、口唇部は小さな丸味をもっておさまる。体部は外面横方向ヘラケズリ、内面ヘラナデで調整され、口縁部は内外面ともヨコナデである。



第11圖 A28住居跡出土遺物(2)

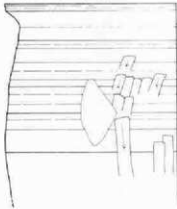


第12図 A28住居跡出土遺物(3)

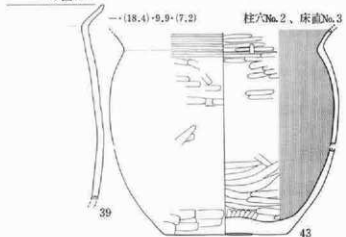


第13图 A28住居跡出土遺物(4)

(27.5)・(27.6)・---(16.0)

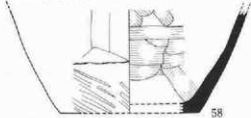


床直10



---(11.1)・8.3

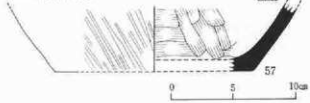
P4



58

---(15.7)・(5.4)

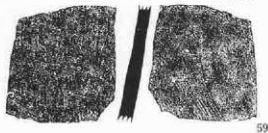
埋土



57

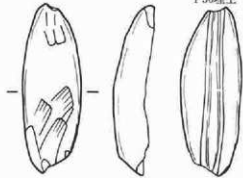
0 5 10cm

床直No.4



59

P50埋土



53

埋土

埋土



60



61



(実大)

第14図 A28住居跡出土遺物(5)

小型土器 (47~52) - 破片 6 点と実測個体 6 点がある。ロクロ使用成形 (48) と非ロクロ使用成形 (47・49~52) の 2 種類あり、器形的には鉢形や甕形 (47~49・51・52) と壺形 (50) がある。さらに先の鉢と同様内面ミガキ後に黒色処理をするもの (47) がある。47 は球胴形に近い体部をもち、頸部で窄んだ後口縁部は大きく外反する。外面は体部ヘラケズリ、口縁部ヨ

コナデ調整される。48は底部から内湾気味に外傾する器形を示し、口縁部が外反した後縁帯状に角張る口唇部は端部が上方に軽く挽きだされて受口状を呈する。底面はヘラケズリされる。52もほぼ48と同様であろう。49～51は手握ね作りで体部外面がヘラケズリ調整される。

須恵器

坏と甕の破片が9点の出土と非常に少ない。その中から実測個体が坏1点、甕体部の拓本3点と実測個体2点を掲載した。

坏(23) 一破片1点と実測個体1点の出土である。ロクロ使用成形され、底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である。口径12.9cm、底径5cm、器高3.9cmである。

甕(57～61) 一破片5点の他体部下位～底部を残す2点がある。57・58は器表に並行叩き目痕やヘラケズリ、内面はヘラナデされる。59は内外面ともヘラケズリやヘラナデされた体部破片で、60は並行叩き具で叩かれた後ロクロ仕上げされた破片で瓶の可能性もある。61は器表に並行叩き目痕、内面ナデ痕をもつ体部破片であり、未掲載のもの61に近い。

その他

土器類の他に半割した土製錘(53)がある。長さ4.5cm・径推定1.6cmで長軸の中心部に円孔が貫通する。全体の形状が細長くなった槌状で、表面がナデられている。

[遺構の時期]

出土した土器器の特徴により、平安時代初期に位置づけられるであろう。

(3) A28住居跡-2

[遺 構] (第9図、写真図版6)

A28住居跡-1西側壁溝の西方40cmに位置する南北に延びる壁と壁溝との間の床面で1棟の住居跡と認定したが、A28住居跡-1、B27住居跡、D28住居跡の重複によって残存部分は僅かである。新旧関係はB27住居跡よりは新しいもの他の住居跡よりは古い。

検出された部分の規模は東西約40cm、南北6.55mで全体形の西端部分に相当する。埋土はA28住居跡-1のそれとほぼ同様であり、黒色シルトの単層である。

壁は外傾して立ち上がり、床面とは若干丸味をもって接続する。床面は平坦でほぼ水平に近く、A28住居跡-1の床面と同位である。

床面からは柱穴状土坑の検出はないが、A28住居跡-1の範囲内から検出された柱穴状土坑の中に本住居跡のそれを含む可能性が高い。貯蔵穴の検出はない。

カマドは検出されていない。位置を推定し得るような焼土の検出もないことから、A28住居跡-1のカマドと重複する可能性が強く、北壁に設置されたと推定される。

以上から本住居跡はA28住居跡-1の前身でほぼ同位置での改築と理解される。

[遺物]

土師器の破片が出土しているが、実測可能な個体はない。器種には坏と甕がある。坏—5点の出土であるが、すべてロクロ成形され内面黒色処理のものである。底部を含まないため切り難し技法は不明である。

甕—小破片を含め11点の出土であり、口縁部2点のほか体部の破片である。口縁部にはロクロ成形と非ロクロ成形を含み、体部は外面ヘラケズリやヘラナダ、内面ヘラナダで調整される。

[遺構の時期]

出土した土師器の様相や重複関係から平安時代初期に位置づけられるのであろう。

(4) B27住居跡

[遺構] (第15図、写真図版5B)

調査区域の東端グリッドB～C27～28にまたがって位置する。本住居跡より古いA28住居跡の西側との重複によって西部約2分の1の検出である。この付近は後世の耕作による剥平によって遺存状態が悪く、北壁は痕跡を残すのみである。

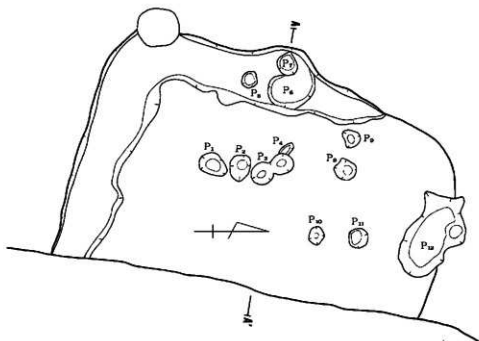
検出された部分は東西2.5m×南北3.9mの規模をもち、平面形は隅丸の方形か長方形をなすと推定され、主軸方位は西壁でN-16°-Eである。埋土は、黄褐色土粒が混じる砂質の黒褐色シルトの単層で構成され、炭化物や若干の土器片が混合する。検出された壁は南壁4cm、西壁3cmの高さがあり、ほぼ垂直であるが、床面とは小さな丸味をもって接続する。西壁の北半部と北壁は床面の広がりからその位置を推定した。床はIV層の橙色砂質シルトで構築され、西壁の南半部～南壁際には幅40cm～65cm、厚さ3cm位の貼り床が観察される。床面はしまり良くほぼ平坦であるが南に向かって僅かに傾斜する。壁溝はないが、貼り床の検出された部分には工具痕と推定される溝状の掘り方がある。幅は既述のとおりであるが、床面から5cm～6cmの深さで底面に起伏をもつが、鑿・鋸の工具を判断できる状況ではない。

床面から柱穴状土坑10個と土坑2基が検出されている。柱穴状土坑はいずれも円形か楕円形を示し、径16cm～30cm、深さ6.5cm～38cmであり、全体として小規模である。位置や規模から推定するとP8が主柱穴の一部である可能性をもつが、南西部で対をなす柱穴は不明である。支柱穴とも理解できるが、後世の耕作に伴う可能性が強い。土坑としたのはP6・P12である。P6は平面形が若干歪むがいずれも楕円形を示し、ともに浅いことから所謂貯蔵穴ではない。埋土は全て黒褐色のシルトのみが堆積する。

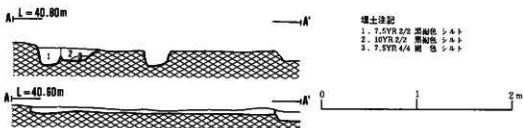
カマドや炉の存在を示す痕跡は全く確認されていない。

[遺物] (第16図、写真図版24)

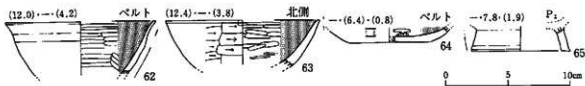
埋土内から土師器の破片が171点実測個体4点が出土している。床面直上からの出土はなく、
 全て埋土からの出土である。



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径	25×30	22×27	24×25	22×25	16×18	43×50	30×24	22×22	19×22	16×20	22×22	50×100
深	12.3	17.0	18.0	17.0	12.0	7.0	12.0	38.0	11.0	15.0	6.5	18.0



第15図 B27住居跡



第16図 B27住居跡出土遺物

土師器

坏(62-65) - 口縁部17点、体部47点、底部11点の75点の破片と、実測された4個体の出土である。全てロク使用成形で内面がミガキ後黒色処理される。体部外面は横方向のヘラズリ調整されるもの(63・64)と無処理のもの(62)があり、前者が量的に多い。底部切り難し技法は回転糸切り無調整(64)と周辺部のみや全面をヘラズリやヘラナデ調整されるものが混在し、主体は後者が占める。大きさは口径12cm台、底径6.4cmである。

甕-96点には口縁部8点、体部87点、底部1点を含むが、いずれも小破片であり実測できたものはない。詳細は不明であるがロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものを含まらしい。体部の外面はヘラズリやヘラナデ調整され、内面はヘラナデやハケメで調整される。

[遺構の時期]

出土した土師器の特徴と重複関係から平安時代初期の住居跡といえよう。

(5) D1住居跡

[遺構] (第17図、写真図版7)

調査区域内で最も西に位置する遺構であり、グリットではC-E1-3にまたがる。近現代の地境溝と推定されるD1溝跡-1・2による攪乱を受け、壁と床の一部は遺存しない。

東西4.10m-4.20m、南北4m-4.35m、壁高10-20cmの規模をもち、壁は若干外傾する。平面形は西壁が若干長い台形気味の隅丸方形をなし、主軸方位はN-0°である。埋土は混入物や色調の違いによって9層に細分されるが、極端な差はない。全体的に1・2・3・4・5・8層の暗褐色を示すシルトが主体を占める。その他3・9層の褐色シルト、6層の黒褐色シルト、7層の黄褐色の砂質シルトに大別され、5・6・7・8・9層は粘性がある。

床は地山IV層の黄褐色粘質シルトで構築され、床面は地山IV層粒が少量混入した暗褐色粘質シルトを数cm貼って床面としており、しまりが良く硬い。凹凸はほとんどなく平坦であるが、南西部に向かって10cm位傾斜する。西壁の南側と南壁の西側を除いた壁際の床面には幅10cm-15cm、深さ3cm-15cmの壁溝が走る。幅はほぼ同じであるが、深さはバラツキがあり、凹凸の著しい部分もみられる。また、カマドの部分も連続し、カマド構築の際に埋めている。

床面や壁外の周辺部から検出された柱穴や貯蔵穴状の土坑はない。

カマドは北壁の中央に設置され、袖部・焚口部・燃焼部・煙道部・煙出し部とも検出された。袖部の規模は、左側が基底の幅10-50cm、上面幅8-40cm、長さ70cm、高さ15cm、焚口部に口径22cm・底径9cm・器高23.2cm、壁際に口径23.2cm・底径10cm・器高29.3cmの2個体の土師器甕を倒立で据えて芯とし、その周囲に黒褐色シルトを貼り付けた構築である。右側は基底の幅20-50cm、上面の幅12-30cm、長さ85cm、高さ15cmで、焚口部に14cm×16cmの断面楕円形で14

cmの長さをもつ円礫を立てて据え、その奥に口径27.5cm、残存器高32.7cm、壁際に口径26.2cm、底径10cm、推定器高35.8cmの土師器甕が倒立で2個体据えられ、その周囲に黒褐色シルトを貼り付けて構築している。袖部全体の規模では、基底部幅が焚口部90cm、奥壁付近1.30m、上面幅が焚口部70cm、奥壁付近1.05m、長さは既述のとおりである。焚口部は幅約40cmで右側には既述した礫を立てて据えていることから、左側にも存在した可能性を示すが、D1溝跡の掘削時に破壊されたと推定される。燃焼部は幅45cm、奥行80cmあり、奥壁で段差をもって煙道部と接続する。焼土は焚口部から中央部付近まで30cm×35cmの範囲に広がり、4cm位の層厚がある。支脚は検出されていない。煙道部は壁外に1.4m延び、幅40cm位、深さ15cmの横断面半円状の溝状を示している。煙出し部は径44cm×55cmの楕円形をなし、検出面から38cm、煙道部底面から18cmの深さがある土坑状を示している。

〔遺物〕 (第18～20図66～90 写真図版24～28)

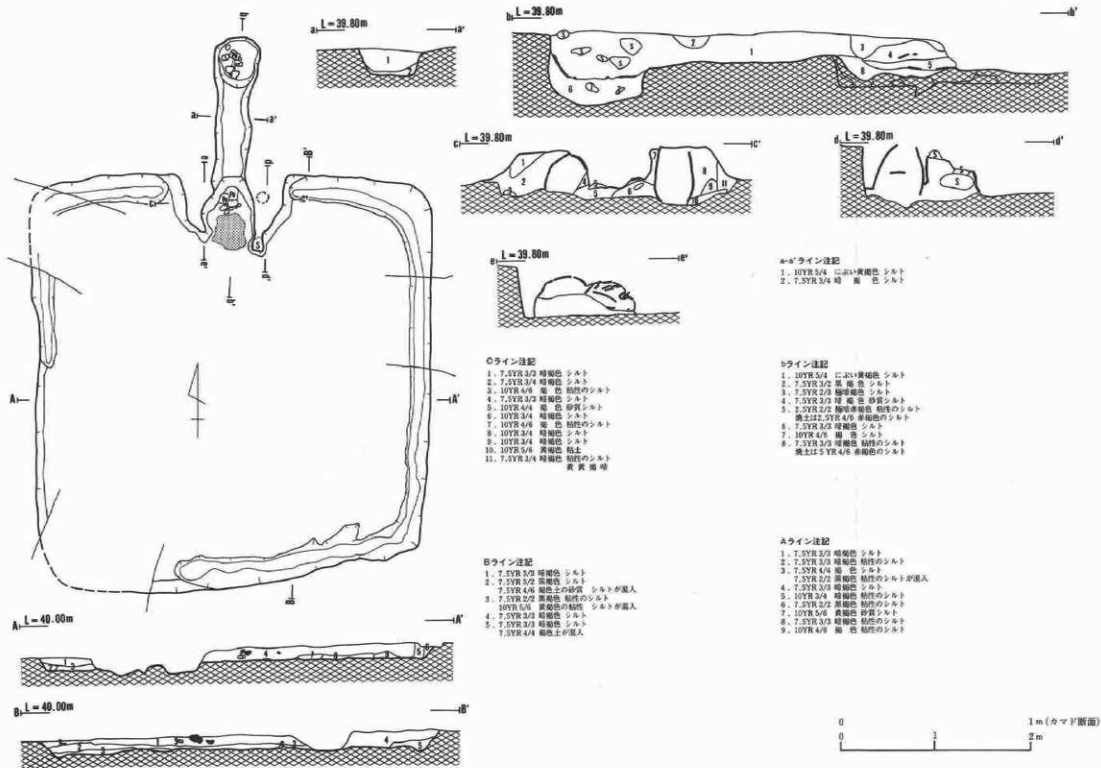
坏49点、甕210点の土師器の破片の他、実測された22点の土師器と1点の須恵器そして須恵器の拓本図作成の1点が出土した。これらは床面の南東隅部寄りとカマド内、カマド左右袖部煙出し部からの出土であるが、床面からの出土は少なく、破片がほとんどである。

土師器

坏(66～69) - 口縁部21点、体部19点、底部9点の合計49点の破片と実測された4個体の出土である。全てロクロ使用成形で、内面がミガキ後黒色処理される。一部の破片に内面が黒色でないものもあるが、いずれもミガキ調整が観察されることから、元来は黒色処理の個体であろう。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整(69)と全面に及ぶヘラケズリやヘラナア再調整によって不明な例(66)があり、量的には後者が圧倒的に多く、再調整が体部下半に及ぶ例も多くある。体部は内湾して外傾(68・69)や直線的に外傾(66・67)する器形である。大きさは口径14.4cm～13.6cm、底径7cm～6cm、器高5.5cm～4.8cmと、A28住居跡-1出土の坏に比較して若干大き目である。

高台付坏(70・71) - 実測された2点の出土である。70はやや浅く皿に近い器形であるが、本稿では坏に分類した。2点ともロクロ使用成形され、内面はミガキ後黒色処理が施される。底部切り離し技法は高台貼り付け時の調整によって不明であるが高台内底面には高台貼付の際の放射状を示す指痕を残している。高台は坏底部の周辺部に八字状に広がる形に貼付され、畳付けは両端が内面に大きく、外面に小さなロクロによる挽き出しがあり、底面中央が僅か凹む。体部外面と高台部内外面にロクロ目を良く残す。体部が内湾気味に大きく外傾する器形を示し、端部は強く外反して垂れ下がる。大きさは口径15.9cm、底径7.1cm～6cm、器高は坏部2.9cm、高台1cmである。71は高台部が剥落し、貼付痕を残している。

甕(72～82) - 口縁部5点、体部202点、底部3点の合計210点の破片と11点の実測個体が出



第17図 D1住居跡

土している。実測個体の内、カマド袖部5点、カマド焼部1点、煙出し部1点がカマドに關係した場所から出土し、その他が床面や埋土内からの出土である。全てロクロ使用成形され、大・中・小の3型がある。大型は器高29cm以上で、カマド東側袖部出土の2点(75・78)、同西側袖部の2点(73・76)、同焼部の1点(74)と同煙出し部の1点(77)の6点が該当する。これらは全て器表の体部上半がロクロ目、同下半が縦方向ヘラケズリの共通した調整を付し、73・74には斜方向に7段並行する並行叩き具痕をもつ。体部内面は単位や方向が不明であるが良くミガかれ、口縁部は内外面ともヨコナデである。体部上・中位に僅かな膨らみをもつ器形を示し、口縁部は強く外反し、口唇部は次第に先細りとなり丸くおさまるもの(72・75・76)と角張って軽く上方に挽きだされて縁帯状をなし、受口状になるもの(77・78)の2型がある。底部外面はヘラケズリやヘラナデが施される。76には輪積み痕を良く残している。大きさは口径23cm～27.5cm、頸部径20.3cm～24cm、体部最大径22cm～28cm、底径10cm前後、器高29.3cm～35.8cmで全体的な器形は長胴形であるが、比較的底径が大きくズン胴形にみえる。中型は72・80・81・88の4個体で器高15cm～22cm位の大きさである。いずれもロクロ使用成形され、器面調整、器形とも大型のそれと同様である。小型は79のみであるが、別器種の小型土器とした83・87と同種に入る可能性がある。その他の特徴は同様である。

鉢(84～86) - 実測した3個体が全てであるが、84は大きさや内面の調整に違いがあり、壺の可能性もある。器表が全面ミガキ調整のため明らかではないが、ロクロ使用成形されたと推定され、内面は横方向のミガキ後全面黒色処理される。大きさは口径19.4cm、底径7.4cm、器高9.2cmである。

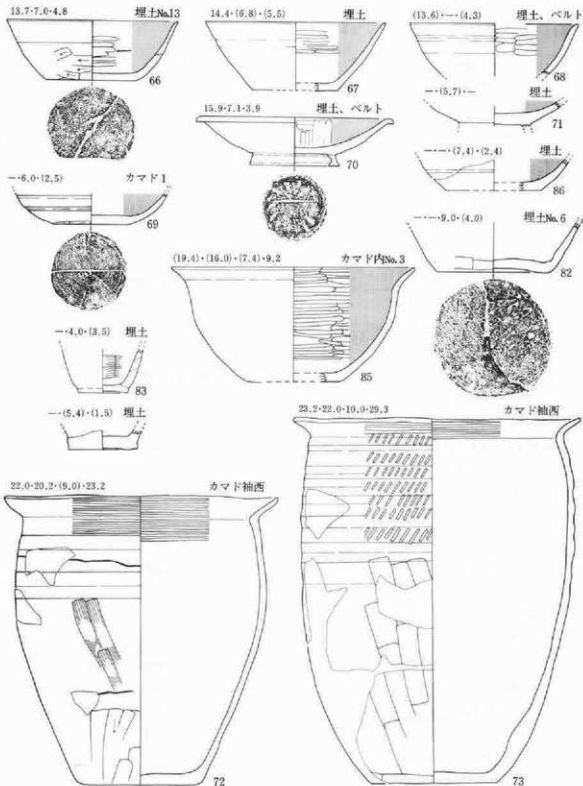
小型土器(83・87) - 実測された2点のみであるが、小型壺に近似した器形を示すであろう。非ロクロ使用成形され、輪積み痕を明瞭に残す個体もある(83)。器表は方向や単位は不明であるがナデやミガキが入り、内面は横方向のヘラナデである。底面の切り離し技法はナデ調整によって不明であるが、上げ底風である。

須恵器

89・90の2点が出土している。ともに甕であるが、89は小型、90は大甕である。89はロクロ使用成形され、底部から直線的に外傾した体部は肩部に最大径をもって頸部で窄む器形を示し、内面はロクロナデ、外面は上位がロクロナデ・下位は縦方向のヘラケズリ調整され、肩部の最大径で23.3cmである。90は内面に粗い並行当て具痕、外面に細かい並行叩き具痕を付した大甕の体部破片である。

[遺構の時期]

出土遺物の属性から平安時代初期に位置づけられよう。

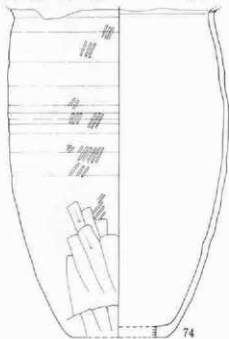


0 5 10cm

第18図 D1住居跡出土遺物(1)

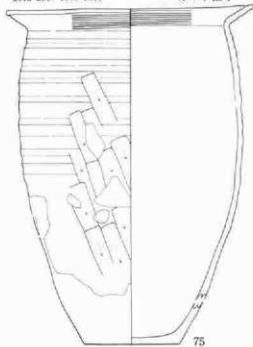
(21.9)・22.6・(10.0)・(34.5)

カマド内



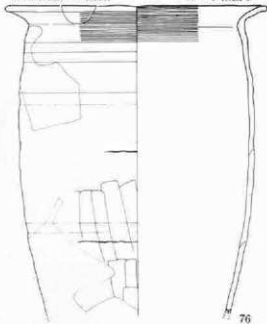
26.2・23.7・10.0・35.8

カマド袖 4



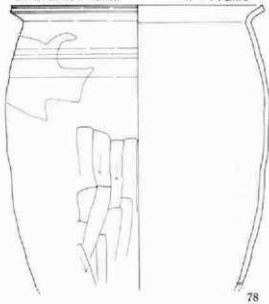
27.5・(24.8)・---・(32.4)

カマド袖西 1



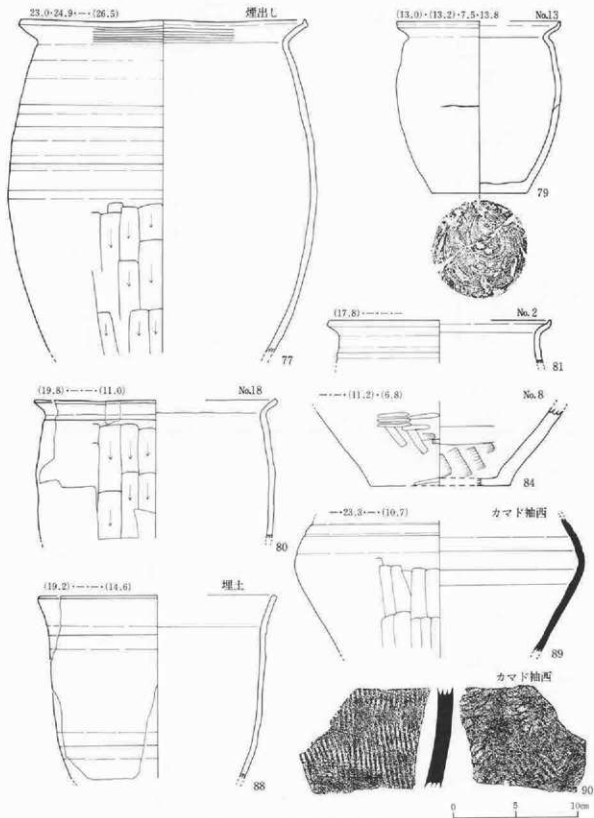
(26.4)・(27.8)・---・(30.0)

カマド内No.1



0 15m

第19図 D1住居跡出土遺物(2)



第20図 D1住居跡出土遺物(3)

(6) D28住居跡

〔遺構〕 (第21図、写真図版8)

調査範囲の東端グリットD～E28～29にまたがって位置し、本住居跡より古いA28住居跡－1・2の南壁と重複する。この付近は耕作による剥平が著しいものの、相互に重複し合う住居跡の中では最も遺存状態が良好である。

東西2.85m、南北3.2mの規模をもち、隅が若干丸味のあるやや歪んだ隅丸長方形を示し、主軸方位はN-115°-Eである。壁高は2cm～12cmで、床面とは僅かの丸味をもって接続し、壁は若干外傾する。埋土は1層黒色シルト、2層黒褐色シルトに細分されるが、色調には大差がない。同層に砂粒や炭化物、土器片が混じるほか、1層に煤、2層に黄褐色砂質シルトブロックの混入があり、全体に粘性をもつ。

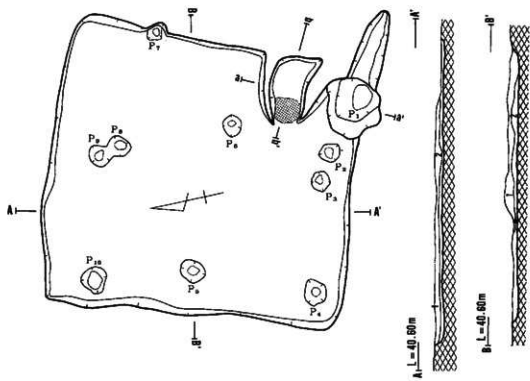
床はIV層の橙褐色砂質シルトで構築され、貼床はない。床面はしまりが良く硬いが、僅かな起伏がみられ、南西部が他より数cm低くなる。壁溝はないが、南東隅部から東南東に幅30cm、長さ75cm、深さ13cmの横断面半円状の溝が延びる。壁との接続部が後述する貯蔵穴状の土坑P1であるため、新旧関係、性格とも明らかでない。

床面や壁に接してP1～P10の土坑が検出されている。P1は南東隅部に位置し、径55cm×63cm、深さ45cmの楕円形を示し、規模や位置からみて柱穴とは考えがたく、貯蔵穴と推定される。P2～P10は径20～28cm×23cm～37cm、深さ5cm～19cmの円形で、位置もほぼ壁に沿う様相を示している。やや浅いP2・P4・P5・P7の例も含むが、その他は15cm～19cmの深さがあり、良く揃っている。位置や規模からP3・P4・P9・P10が支柱穴と考えられ、さらにP2・P4・P5・P6・P8・P10も建て替えによる柱穴と推定される。

カマドは東壁の南東隅部寄りに構築され、袖部・燃焼部のみが検出された。煙道部と天井部は不明である。袖部は左右両側とも褐色や黒褐色のシルトを積み上げて構築し、全体で最大幅80cm、長さ70cmの規模をもち、基底部の掘り込みはない。袖部個別の規模は、左側が基底部の最大幅15cm、検出面の幅5～8cm、高さ5cm位、長さ70cmで、右側は基底部の最大幅25cm、検出面の最大幅19cm、高さ5～7cmである。焚口部は幅20cmでその奥に最大幅35cm、奥行70cmの燃焼部があり、火床は床面と同位の面が続き、奥壁は緩やかに湾曲して立ちあがる。燃焼部の焼土は焚口部付近から奥に30cm×25cmの広がりを持ち、約4cmの層厚があり、支脚はない。煙道部と煙り出し部は未検出であるが、当初からなかったのか後世の削平によって消失した結果であるかは不明である。

〔遺物〕 (第22図99～111、写真図版28・29)

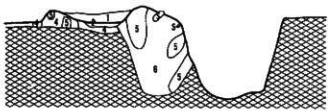
土師器の坏・甕・鉢・小型土器と須恵器の坏・瓶・大甕等722点の破片と、実測された19点の他拓本の2点が出土している。床面直上からの出土は少なく、埋土内の出土が大半を占め



- A・Bライン注記**
 1. 7.5YR 2/1 褐色シルト
 2. 7.5YR 2/2 黒褐色シルト、黄褐色砂質シルトブロック層入

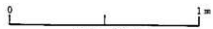


a1 L=40.10m



- a・bライン注記**
 1. 7.5YR 2/2 暗褐色シルト黄土
 2. 焼土
 3. 穴跡を受けて変形している地山層層
 4. 7.5YR 3/2 淡褐色シルト
 5. 7.5YR 5/1 に近い褐色シルト
 6. 7.5YR 2/2 暗褐色粘土質シルト

b1 L=40.10m

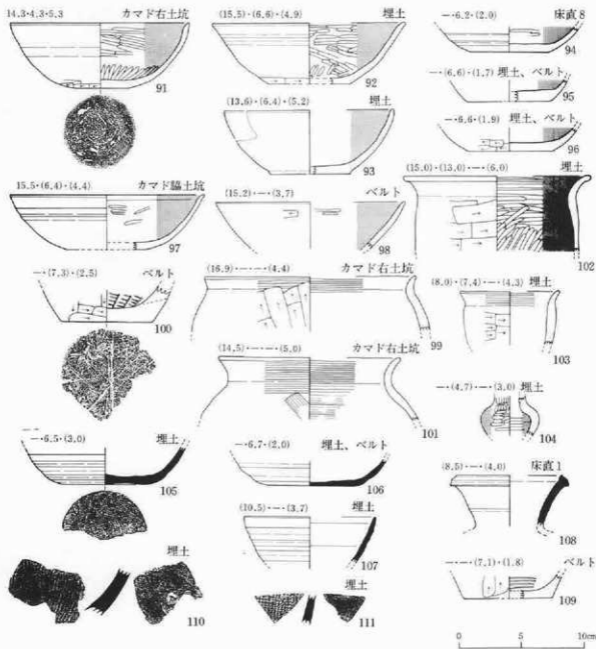


(カマド断面)



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
注	35×63	20×25	20×23	25×25	25×37	20×23	20×20	20×25	25×25	28×28
深	45	10	15	5	8	19	13	15	15	17

第21図 D28住居跡



第22図 D28住居跡出土遺物

ている。

土師器

坏 (91~98) - 口縁部113点、体部107点、底部38点の260点の破片と、実測個体8点がある。
 全てロクロ使用成形で1点以外は内面ミガキ後黒色処理される。底部切り離し技法は回転糸切

り再調整が圧倒的に多く、他に回転糸切り無調整、回転篋切り再調整(91)が若干含まれ、再調整が体部下位に及ぶ例も多い(91・92・96)。体部が内湾して外傾する器形を示し、端部は直立気味と外反するものがある。内面のミガキは底部放射状(91・92)、体部横方向が大半を占める。大きさは口径15.5cm～13.6cmで平均14.8cm、底径が6.6cm～4.3cmで平均6.15cm、器高は5.5cm～4.4cmで平均4.95cmとなり、A28住居跡から出土した坏より若干大型であるが、比較的底径が大きく器高の低い器形的特徴は共通する。

甕(99～101・103・109)一口縁部35点、体部398点、底部5点の破片と実測個体5点が出土している。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものが含まれるが、後者が圧倒的に多い。体部が膨らみをもつ器形があり(99・101)、他住居跡の器形と若干異なる。特に101のような球胴形に近い器形が実測不能な破片の中にも含まれるが、実測不能な破片の大半は長胴形が占めており、変形の器形は長胴形が主体をなす。器面調整は、体部外面がヘラケズリやヘラナデ、内面がヘラナデアやミガキ。口縁部は内外面ともヨコナデである。器形に大小があり、99・101のやや大型と103の小型の2種に分けられる。

鉢(102)一口縁部3点、体部2点、底部1点の6点の破片と実測個体1点がある。ロクロ使用成形で内面がミガキ後黒色処理される。長胴形の甕に近い器形を示し、口縁部は大きく外反し口唇部は丸くおさまる。大きさは口径15cmである。

小型土器(104)―実測した104のみの出土である。非ロクロ使用成形された壺形で、内外面ともミガキ後黒色処理される。口縁部と底部を欠失するため不明であるが、体部径が4.7cmである。

須恵器

坏(105～107)一口縁部3点、体部9点、底部2点の破片の他3点の実測個体が出土している。全てロクロ使用成形され、底部切り離し技法は回転糸切り無調整(106)と同再調整(105)があり、前者が量的に少ない。器形に大小があり、底径6.7cmと6.5cmの大型と口径10.5cmの小型がある。

瓶(108)―実測された1点のみである。ロクロ使用成形の口縁部だけが出土しており、体部器形は不明である。口縁部は大きく外反し、口唇は上・下方に挽きだされ縁帯をなし、受口状を示している。

大甕(110・111)―5点の体部破片と拓本を掲載した2点がある。3点は表面に並行や格子、擬格子叩き具痕をもち、内面は粗い並行当て具痕をもつものとナデによる無文のものである。

[遺構の時期]

出土遺物の特徴は平安時代初期を示すが、A28住居跡との重複による新旧関係から、A28住居跡よりは新しい住居跡である。

(7) F2住居跡

[遺構] (第23図、写真図版9)

調査範囲の西端でグリッドE2～E4、F2～F4にまたがり、D1住居跡の南東1mに位置する。重複する遺構はないが、南側の約2分の1が調査区外へ延びる。

検出された規模は東西5.7m、南北が最大2.8mである。平面形は隅が丸味をもつ方形か長方形と推定され、主軸方位はN-0°である。壁高は最高が東壁の15cm、最低が西壁の5cmで、壁溝のない西壁と北壁の西寄りには床面と僅かな丸味をもって接続し、壁はいずれも軽く外傾する。埋土は全てシルトであるが、色調と混入物の違いによって4層に細分される。1層は南側寄りに堆積する黒褐色のシルトで大量の土師器の破片や炭化物粒が混入する。2層は北壁寄りに堆積する暗褐色のシルトで顕著な混入物はない。3・4層はともに極暗褐色のシルトであるが、3層は砂質で褐色のシルトが混入し、4層には黄褐色シルトと礫が混在する。

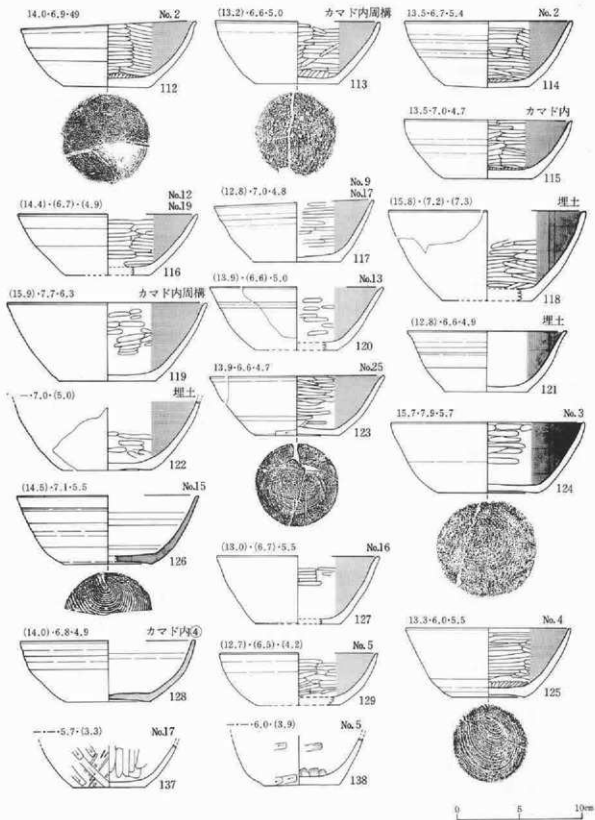
床のほとんどは基本層序IV層の橙褐色砂質シルトで構築されるが、東側には深さ約10cmの掘り方があり、橙褐色砂質シルトと暗褐色シルトの混合土で埋め戻して床面とし、西壁寄りには基本層序III層の暗褐色粘土質シルトをそのまま床面にしている。床面はやや軟弱であるが、ほとんど起伏がなく水平に近い。東壁と西隅部寄りを除いた壁際の床面には幅25cm～20cm、深さ5cm～2cmで断面半円状の壁溝が掘られている。

床面や壁外の周辺部から柱穴や貯蔵穴と考えられる土坑はまったく検出されていない。

カマドは北壁中央のやや東寄りに床面を最大10cm掘り下げて構築され、袖部・焚口部・燃烧部・煙道部・煙り出し部を残存するが、天井部は遺存しない。袖部は褐色～黒褐色のシルトが混合したシルトのみを積み上げており、全体の規模は幅75cm、長さ65cmである。個別にみると、左側は基底部の幅25cm、検出面の幅20cm強、高さ12cm、右側は基底部が幅25cm、検出面の幅15cm、高さ9cmの規模をもち、ともに内側の壁面には黄褐色の粘土質シルト(袖部断面図の3層)を貼り付けて補強している。燃烧部は幅40cm、長さ65cmの広さをもち、焚口部から45cm奥の中央やや左袖寄りに体部下位～底部を残す伏せた土師器臺を支脚としている。火床は床面と同位で奥壁には10cm強の段差があって煙道部と接続する。燃烧部の焼土は焚口部から支脚の手前まで全面的に広がるものの、層厚は数cmである。煙道部は最大幅55cm、最少幅25cm、最深度13cm、最浅部数cm、長さ95cmの溝状をなす断面半円状であるが、掘り込み式なのか削り貫き式なのか不明である。煙り出し部は検出面の径50cm×40cmで、検出面から27cm、煙道部底面から15cmの深さをもつ土坑状を示し、平面形は歪んだ楕円形を呈する。煙道部～煙り出し部は火熱を受けた痕跡を残していない。

[遺物] (第24～26図112～149 写真図版29～32)

カマド右側の壁際、北東隅部寄りの東壁際、カマド左側の袖部前付近の床面、カマド燃烧部、



第24図 F2住居跡出土遺物(1)

煙出し部等から多くの土師器と少量の須恵器が出土している。坏・甕を主とする716点の土師器破片の他、実測した36点の土師器と実測や拓本を作成した7点の須恵器が出土している。その他縄文時代の銅の破片1点と縄文土器もみられる。

土師器

坏 (112~129・151~155) - 口縁部110点、体部175点、底部37点の合計322点の破片と実測された23点の出土であるが、151~155は西壁沿いの風倒木跡からの出土である。全てロクロ使用成形であるが、底部切り離し技法には回転糸切り無調整の他同再調整と全面再調整のため切り離し技法が不明なもの3種類があり、中・後者が圧倒的に多い特徴がある。ほとんどの内面は底面が横方向や放射状のミガキ、体部横方向ミガキであるが、126・128と3個体の破片が内面無調整で非内面黒色処理である。体部が内湾気味に外傾、内湾して外傾、直線気味に外傾する3種類の器形があり、端部も外反や直立気味または外傾し、口唇部は先細りとなって丸くおさまるものが多い。体部外面の下端を再調整する個体も多い。大きさは、口縁部は15.9cm~12.7cmで平均14cm、底径は7.9cm~6cmで平均6.87cm、器高が7.3cm~4.2cmで平均5.24cmとなる。A28住居跡の坏に比較するとやや大型であるが、比較的器高が低くやや底径が大きい特徴は共通している。

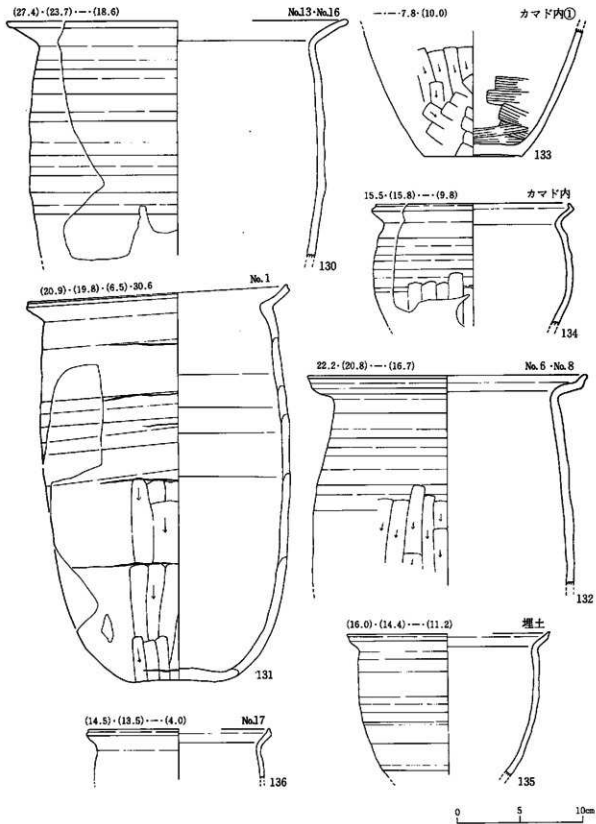
甕 (130~142) - 口縁部31点、体部354点、底部7点の破片と、実測した13個体が出土している。全てロクロ使用成形であるが、131は紐巻き上げロクロ仕上げであり、他にもこの方法による成形のものを含むであろう。器形には口径20cm以上の大型と15cm前後の小型があり、ほとんどは体部下半は縦方向のヘラケズリ調整される。器形は、大型がズン胴形に近い長胴形を示し、小型のものには若干体部が膨らむ例(134)もある。頸部から大きく外傾する口縁部は口唇部が単純に丸くおさまるもの(130・141)と、角形を示すもの(131)、縁帯状に挽きだされて受口となるもの(132・134~136・142)がある。なお、141は内面が良くミガかれていることから鉢である可能性が高い。また、破片の中に器表に粗い並行叩き具痕をもつ例も散見される。

壺 - 実測できる残存状況ではないが、口縁部~肩部を残す破片がある。ロクロ使用成形で頸部~肩部に粗い並行叩き具痕を付し、口縁部は直線的に外傾し口唇部は角張る。

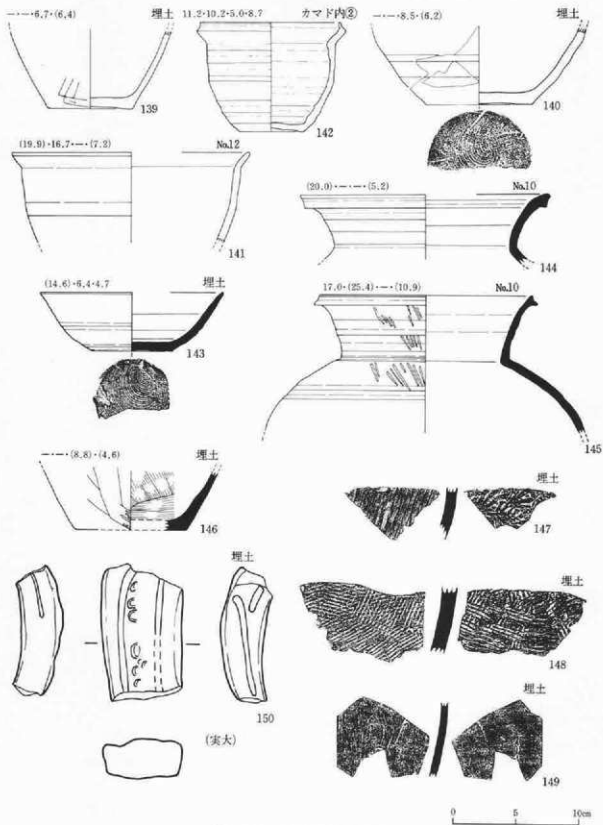
鉢 - 実測不能であるが、内面黒色処理された口縁部の破片がある。器形は甕の141と同様に外反する口縁部であるが、小破片のため詳細は不明である。

須恵器

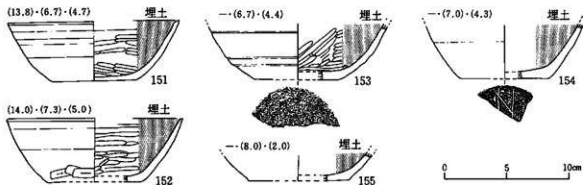
坏 (143) - 実測した1点のみである。ロクロ使用成形され、底部が回転糸切りによって切り離され、無調整である。若干内湾気味に外傾する体部は端部で僅かに外反し、口唇部は小さな丸味をもっておさまる。



第25図 F2住居跡出土遺物(2)



第26図 F2住居跡出土遺物(3)



第27図 F2住居跡出土遺物(4)

甕 (144~149) 一掲載した6点のみの出土である。144・145は広口壺と呼ぶべき器形であるが、ここでは甕に一括する。144・145はロクロ使用成形され、肩部から窄んだ頸部で大きく外反する口縁部は144では縁帯状に挽きだされて受口気味となり、145は下端が外方に突出する形に挽きだされる。145では頸部や肩部寄りに粗い並行叩き具痕をもち、球形体に近似する体部形態を示すらしい。146は体部下位~底部の一部を残す破片である。外面に粗い並行叩き具痕や縦方向のヘラケズリ調整を付し、内面はヘラナアが入る。147・148は大甕の体部破片で、外面に並行叩き具痕をもつ。

縄文土器と土製品

土器は本住居跡とは直接関連しないことから、遺構外の遺物と一括した。土製品は銅の破片である。断面が長方形の板状粘土を円形に成形し、表面と側面に沈線と刺突による文様をもつ。

[遺構の時期]

出土した土器の属性から、平安時代初期に位置づけられるであろう。

2) 掘立柱建物跡

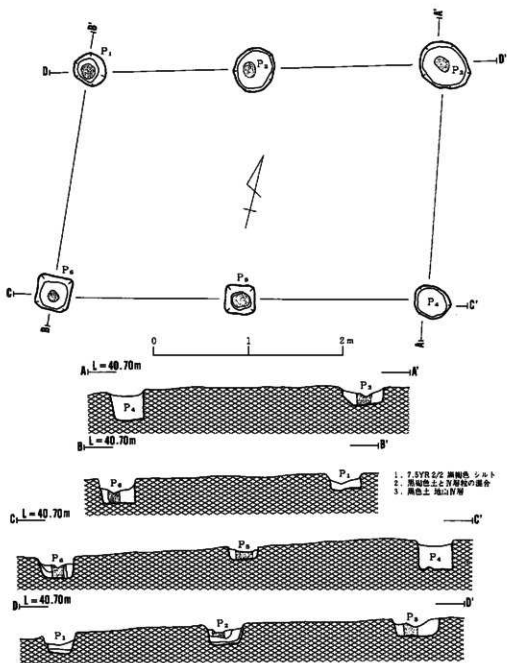
調査範囲の東端から10m西方、同西端から32m東方を除いた約60mの間に6棟が散在する。竪穴式住居跡と掘立柱建物跡が相互に重複することなく、1.5m~12mの距離で位置する。

(1) B10掘立柱建物跡

[遺 構] (第28図、写真図版10A)

調査範囲西端から32m東方のグリッドB10・C10・B11・C11にまたがり、掘立柱建物跡の中では最も西に位置する。南側桁行東端の柱穴がC11土坑と重複するが、本遺構の方が新しい。

桁行の南側柱列が4m(13尺2寸)―2間、同北側柱列は3.7m(12尺2寸)―2間、梁行は東



第28図 B10竪立柱建物跡

側が2.5m(8尺2寸5分)一間、同西側は2.4m(7尺9寸)一間の規模をもち、棟方向がN75°Eを示す東北東-西南西棟である。

桁行の柱間寸法は、南側柱列が東から2m+2m、北側柱列は東から2m+1.7mとなり、1尺を30cmの近似値として換算すると、南側柱列が6.6尺+6.6尺、北側柱列が6.6尺

+5.6尺となり、北側柱列の西側が1尺狭いほかは6.6尺の等間である。梁間は東側と西側に約10cmの差があり、建物全体としてみた場合、四隅が直交せず歪みをもつ長方形を示している。

掘り方の規模は、径32cm～58cmで差がみられるものの4箇所が径30cmである。深さは検出面から14cm～32cmで差がみられるものの20cm台が最も多い。底面レベルの比較では、北側の柱列が南側の柱列より標高が高いたけでなく検出面からの深さも浅い。さらに、西に寄るほど底面レベルが低くなり、検出面の傾斜に比例する状況を示している。平面形には楕円形や円形が4箇所、隅丸方形2箇所、円形気味が主体をなす。埋土は黒色土と明褐色シルト粒子が混合した土で、掘り上げた土をそのまま埋め戻したと推定される。柱痕跡は5箇所を確認されているが、径12cm～18cmの円形である。

[遺物]

P2から土師器3点、縄文土器1点、弥生土器1点、P3から土師器2点、縄文土器か弥生土器3点、縄文石器剥片1点、P4から土師器2点、弥生土器1点、P6から縄文土器4点等の破片が出土しているが、いずれも小破片のため実測できたものはない。

土師器7点には坏5点、甕2点が含まれる。坏はいずれもロクロ使用成形で内面がミガキ後黒色処理される。底部切り難し技法は回転糸切りで周辺部と体部下位がヘラケズリ再調整される。体部が内湾して外傾し、端部が軽く外反する器形を示す。甕は体部破片であるが小破片のため詳細は不明である。

縄文土器・弥生土器一器表に縄文を付す土器が9点出土している。1点は交互刺突による波状浮線文を付す弥生土器口縁部片であるが、他は縄文のみを付すため明確でない。

[遺構の時期]

出土遺物から平安時代か平安時代以降の建物跡と考えられる。

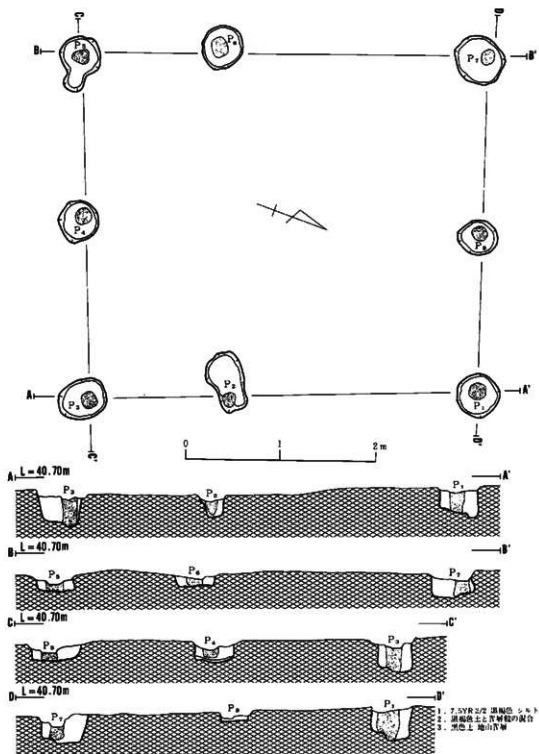
(2) C13掘立柱建物跡

[遺構] (第29図、写真図版10B)

調査範囲西端から37m東方のグリッドC13・C14・D13・D14・D15にまたがり、B10掘立柱建物跡の東方約5mに位置する。他遺構との重複はない。

桁行の東側柱列が4.1m(13尺5寸)―2間、同西側柱列4.25m(14尺)―2間、梁行は南側柱列が3.6m(11尺9寸)―2間、同北側柱列が3.55m(11尺7寸)―2間の規模をもち、棟方向がN20°Wを示す東南東―西北西棟である。

柱間寸法は、桁行の東側柱列が南から1.5m+2.6m、西側柱列は南から1.45m+2.8mとなり、梁行の南側柱列が東から1.9m+1.7m、北側柱列は東から1.7m+1.85mとなる。1尺を30cmの近似値として換算すると、桁行は東側が南から5尺+8.6尺、西側は南から4.8尺+9.3



第29圖 C13獨立柱建物跡

尺となり、梁行は南側が東から6.33尺+5.66尺、北側は東から5.66尺+6.16尺であり、全ての柱間寸法が不揃いで、相対する柱間も等間とならない。特に桁行の東側柱列は15cm（5寸）狭くなっており、北側梁行の両隅が直交しない。

掘り方は径28cm～50cmの規模であるが、41cm～50cmの円形や楕円形を示す例が主体をなし、深さは検出面から15cm～40cmまでバラツキが大きく、底面レベルにも10cm～23cmの差がみられるものの、四隅の柱穴は深く掘られている様相を示す。埋土は黒色土に少量の明褐色シルト粒が混入した土で占められる。柱痕跡は全て確認されたが、それらは径12cm～22cmの円形である。

〔遺物〕

P1から土師器2点、縄文土器か弥生土器8点、P3から土師器1点、縄文土器か弥生土器4点、P4は土師器2点、縄文土器か弥生土器2点、P5は縄文土器か弥生土器4点、P6から土錘1点、P7縄文土器か弥生土器9点、P8縄文土器か弥生土器5点などの破片が出土している。

土師器-5点はいずれもロクロ使用成形された坯の破片で、1点以外は内面がミガキ後黒色処理されている。小破片のため器形等は不明である。

縄文土器・弥生土器-全て器表に縄文を付す体部破片であるが、時期の特定は困難である。

〔遺構の時期〕

出土遺物から平安時代かそれ以降の建物跡といえよう。

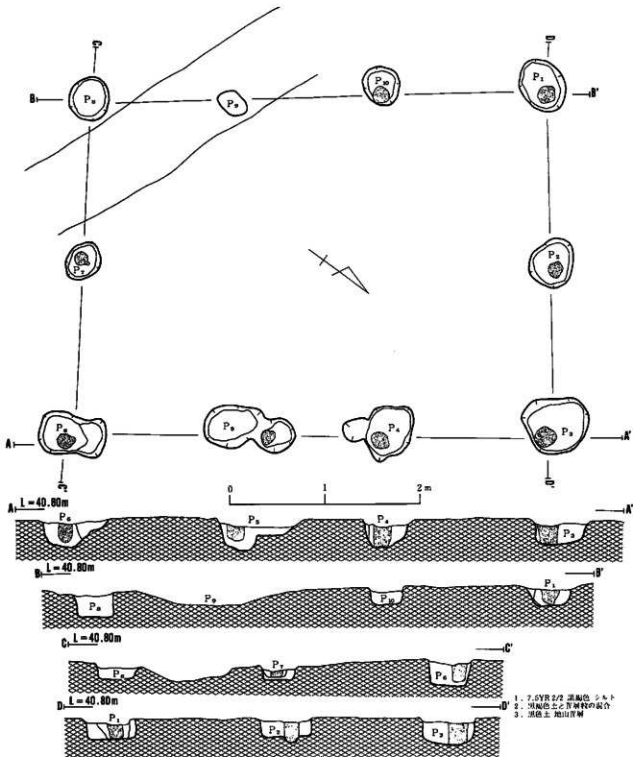
(3) C19掘立柱建物跡

〔遺構〕 (第30図、写真図版11A)

調査範囲の東端から西方35mでグリットC19・C20・D19・D20・D21・E20にまたがり、C13掘立柱建物跡の東方12mに位置する。B14溝跡と重複するが、本建物跡の方が古い。

桁行の東側柱列が5.04m(16尺8寸)―3間、同西側柱列は4.79m(15尺9寸)―3間、梁行は南側柱列が3.62m(12尺)―2間、同北側柱列は3.6m(12尺)―2間の規模をもち、棟方向はN36°Wを示す南東―北西棟である。

柱間寸法は、桁行の東側柱列が南から2.12m+1.18m+1.74m、西側柱列は南から1.45m+1.58m+1.76mとなり、梁行は南側柱列が東から1.91m+1.71m、北側柱列は東から1.76m+1.84mとなる。1尺を30cmの近似値として換算すると、桁行は東側が南から7尺+3.9尺+5.8尺、西側は南から4.8尺+5.26尺+5.86尺となり、梁行は南側が東から6.36尺+5.7尺、北側東から5.86尺+6.13尺であり、梁行全長が同寸法であるが桁行は全長に25cm(8寸強)の差がみられ、桁行の四隅は直交しない。相対する柱間の寸法が全て異なり、桁行北端の柱間が近似するのみである。



第30圖 C19獨立柱建物の跡

掘り方は径38cm～58cmの円形や楕円形を示すが、径40cm台の規模が主体をなし、検出面からの深さは16cm～32cmでバラツキがあるものの26cm～32cmが主体を占め、他の建物跡と比較すると全体として浅めである。底面レベルをみると、桁行西側柱列に13cmの差がある以外は良く揃っている。埴土は黒色土に明褐色シルト粒を少量混入する土で他建物跡の埴土と同様である。柱痕跡は8箇所掘り方で確認されているが、径12cm～20cmと差がみられ径15cm～18cmの円形が最も多い。

〔遺物〕

P 2 から土師器 1 点、縄文土器か弥生土器 2 点、P 3 から土師器 15 点、P 5 は土師器 11 点、縄文土器か弥生土器 3 点、P 6 では土師器 2 点、縄文土器か弥生土器 7 点、P 9 から土師器 6 点、縄文土器か弥生土器 3 点等の出土であるが実測できたものはない。

土師器-23 点は全て甕の破片であり、小破片のため詳細は不明である。器表はヘラケズリ、内面はヘラナアされ、ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものがある。

縄文土器・弥生土器-器表に縄文を付す土器片であるが、時期を特定することは困難である。

〔遺構の時期〕

出土した土師器により平安時代かそれ以降の建物跡であろう。

(4) C22 掘立柱建物跡

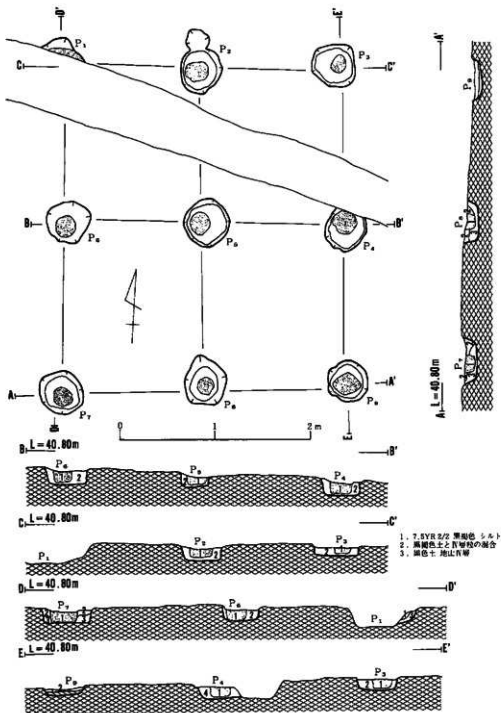
〔遺構〕 (第31図、写真図版11B)

調査範囲の東端から28mのグリッドC22・C23・D22・D23にまたがり、C19掘立柱建物跡の東方約5mに位置する。B19溝跡と重複するが、本建物跡の方が古い。

桁行の東側柱列が3.34m(11尺1寸)―2間、同中間柱列は3.37m(11尺2寸)―2間、同西側柱列が3.39m(11尺3寸)―2間、梁行は南側柱列が2.98m(9尺7寸6分)―2間、同中間柱列は2.9m(9尺6寸6分)―2間、同北側柱列が2.83m(9尺4寸3分)―2間の規模をもち、N2°Wの棟方向を示す総柱の南北棟である。

柱間寸法は、桁行の東側柱列が南から1.7m+1.64m、同中間柱列が南から1.74m+1.63m、同西側柱列が南から1.77m+1.62mとなり、梁行は南側柱列が東から1.47m+1.51m、同中間柱列は東から1.48m+1.41m、同北側柱列が東から1.49m+1.34mである。1尺を30cmの近似値として換算すると、桁行の東側柱列が南から5.66尺+5.46尺、同西側柱列が南から5.9尺+5.4尺となり、梁行は南側柱列が東から4.9尺+5.03尺、同北側柱列は東から4.96尺+4.46尺となり、桁行の北側柱列間の寸法がほぼ等間である以外はいずれも寸法が異なる。その差は全長で桁行が5cm、梁行で15cmあり、そのために建物全体に歪みがあって四隅が直交しない。

掘り方は径42cm～48cmの円形か楕円形を示し、深さは検出面から10cm～20cmとバラツキがあ



り、底面レベルに10cm前後の差がみられる。埋土は他の建物跡と同様に黒色土と明褐色シルト粒が若干混入する。柱痕跡は8箇所を確認され、径15cm～23cmの円形であるが、15cm～20cmの例がもっとも多い。

[遺物]

P2から土師器3点、P3では土師器12点、須恵器1点、P4から縄文土器2点、P5は土師器4点、P6では縄文土器2点、P8から土師器4点、P9では土師器3点の破片が出土しているものの、いずれも小破片のため実測できたものはない。

土師器-26点には4点の坏と22点の甕を含む。坏は全てロクロ使用成形で内面はミガキ後黒色処理され、体部が内湾して外傾し、端部が直立や外反する器形である。甕は体部破片のみでロクロ使用成形と非ロクロ使用成形があり、いずれも器表がヘラケズリ、内面ヘラナデによる調整痕をもつ。

須恵器-瓶の口縁部と考えられる破片が1点出土している。

縄文土器-4点の出土であるが、器表に縄文を付している以外詳細は不明である。

[遺構の時期]

出土遺物から平安時代かそれ以降の建物跡であろう。

(5) D24掘立柱建物跡

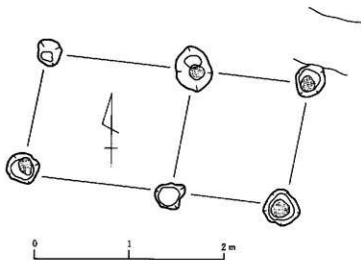
[遺構] (第32図、写真図版12A)

調査範囲の東端から24mのグリッドD24・D25にまたがり、C22掘立柱建物跡の2m東方に位置する。他遺構との重複はない。

桁行の南側柱列が2.72m(9.06尺)―2間、同北側柱列は2.74m(9.13尺)―2間、梁行は東側が1.37m(4.56尺)―1間、同中間は1.29m(4.3尺)―1間、同西側1.19m(3.96尺)―1間の規模をもち、N81°Wの棟方向をもつ東西棟である。

柱間寸法は、桁行の南側柱列は東から1.18m+1.54m、同北側柱列は東から1.17m+1.57m、梁行の東側は1.37m、中間が1.29m、西側は1.19mである。1尺を30cmの近似値として換算すると、桁行の南側柱列は東から3.93尺+5.13尺、同北側が東から3.9尺+5.23尺となる。梁行は東から4.56尺、4.3尺、3.93尺であり、梁行の相対する柱間の寸法は近似しているが、梁行は東側と西側では6寸の差がみられ、四隅が直交せず歪みをもつ。

掘り方は径25cm～38cmの円形や楕円形を示すが、径30cm以上の規模が主体である。深さは検出面から17cm～27cmとバラツキがみられるものの20cm以上のものが多い。底面のレベルにも最大16cm、最少6cmの差がある。埋土は他の建物跡と同様黒色土主体に明褐色シルト粒が若干混入した土である。柱痕跡は4箇所を確認されているが、径15cm～20cmの円形である。



第32図 D24獨立柱建物跡

〔遺物〕

P2から土師器6点、P5から土師器3点、縄文土器3点が出土しているものの、小破片のため実測できたものはない。

土師器-9点には2点の坏と7点の甕がある。坏は全てロクロ使用成形で内面ミガキ後黒色処理され、内湾し

て外傾し端部が直立や外反する器形である。甕は小破片で磨耗が著しく詳細は不明である。

縄文土器-器表に縄文を付したものの以外詳細は明らかでなく、弥生土器を含む可能性もある。

〔遺構の時期〕

出土した土師器から平安時代かそれ以降の建物跡であろう。

(6) E28獨立柱建物跡

〔遺構〕 (第33図、写真図版12B)

調査範囲の東端から13m西方のグリッドE28・E29にまたがり、C24獨立柱建物跡の東方10mに位置する。B19溝跡と重複するが本建物跡の方が古い。また、検出されたのは東西2間の柱列であり、南側調査範囲外に延びて全体的なことは不明である。

柱列は東から2.02m+2.08mの2間で、1尺を30cmの近似値として換算すると東から6.73尺+6.9尺となる。この柱列が桁行なのか梁行なのかは不明である。

掘り方は長辺68cm~78cm、短辺52cm~62cmの長方形を示し、検出面からの深さは30cm~45cmと本遺跡から検出された建物跡の中では最大規模である。埋土は黒色土を主体とするが、若干の明褐色シルト粒が混入し、他建物跡のそれとはほぼ同じ様相を示している。柱痕跡は3箇所確認されており、径18cm~25cmである。

〔遺物〕

P1から土師器3点、P2から土師器2点、縄文土器2点、縄文石器剥片1点、P3では土師器1点、縄文土器5点、縄文石器剥片1点の遺物が出土している。

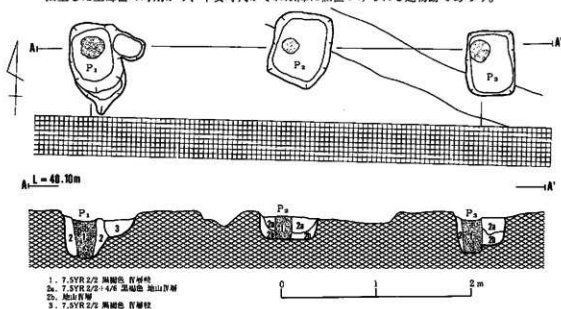
土師器-6点には坏1点と甕5点が含まれる。坏はロクロ使用成形で内面がミガキ後黒色処

理され、底部切り離し技法はヘラケズリ再調整のため不明である。壺は小破片のため全体的なことは把握し得ないが、器表がヘラケズリ、内面がヘラナデされる破片である。底部が全面ヘラナデされる例もある。

縄文土器—器表に縄文を付したものの以外詳細は不明であり、弥生土器を含む可能性もある。

[遺構の時期]

出土した土師器の時期から、平安時代かそれ以降に位置づけられる建物跡であろう。



第33図 E28獨立柱建物跡

3) 土坑

検出された15基は調査範囲の東半に2基、西半に13基が分散して位置するが、西半のそれも中央部寄りに11基が密集し、西端寄りに2基ある。

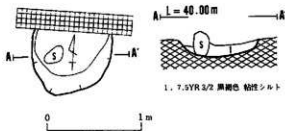
(1) B3土坑

[遺構] (第34図、写真図版13)

調査範囲の西端から11m、グリッドB3に位置し、他遺構との重複はない。北側が調査範囲外に延びており、全体的なことは不明である。

全体が検出された東西は径85cm、一部未調査の南北は径65cm以上の規模をもち、円形か楕円形の平面形を示すと推定される。最深の中央部で10cm～12cmの深さがあり、断面形は浅皿形を示している。底面に凹凸はないが壁寄りほど高くなり、壁とは丸味をもって接続し壁は外傾す

る。埋土は黒褐色の粘性シルトのみが堆積し、西壁寄りには底面に接して径25cm×15cmの隅が丸くなる歪んだ三角形状で高さ25cmの礫がある。単層ではあるが人為的な埋戻しを示す状況は観察されず、自然堆積による埋没と考えられる。



第34図 (1) B3土坑

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

時期を特定する資料を欠くが、検出面や埋土の土質等から平安時代に属すると推定される。

(2) B13土坑

[遺構] (第35図、写真図版13)

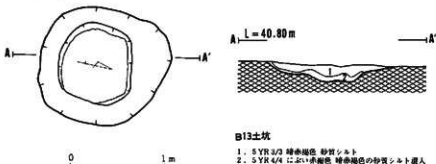
調査範囲の中央やや西寄りのグリッドB13・C13にまたがって位置し、北側で本土坑より新しい柱穴状小土坑1箇所と重複する。

検出面が東西径1.25m×南北径1.4m、底面が東西径86cm・南北径77cm位の規模をもち、突辺隅丸方形に近い北壁が突出する楕円形を呈する。最も深い中央部で20cm位の深さがあり、底面には大きな起伏がある。全体が段状を示し、壁とは丸味をもって接続する。壁が大きく外傾し、浅皿形の断面形である。

埋土は2層からなり、上位の1層は暗赤褐色の砂質シルトで、その下位の2層にはぶい赤褐色の粘性シルトに暗赤褐色の砂質シルトが混入する。堆積には人為的な痕跡は観察されないことから自然埋没による堆積であろう。

[遺物]

出土していない。



B13土坑

1. 5YR 3/3 暗赤褐色 砂質シルト
2. 5YR 4/4 ぶい赤褐色 暗赤褐色の砂質シルト混入

第35図 (2) B13土坑

[遺構の時期]

遺物の出土はないが、埋土の土性が平安時代の住居跡と近似しており、本土坑も近接する時期の遺構と推定される。

(3) B16土坑

[遺 構] (第36図、写真図版13)

調査範囲の中央で西端から50m東のグリッドB16・C16にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

長軸1.8m、短軸27cm～42cmの規模をもち、長軸をN37°Wにもつ長方形気味の長楕円形である。最も深い部分が18cmであるが、北西端は10cm～12cmと高くなる二段底をなす。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、低い底面の北西側に径13cmの円形や楕円形で、深さ5cmの斜めに刺した杭穴が2箇所ある。底面と壁は丸味をもって接続し、壁は僅かに外傾する。

埋土は暗褐色シルトの単層で、自然堆積による埋没である。

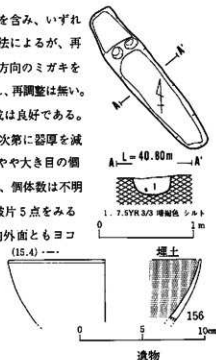
[遺 物] (第36図156、写真図版32)

埋土内から土師器の坏や甕の破片が66点出土している。しかし、小破片が多く実測できたのは坏1点のみである。

坏(156)―出土した3点には口縁部2点、底部1点を含み、いずれもロクロ使用成形で、底部の切り離しは回転寛切り技法によるが、再調整の有無は不明である。内面は底面が放射状、体部横方向のミガキを施した後黒色処理される。外面にはロクロ目を良く残し、再調整は無い。胎土には比較的石英粒や砂粒の混入が多いものの、焼成は良好である。実測した156は口縁部～体部を残し、口縁部に向かって次第に器厚を減らし内湾して外傾する器形である。推定口径15.4cmでやや大き目の個体である。甕―63点の破片があるものの小破片が多く、個体数は不明である。いずれも非ロクロ使用成形である。口縁部の破片5点を見ると、全て断面が先細りとなって外反する形状を示し、内外面ともヨコナデで口唇部を角形に挽き出すものはない。体部は縦方向のヘラケズリやヘラナデによる調整が施され、内面は横方向のハケメ状の筧の木口によるナデ調整である。底部の状況は破片がないため不明である。

[遺構の時期]

出土した土師器の内、坏がロクロ使用成形、甕が非



第36図 (3) B16土坑

ロクロ使用成形の組み合わせは本遺跡のA28住居跡の出土状況と同様であり、9世紀初期頃の遺構であろうか。

(4) B24土坑

【遺 構】 (第37図、写真図版14)

調査範囲の東端から23m西方のグリットB24・B25にまたがり、検出された土坑の中で最も東に位置する。他遺構との重複はない。

東西1.3m×南北1.35mの規模をもち、平面形は楕円形である。深さは最深部で28cmあり、底面に小凹凸がある。底面と壁面の接続部は丸味をもち、円弧状の断面形を示している。

埋土は3層に細分される。最上層の1層と2層は黒色のシルトであるが、2層には炭化物が混入する違いがある。最下層の3層は、黒色シルトに黄褐色土粒が多量に混じる。1層と2層には礫の混入もみられる。堆積の状況には人為的な痕跡は認められず、自然堆積による埋没と考えられる。

【遺 物】 (第37図157・158、写真図版32)

土師器の坏と甕の破片20点と須恵器大甕の破片2点が出土している。いずれも小破片のため実測不能であり、須恵器2点を拓本で掲載した。

土師器

坏一小破片が7点出土している。全てロクロ使用成形で内面が黒色処理される体部の破片である。

甕-13点の破片を含むが、いずれも体部破片である。小破片のため成形技法の不明な破片が多い。器表は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデされる個体が多い。

須恵器

大甕 (157・158) -157は外面に横方向の並行叩き具痕、内面に放射状当て具痕をもつ破片で、若干砂粒が混入し濃灰色を呈する。158は外面が縦方向、内面が斜方向の並行叩き具、同当て具の痕跡をもつ大型品の体部破片で、砂粒の混入はほとんどなく、褐



第37図 (4)B24土坑

遺物

灰色である。

鉄製品 (第64図、写真図版37)

釘(8) 一長さ3.1cm、重さ2.2gで先端部を欠失する。

[遺構の時期]

断定はできないが、遺物や埋土の状況から平安時代の土坑であろう。

(5) C5土坑

[遺構] (第38図、写真図版14)

調査範囲の西端から東へ16mのグリッドC5に位置し、他遺構との重複はない。

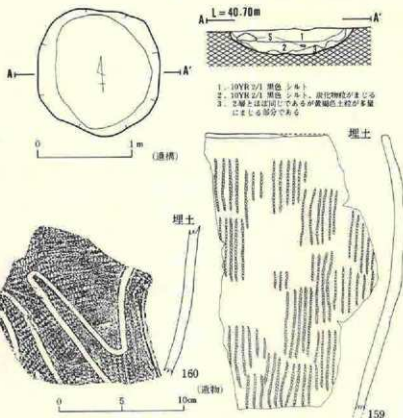
東西1.05m×南北1.1mの規模をもち、平面形は楕円形である。最も深い中央部で25cmの深さをもつ。底面は平坦で凹凸はないが壁に寄るほど次第に高くなり、壁とは丸味をもって接続し、壁は外傾する。

埋土は暗褐色、極暗褐色、褐色等を示すシルトや砂質シルトが堆積し、3層に細分される。1層は暗褐色シルトであるが、2層は濃淡のある褐色の砂質シルト、3層は極暗褐色のシルトに褐色の砂質シルトが混入する土である。土層がレンズ状の堆積であることから、自然堆積による埋没であろう。

[遺物] (第38図159・160、写真図版33)

縄文土器の破片が32点出土している。この中には2個体の破片が含まれる。

縄文土器(159・160) 159は31点の破片があり、口縁部一帯部下位までを含む。体部上位に最大径をもち、器表に単輪条体縦回転による縦方向撫糸文を



第38図 (5) C5土坑

付すが、口縁部は無文である。胎土は砂粒が多量に混じり、焼成は二次火熱によって非常にしろい。160は1点のみで体部上位の破片である。器表全面に原体LRの横～斜下回転による単節縄文を付した後径5mmの丸棒による沈線文が施される。胎土には砂粒が多量に入り、焼成は良好である。

[遺構の時期]

出土した遺物により、縄文時代中期末～後期初頭頃に位置づけられるであろう。

(6) C11土坑

[遺 構] (第39図、写真図版13)

調査範囲西端から36m東のグリッドC11・C12にまたがり、中央密集部では最も西に位置する。B10掘立柱建物跡の南東部柱穴掘り方と重複するが、本土坑の方が古い。

東西50cm×南北1.25mの規模をもち、長軸がN27°Wを示す隅丸長方形の平面形である。最も深い中央部で37cmの深さがあり、底面には小凹凸がみられる。断面は短軸が浅い箱形、長軸では南壁はほぼ直立するが北壁は大きく外傾している。

埋土は2層に細分され、1・2層とも砂質シルトであるが、1層は暗褐色、2層は褐色と色調に違いがみられる。人為的な堆積状況は観察されないことから自然堆積による埋没と考えられる。

[遺 物]

埋土内から土師器の坏と甕の破片が29点出土しているが、いずれも小破片のため実測不能であり、全体的なことは不明である。

坏-4点の体部破片であるが、全てロクロ使用成形の個体で内面が黒色処理される。内外面の調整は磨耗のため不明である。

甕-25点の破片を含むが、底部1点以外は体部の破片である。全て磨耗が著しく器面調整が不明瞭であり、成形技法も定かでない。底部の周辺部が突出する形状を示すらしい。

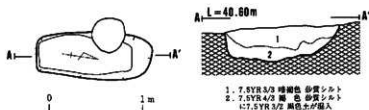
[遺構の時期]

出土した坏の成形技法により平安時代の土坑といえよう。

(7) C12土坑

[遺 構] (第40図、写真図版14)

調査範囲西端から38mのグリッドC12に位置し、本土坑よ



第39図 (6)C11土坑

り新しいB12溝跡と重複する。

開口部径が東西45cm×南北57cm、底面径東西50cm×南北62cmの規模をもち、南北に長軸をもつ楕円形である。最も深い中央部で30cmの深さがあり、断面形はフラスコ形である。底面には僅かな起伏があり壁に寄るほど高くなる傾向があり、壁とは丸味をもって接続し壁は内傾する。

埋土は7層に細分されるが、1層は重複するB12溝跡の埋土であることから本土坑の埋土は6層である。2層～4層はともに褐色の砂質シルトであるが、色調に微妙な違いがみられる。5層は暗褐色の砂質シルトで7層もほぼ同様である。6層は黒褐色の粘土質シルトである。層相を観察すると、2～5層は東側から流入した堆積状況を示し、6・7層は水平堆積であることから、人為的に東側から投入された可能性を示している。

[遺物]

埋土内から土師器や縄文土器の土器類19点の破片と石器剥片3点が出土している。いずれも小破片のため実測可能なものはない。

土師器

坏の破片2点と甕の破片10点が含まれる。

坏はいずれもロクロ使用成形され、1点は内面黒色処理され、他の1点は無処理である。器厚が比較的厚く端部が肥厚する個体と全体的に薄く端部が軽く外反する2種類あるものの、両者とも磨耗が著しくもろい。

甕10点の破片は口縁部1点以外は体部の破片である。いずれも磨耗がはげしく詳細は不明であるが、ロクロ使用成形の個体は含まず、全て非ロクロ使用成形らしい。数個体の破片を含むため器形を特定できないが、頸部で窄んで端部が大きく外反する個体を含む。

縄文土器

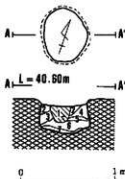
器表に原体L R縦回転による縄文を施文する4点、沈線や刺突による文様を付した3点、原体R L縦回転による縄文と沈線による文様をもつ1点がある。文様や縄文、胎土の状況から弥生土器が含まれる可能性がある。

石器剥片

頁岩2点、玉髓1点であるが、前者はともにヒンジフラクチャーをおこした剥片で、後者は小剥片である。

[遺構の時期]

出土した遺物には他の



1. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質シルト (B12溝)
2. 7.5YR 4/4 褐色 砂質シルト
3. 7.5YR 4/3 褐色 砂質シルト
4. 7.5YR 4/4 褐色 砂(質)
5. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質シルト
6. 7.5YR 3/2 黒褐色 粘性のシルト
7. 7.5YR 3/5 暗褐色 砂質シルト

第40図 (7)C12土坑

時代のものを含むが、最も新しい時期の土師器の特徴から平安時代の土坑と考えられる。

(8) C14土坑

[遺構] (第41図、写真図版15)

調査範囲の西端から34m東方のグリッドC14・D14にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

東西68cm×南北1.1mの規模をもち、平面形は長軸をN32°Wにもつ隅丸の長方形を示すが、南隅部の壁が外方に半円状に突出する。最深の南東部で25cmの深さがあり、北に寄るほど浅くなる。断面形は短軸が浅い箱形であるが、長軸は皿形に近い形状である。底面は平坦で凹凸がなく壁と小さな丸味をもって接続し、壁は僅かに外傾する。

埋土は2層に分けられる。両者ともに砂質シルトであるが、1層は黒褐色、2層は褐色と色調に違いがみられる。堆積状況に人為的な痕跡はみられないが、全体的に軟弱な堆積状況を示し、自然堆積による埋没とは考えられない。

[遺物] (第41図、写真図版32)

土師器の破片46点と磁器1点が出土している。

土師器

坏11点、甕35点の破片を含むが、全て小破片で実測可能な個体はない。

坏一全てロクロ使用成形され、内面はヘラミガキされた後黒色処理を施している。口縁部～体部は内湾して外反する器形を示し、器厚は口縁部ほど薄くなる。器表にはロクロ目を良く残し、再調整の痕跡はない。

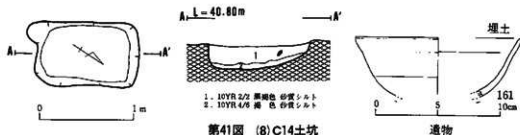
甕一ロクロ使用成形のものとは非ロクロ使用成形の2種類を含むが、数量的には後者の方が多。小破片が多く全体的なことについては不明である。

磁器 (161)

内外面にガラス質の褐色釉が施された口縁部～腰部を残す碗の破片が1点出土している。

[遺構の時期]

遺物の出土量では土師器が多いものの、一見して最近の製品と考えられる磁器碗の出土によ



り、最近の土坑であることは確実であろう。

(9) C21土坑

〔遺構〕 (第42図、写真図版15)

調査範囲の東端から33m西グリッドC21・C22にまたがって位置し、北西部で本土坑より新しい柱穴状土坑と2箇所重複する。

東西2.25m×南北1.8mの規模をもち、東西に長軸を示すやや歪んだ楕円形の平面形である。最も深い西半部で20cm、浅い東半部で10cm前後の深さがあり、断面形は浅皿形である。底面には小さな起伏があり、壁とは丸味をもって接続し、壁は外傾する。

埋土は黒褐色の砂質シルトのみが堆積し、黄褐色の砂質粘土粒が多量に混入する。人為的な埋没を示す痕跡は観察されていない。

〔遺物〕 (第42図162・163、写真図版32)

土師器の坏や甕の破片84点と須恵器の甕破片1点が出土している。小破片が多く実測できたのは土師器甕の底部寄り1点のみで、他に須恵器の拓本を掲載した。

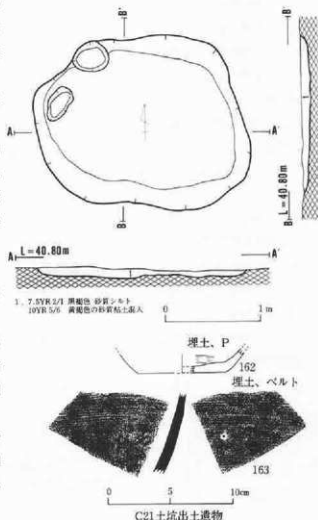
土師器

坏6点と甕7点・壺1点の破片を含む。

坏一全て小破片であるが、いずれもロクロ使用成形され、外面は横方向のヘラケズリ調整で内面は体部横方向ヘラミガキ後黒色処理される。

甕(162)一非ロクロ使用成形で体部外面は縦方向のヘラケズリ、同内面は甕の本口によるハケメ状のヘラケズリで調整される。

壺一頸部～肩部寄りを残す破片で



第42図 (9) C21土坑

1点の出土である。非ロクロ使用成形で外面が横方向のヘラケズリ調整される。

[遺構の時期]

出土した遺物により平安時代に属するであろう。

(10) C24土坑

[遺 構] (第43図、写真図版15)

調査範囲の東端から25m西のグリッドB24・C24にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

東西65cm×南北60cmの規模をもち、平面形は東西に長軸をもつ隅丸方形気味である。深さは最も深い中央部やや西寄りで20cmあり、断面形は皿形である。底面に凹凸はないが壁に寄るほど高くなる傾向があり、壁とは丸味をもって接続し、外傾する。

埋土は黒褐色を示す砂質シルトの単層である。人為的な堆積状況は観察されないことから、自然堆積による埋没であろう。

[遺 物]

出土していない。

[遺構の時期]

推定できる状況ではないが、平面形と埋土の類似性から平安時代に位置づけられるのであろう。

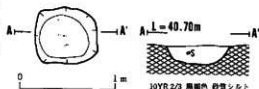
(11) D10土坑

[遺 構] (第44図、写真図版16)

調査範囲の西端から32m東方のグリッドD10に位置し、他遺構との重複はない。

東西85cm×南北1.1mの規模をもち、平面形は不整な楕円形である。深さは最も深い南壁寄りで17cm、浅い北壁寄りで10cmであり、断面形は浅皿形である。底面は平坦であるが北壁に寄るほど高くなり約7cmの比高を示し、壁とは丸味をもって接続し、外傾する。

埋土は2層に細分される。上層の1層は暗褐色を示す砂質シルト、下位の2層は黄褐色の砂質シルトが堆積する。2層の上面には起伏があり、自然堆積による埋没とみるには難点がある。



第43図 (10) C24土坑

[遺 物]

出土していない。

[遺構の時期]

平面形が不規則であること、埋土の堆積状況が他の土坑と異なることから、比較的新しい時

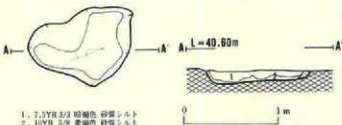
期の耕作等に伴う土坑の可能性が高い。

(12) D13土坑

〔遺構〕 (第44図、写真図版16)

調査範囲の西端から38m東方のグリッドD13に位置し、他遺構との重複はない。

東西72cm×南北55cmの規模をもち、平面形は東西に長軸を示す隅丸長方形である。深さは最も深い東壁寄りで15cmあり、断面形は浅い箱形に近い形状を示している。底面は凹凸もなく平坦で中央やや東壁寄りが最も低く壁に寄るほど僅かに高くなり、



第44図 (1) D10土坑

壁とは小さな丸味をもって接続し、直立気味を示す部分が多く東壁は軽く外傾する。

埋土は3層に細分されるが、2・3層は壁寄りの一部にみられる土層であり、1層が主体である。1層は極暗褐色を示す砂質シルトであり、2層は褐色の砂質シルトに極暗褐色シルト粒が混入し、3層は褐色の砂質シルトである。おそらく自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

土師器の坏と甕の破片が14点出土しているが、いずれも小破片で実測可能なものはない。

坏-4点の出土である。いずれもロクロ使用成形で、底部の切り離し技法は回転糸切り無調整であり、内面はヘラミガキ後黒色処理される。外面には再調整の痕跡がない。

甕-10点の破片があるものの全て小破片であり、詳細は明らかでない。非ロクロ成形された体部破片である。外面はヘラケズリされる破片が多い。

〔遺構の時期〕

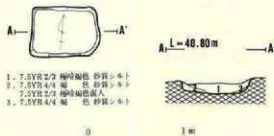
出土した遺物により平安時代に位置づけられるであろう。

(13) D14土坑

〔遺構〕 (第46図、写真図版16)

調査範囲の西端から42m東のグリッドD14・D15・E14・E15にまたがって位置し、重複関係を示す遺構はない。

東西65cm×南北60cmの規模をもち、平面形



第45図 (2) D13土坑

は北辺がやや短い壺んだ方形をなす。深さは15cmで断面は浅皿形である。底面は凹凸もなく平坦であるが、中央部から壁に向かって次第に高くなる傾向があり、壁とは丸味を持って接続し、壁は外傾する。

埋土は暗褐色を示すシルトに明褐色の砂質シルト粒が混入した土層である。自然堆積による埋没を示すものであろう。

〔遺物〕

土師器の坏と甕の破片が15点出土している。小破片で実測された個体はない。

坏一ロクロ使用成形された2点の破片がある。磨耗が著しく詳細は不明であるが、内面は黒色処理される。

甕一小破片のため特定できないが、非ロクロ使用成形されたと考えられる破片のみである。

〔遺構の時期〕

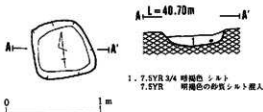
出土遺物により平安時代に属するであろう。

(14) D15土坑

〔遺構〕 (第47図、写真図版17)

調査範囲のはは中央でグリッドD15・D16にまたがって位置し、重複関係を示す遺構はない。東西70cm×南北1.95mの規模をもち、平面形は南北に長軸を示す長方形である。深さは最も深い中央部や南で53cmあり、断面形は短軸が楕形、長軸は不規則な段々をもつ播鉢形に近い形状である。底面には南側・北側とも各二段の不規則な段をもち、最低面は東西50cm×南北37cmの広さがあり、凹凸もなく平坦である。

埋土は2層に細分される。上位の1層は黒色シルト、下位の2層には褐色のシルトがそれぞれ堆積し、埋土の大半は下位の2層が占める。人為的な堆積状況は観察されないことから、自然堆積による埋没を示すものであろう。



第46図 D14土坑

〔遺物〕 (第47図164～171・写真図版33)

土師器・須恵器、灰釉を含めて118点の破片が出土している。その中に実測可能な個体が8点含まれている。

土師器

111点の破片中、坏2点、甕107点、鉢1点、壺1点を含み、実測可能なものは5点である。

坏(164)一ロクロ使用成形され、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。体部外面にはロクロ目を良く残し、同内面は底部放射状、体部横方向のヘラミミガキ後黒色処理され、

口径13.9cm、底径7.5cm、器高4.8cmである。

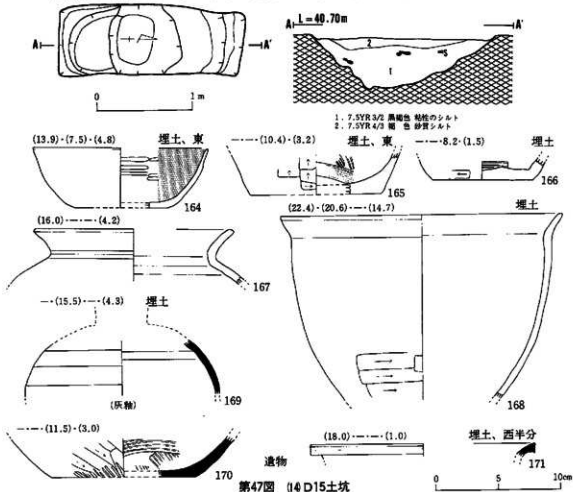
壺 (165・166) - 両者とも体部下位～底部を残す非ロクロ使用成形された破片である。外面ヘラケズリ、内面ハケメ状のヘラナデによって調整される。実測不能な破片の中にはロクロ使用成形の個体も2点含むが、他は非ロクロ使用成形のものが圧倒的に多い。

鉢 (168) - 磨耗が著しく断定はできないが、ロクロ使用成形の可能性をもつ個体である。体部下半が内湾して外傾し、同上半がほぼ直立気味の体部をもち、口縁部がくの字上に外反する。体部外面にヘラケズリの痕跡を残す部分もあるが、その他は内外面とも不明である。口径22.4cm位である。

壺 (167) - 口縁部～肩部寄りを残す破片である。ロクロ使用成形と考えられるが、磨耗によって断定できない。口縁部径16cm位の大きさである。

須恵器

坏3点、壺2点の出土であるが、坏は小破片のため実測不能である。



坏-3点ともロクロ使用成形された口縁部片である。2点は端部が外反し、他は直線的に外傾する。

甕(170・171) -170は底部、171は口縁部の破片である。170は体部外面が並行叩きとヘラケズリ・内面は笥の木口によるハケメ状のヘラナデによって調整される。171はロクロ使用成形による口縁部破片で、縁帯状の口縁部である。

灰 釉

瓶と考えられる同個体の肩部破片が2点出土している。169はその中の大型破片からの復元実測である。胎土はやや砂っぽく色調は明るい褐灰色である。内外面とも横方向のロクロ目を明瞭に残し、外面にのみやや不透明な緑色がかった灰釉が薄く施されている。

[遺構の時期]

出土遺物から平安時代初期に位置づけられる可能性が高い。

(15) D16土坑

[遺 構] (第48図、写真図版17)

調査範囲のほぼ中央グリッドD16に位置し、他遺構との重複はない。

東西80cm×南北45cmの規模をもち、長軸がN105°Wを示す隅丸長方形の平面形を示す。深さは17cmで、断面形は皿形である。底面には凹凸もなく平坦で壁とは小さな丸味をもって接続し、壁はやや外傾する。

埋土は黒褐色を示す砂質シルトの単層で人為的な堆積状況は観察されないことから、自然堆積によって埋没した土坑であろう。

[遺 物]

土師器と須恵器の破片が13点出土しているものの、小破片のため実測不能である。

土師器

坏2点、甕9点の破片がある。

坏-いずれもロクロ使用成形された個体で、内面がミガキ後黒色処理される。

甕-ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形の破片が混在し、外面にヘラケズリ調整を施す例が多い。

須恵器

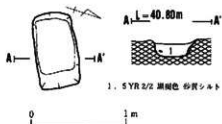
ロクロ使用成形された坏の口縁部破片が1点出土している。

[遺構の時期]

出土遺物により平安時代に位置づけられるであろう。

4) 溝跡

7条の溝跡が調査範囲全域に散在して分布する。方向には南北、北西-南東、北東-南西がある。一部の溝跡からは最近の磁器碗やガラス瓶等の出土があり、最近の遺構と考えられる溝跡も含むが、ここではそれら全てを溝跡として記載する。また、いずれも一端や両端が調査範囲外に延びており、全体が検出された例は全くない。



第48図 (1) D16土坑

(1) A31溝跡

〔遺 構〕 (第49図、写真図版18)

調査範囲の東端グリッドA31・A32～E31にまたがって位置し、南北両端は調査範囲外に延びている。南端部はA32溝跡と重複するが、新旧関係は明らかにし得なかった。

検出された長さは13m強で、N7°Eの方向にほぼ直線的に延びる。検出面の幅は70cm～1m、底面の幅35cm～50cmと若干バラツキがみられ、深さは検出面からはほぼ50cmで南に向かって僅かに低くなる。横断面は、大きく外傾するV字状～U字状を示している。壁面や底面に凹凸がほとんどなく、平滑である。

埋土は2層に細分され両層とも黒褐色のシルトであるが、上層がやや黒味が強い。また、南端部には投げ込みによる焼土塊が多量に検出されている。自然堆積による埋没であろう。

〔遺 物〕 (第50図、写真図版33)

土師器と須恵器の破片が合わせて48点出土しているが、実測できた個体はない。なお、A32溝跡と重複する南端部から136点の破片と実測個体10点が出土している。両溝跡は新旧関係を明確にし得なかったが、とりあえず本溝跡で記載することにする。

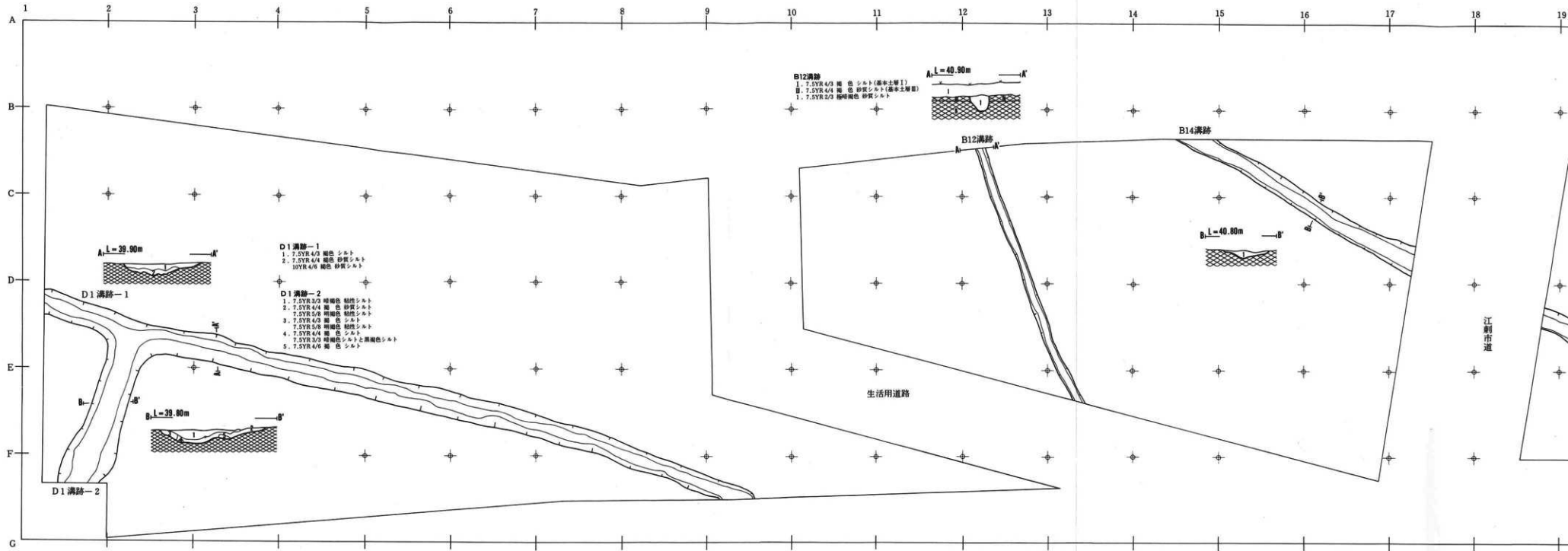
土師器

坏一口縁部1点、体部13点、底部1点の15点の破片が出土している。全てロクロ使用成形で内面はいずれもミガキ後黒色処理される。底部切り離し技法は全面再調整のため不明である。器表の体部下位にも横方向ヘラケズリによる再調整が施される。

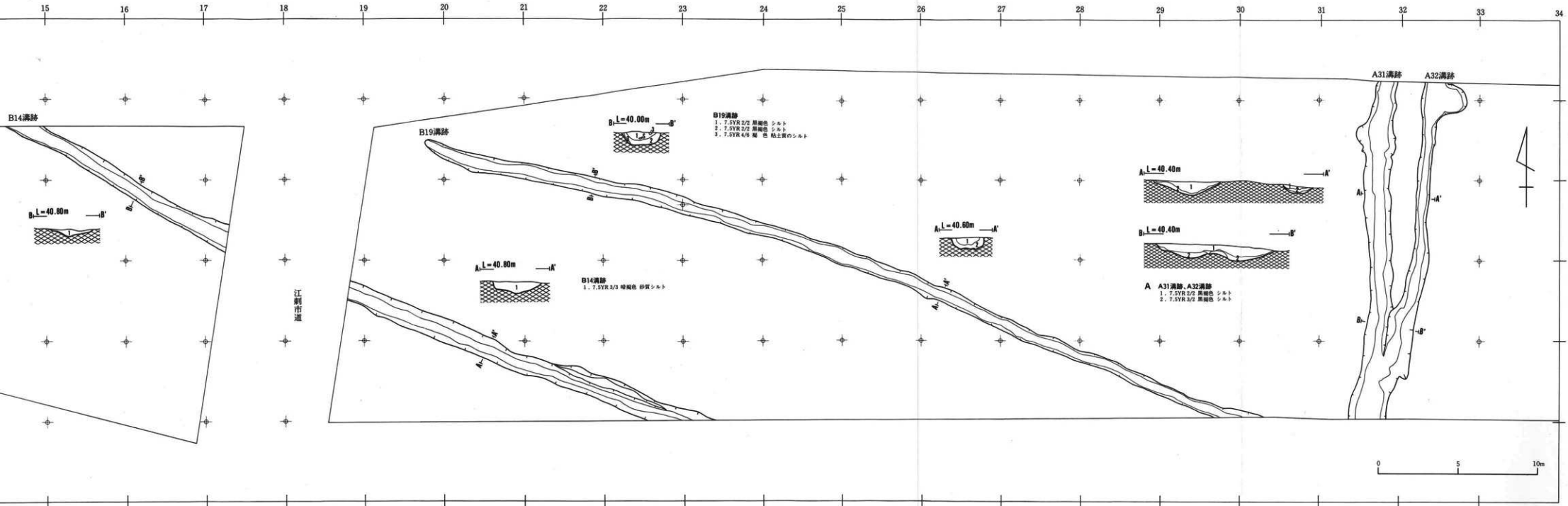
甕一口縁部3点、体部28点の出土であるが、小破片のため詳細は不明である。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものを含むらしい。

須恵器

甕一大甕の体部破片が2点出土している。いずれも外面に並行叩き具痕をもつが、内面は1点が放射状当て具痕、残る1点は円形無文凸面当て具痕をもつ。



第49図 溝跡配置図



第49図 溝跡配置図

以下にはA32溝跡との重複部から出土し、A31・A32溝跡とした遺物を記すが、出土したのは土師器132点、須恵器4点の破片と、実測できた10個体の土師器である。

杯一（第50図172～174、写真図版33）実測可能な3個体のほか、40点の破片が出土し、その中に口縁部8点、体部30点、底部2点を含む。全てロクロ使用成形であるが、内面が黒色処理される36点と非黒色処理の4点に分けられる。底部は回転糸切り技法で切り離され、底面の周辺部と器表体部にヘラケズリ再調整を施している。体部が内湾して外傾する器形を示し、一部は端部が外反するらしい。大きさは口径12cm台と14cm台の2種類存在する。

甕一（第50図175～180、写真図版33）90点の破片と実測可能な6個体の出土である。破片には口縁部6点、体部81点、底部3点を含む。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものが混在し、後者が量的に多い。体部の最大径を上位にもって頸部で軽く窄み、口縁部は直線的に外傾する個体（176～179）と外反する個体（175）があり、口唇部はいずれも丸味をもっておさまる。器面調整は体部が外面ヘラケズリ、内面ヘラナデで、口縁部は内外面ともヨコナデである。大小があり、最大が口径23cm、最少が同13cm台と、他に同18cm台もみられる。底部の切り離し技法は不明であるが、底面は全面がナデ調整される。

鉢一（第50図181、写真図版33）実測された1個体の他に2点の破片がある。ロクロ使用成形と考えられるが断定できない。体部に膨らみをもって頸部で窄み、口縁部は直線的に外傾する。器面調整は外面が体部ヘラナデかヘラケズリ、口縁部ヨコナデで、内面は粗いミガキ後全面黒色処理される。大きさは口径13cm台である。

[遺構の時期]

出土した遺物が全て平安時代初期に属することから、本遺構も平安時代に位置づけられる。

(2) A32溝跡

[遺構]（第49図、写真図版18）

調査範囲東端のグリッドA32～E31にまたがって位置し、南北両端は調査範囲外に延びる。南端部はA31溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

検出された長さは13m強で、N10°Eの方向にほぼ直線的に延びる。検出面の幅50cm～90cm、底面の幅20cm～50cmと若干バラツキがみられる。検出面からの深さは50cmとほぼ一定であるが、南に向かって僅かに傾斜している。横断面は浅皿形や大きく外傾するV字状～U字状である。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、壁面には小凹凸がみられる。

埋土はA31溝跡と差がなく、人為的な堆積状況は確認されないことから自然埋没であろう。

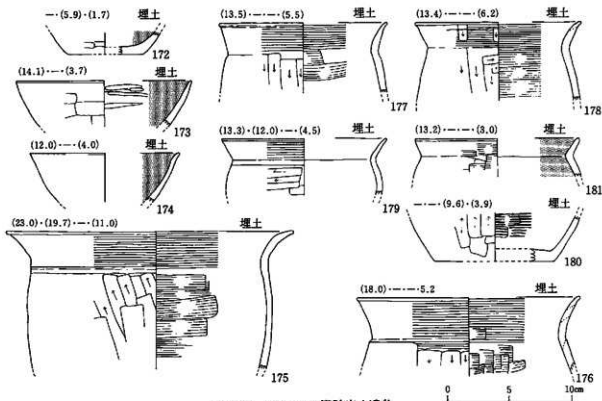
[遺物]

土師器と須恵器の破片が合わせて52点出土しているが、いずれも小破片で実測可能なものは

ない。

土師器

坏—18点の破片には口縁部2点、体部15点、底部1点が含まれる。全てロクロ使用成形され、内面を黒色処理する9点と無処理の9点に分けられるが、後者にもミガキを施すことから二次



第50図 A31・A32溝跡出土遺物

焼成によって消去された可能性が強い。底部の切り離しは全面に及ぶ再調整によって不明であり、再調整は体部上位まで施す個体もある。器形全体を知る破片はないが、各部位を総合すると体部がやや内湾して外傾する器形を示すらしい。

甕—口縁部1点、体部28点の29点出土している。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものを含み、後者が量的に多い。器表はハケメ後ナダやミガキで調整され、内面はナダやハケメである。口縁部は外反し口唇は丸くおさまり、内外面ともヨコナダ調整される。

須恵器

甕—体部の破片が1点ある。外面にヘラケズリ、内面ヘラナダの調整痕をもつ。

[遺構の時期]

A31溝跡と同様平安時代初期の遺物のみを出土することから、平安時代の溝跡といえよう。

(3) B12溝跡

[遺構] (第49図、写真図版18)

調査範囲西端から33m東のグリッドB12～F13にまたがって位置し、3箇所でC12土坑の他柱穴状土坑と重複している。新旧関係はC12土坑より本遺構の方が新しく、他は新しいものと古いものがある。

検出された長さは9.5mで南東と北西は調査範囲外に延びている。方向はN24°Wを示し、ほぼ直線的に延びる。検出面の幅が30cm～40cm・底面の幅15cm～20cmと本遺跡で検出された溝跡では最も狭く、幅もほぼ一定している。検出面からの深さは50cm～60cmで南に向かってやや傾斜する。横断面はU字状を示し、壁面・底面ともに凹凸がなく平滑である。

埋土は極暗褐色シルトの単層で、自然堆積による埋没であろう。

[遺物]

土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器の破片を含めて72点の出土であるが、小破片のみのため、実測されたものはない。

土師器

坏一口縁部7点、体部6点、底部1点の14点が出土している。全てロクロ使用成形で内面がミガキ後黒色処理される。底部切り離し技法は再調整のため不明である。体部が内湾して外傾し、端部は直立したり外反したりする器形を示し、口唇部は丸くおさまる。体部外面の下半部も再調整される。

甕-33点の破片は全て体部で占められ、ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものを含む。器面は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデの再調整が施される。その他詳細は不明である。

須恵器

甕-体部の小破片が1点出土している。器面は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整される以外全体的なことは不明である。

縄文土器と弥生土器

両者を完全に分類することは困難であるが、その両者を含めて41点の破片が出土している。器表に縄文を付しているが、小破片のため詳細は不明である。

[遺構の時期]

出土遺物や他遺構との重複関係から平安時代かそれ以降の時期に属するであろう。

(4) B14溝跡

[遺構] (第49図、写真図版19)

調査範囲西端から33m東のグリッドB14～E23にまたがって延び、両端はさらに調査範囲外

に延びている。グリッドD19でC19掘立柱建物跡の柱穴掘り方を本溝跡が掘削している。

検出された長さは29m強で、N65°Wの方向を示すが、グリッドC17付近でやや北に方向を変えている。検出面の幅は65cm～70cm、底面の幅25cm～45cmと若干バラツキがみられる。深さは検出面から東端寄り45cm、西端寄り25cmで、東に寄るほど深くなる傾向がある。横断面は浅皿形や検出面が大きく外傾するU字形である。底面・壁面とも凹凸がみられやや不規則である。

埋土は暗褐色の砂質シルトのみが堆積する。現在の耕作土と共通する土性を示し、本溝跡の所属する時期を表すものであろう。

[遺物] (第51図182・183、写真図版34)

実測個体2点と16点の土師器の破片が出土している。その他磁器の破片がある。

土師器

坏(182) - 出土した破片には口縁部1点、体部3点、高台1点と実測された体部中位～底部を残す1点がある。全てロクロ使用成形で、1点以外の内面は黒色処理される。体部は内湾気味に外傾する器形を示し、端部は僅かに外反し口唇部は丸味をもつ。底部切り離し技法は回転糸切り離して再調整はない。高台は貼り付けによって付され、八字形の形状を示し、畳付けは肥厚する角形を示し平坦である。

甕(183) - 実測個体1点の他口縁部1点と体部10点の破片がある。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものを含むが後者が量的に多い。口縁部は外反して口唇部は丸くおさまり、内外面ともヨコナデで調整される。体部は器表がヘラケズリ、内面ヘラナデの調整をもつ。底面は全面がヘラケズリやヘラナデのため切り離し技法は不明である。

磁器(写真図版34)

口縁部が1点出土している。白磁染付で、器表に印判による文様がある。

[遺構の時期]

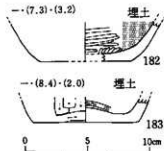
出土した遺物の中に最近生産された白磁染付を含むことは、この溝跡が近・現代に属することを示すものであろう。

(5) B19溝跡

[遺構] (第49図、写真図版19)

調査範囲西端から59m東のグリッドB19～E30まで延び、東端は調査範囲外にさらに延びている。グリッドC22・C23でC22掘立柱建物跡の柱穴掘り方と重複するが、本溝跡が柱穴掘り方を掘削している。

検出された長さは32mで、N70°Wの方向にほぼ直線的に延びている。検出面の幅50cm、底



第51図 B14溝跡出土遺物

面の幅25cm～30cm、検出面からの深さ40cm前後とはほぼ一定するものの、東に向かって僅かに傾斜している。本遺跡から検出された溝跡の中で最も規則的な揃った形状を示している。横断面形は隅丸の箱形に近似するが、壁面は軽く外傾する部分が多い。底面は凹凸もなくほぼ平坦であるが、壁面に若干の起伏がみられる。

埋土は3層に分けられるが、3層は混在する小土塊であることから、基本的には2層に細分される。1・2層とも黒褐色シルトであり、色調に若干の違いがみられる。いずれも礫が点在し、炭化物粒を含む。自然堆積による埋没と推定される。

【遺物】 (第52図188、写真図版34)

土師器・須恵器の破片109点の他縄文土器・弥生土器10点の破片がある。破片は小片のみで実測された個体はなく、須恵器の拓本を1点掲載した。

土師器

坏—口縁部8点、体部42点、底部5点の合計55点の破片がある。全てロクロ使用成形で、6点以外はいずれも内面がミガキ後黒色処理される。無処理の破片も内面にミガキが入ることから、本来は黒色処理されており、二次焼成によって消失したものと考えられる。体部は内湾して外傾し、端部は直立したり外反している。底部切り離し技法は全面に及ぶヘラナデ調整のため不明であり、再調整は体部下半にも施される例が多い。

甕—口縁部1点、体部45点、底部4点の破片がある。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものを含むが、後者が量的に多い。口縁部は外反して口唇部は丸くおさまり、内外面にヨコナデを施す。体部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデの調整をもつ破片が多い。底面は全てヘラナデやヘラケズリ調整される。

須恵器

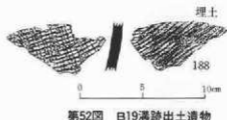
口縁部1点、体部3点の出土で、器種には坏1点と大甕2点、甎1点が含まれる。坏はロクロ使用成形された体部小破片で内外面に明瞭なロクロ目を残す。甎はロクロ使用成形された口縁部破片で、挽きだして縁帯状となる。大甕はともに体部の破片で、188は外面に格子状叩き具痕、内面に並行当て具痕を、残る1点は外面無文で内面円形無文の凸面当て具痕をもつ。

縄文土器・弥生土器

10点の出土である。いずれも器表に縄文を付し、縄文土器か弥生土器かは特定できない。

かわらけ (写真図版17)

口縁部—体部を残す皿の破片が1点出土している。底部形態は不明であるが、体部—口縁部は丸味をもって外傾する器



形を示すが、ロクロ使用成形であるかは不明である。器面は滑らかで口縁部はヨコナデ調整によって僅かな段をもって器厚が薄くなり、口唇部は小さな丸味をもっておさまる。时期的には古代ではなく中世に属するであろう。

[遺構の時期]

縄文・弥生土器のほか平安時代の遺物も多いが、かわらけの出土により中世の溝跡であろう。

(6) D1溝跡-1

[遺構] (第53図、写真図版20)

調査範囲西端のグリッドD1～F9にまたがって位置し、東西両端は調査範囲外にさらに延びている。グリッドD2でD1溝跡-2が南南西へ分かれる。また、平安時代のD1住居跡を本溝跡が掘削している。

検出された長さは26mで、N73°Wの方向にはほぼ直線的に延びている。検出面の幅が50cm～90cm、底面の幅20cm～40cm、検出面からの深さ35cm～50cmであり、西に向かって若干傾斜する。断面形は浅皿形や壁が大きく外傾するU字形に近い形状である。底面にはほとんど凹凸がないものの、壁面には小起伏がみられる。

埋土は2層に細分され、上層・下層とも褐色のシルトであるが、色調に若干差がある。下層はやや砂質であり、色調も濃淡があって斑状を呈する。一部に礫を混入し、炭化物粒も点在する。自然堆積による埋没であろう。

[遺物] (第53図、184～187・189～196、写真図版34)

土師器・須恵器・ガラス容器・縄文土器等を含めて103点が出土し、その中から土師器5個体、須恵器3個体、ガラス容器3点について実測図や拓本を掲載した。

土師器

坏(184・195)一口縁部5点、体部15点、底部4点の出土であるが、全てロクロ使用成形であり、2点以外は内面がミガキ後黒色処理される。無処理のものも内面がミガかれていることから、元々黒色処理されている可能性が高い。底部切り離し技法は全面にわたるヘラナデやヘラケズリ調整によって不明なもの、回転糸切り後再調整されるものがあり、再調整が体部下半に及ぶ例が多い。体部が内湾して外傾する器形を示し、端部は外反するものが多い。

壺(185・196)一口縁部2点、体部54点、底部1点の破片と実測個体が2点ある。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものを含むが、後者が圧倒的に多い。体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデをもつ破片がおおいもの、小破片が殆どであるため詳細は不明である。器形は明確でないが、口縁部は外反し内外面にヨコナデをもち、口唇部は丸くおさまるらしい。底部は定かでない。

壺(186)一実測された1点のみの出土である。非ロクロ使用成形で、体部外面ミガキ、内面ナテ調整を施す。器形は球形形の体部をもち底径が大きい。

須恵器

11点の出土であるが、これらはいずれも小破片である。器種には甕4点、大甕7点がある。甕はいずれもロクロ使用成形で内外面にロクロ目を明瞭に残す肩部と体部の破片である。大甕は全て外面に並行叩き具痕をもち、内面には並行当て具痕2点、放射状と並行当て具痕1点、円形無文凸面当て具痕等を付している。

ガラス容器

192～194はいずれもガラス製であるが、192と193は白色で194は透明である。前2点は現代の化粧品の容器であるし、後者は食紅等が入った空瓶と考えられる。

縄文土器

器表に粗い縄文を付した土器片が3点出土している。

鉄製品 (第 図、写真図版)

刀子(1) - D1住居跡の重複部分から、基部先端を欠くものが1点出土している。刃部は逆三角形の断面をもって鋒に向かって細くなる。全長14.6cm、身幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ31.4gである。

[遺構の時期]

192～194の出土により近現代に位置づけられる溝跡であろう。

(7) D1溝跡-2

[遺 構] (第53図、写真図版20)

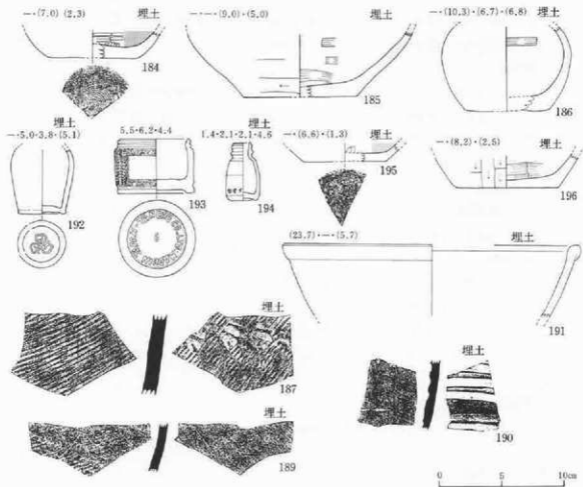
調査範囲西端のD1溝跡-1のグリッドD2から南南西のグリッドF1に分かれる溝跡で、D1住居跡を掘削する。おそらく、D1溝跡-1と一体をなすものであろう。

検出された長さは5.5mで、南端は調査範囲外にさらに延びる。検出面の幅1.2m、底面の幅70cm～85cm、検出面からの深さ45cmであり、断面形は浅皿形である。底面はほぼ平坦であるが、壁面には若干凹凸がみられる。

掘土は5層に細分されるが、3層～5層は小土塊で全体的には1・2層が占める。色調は褐色や暗褐色であるが、2層～4層はその両者が混在している。土質はすべてシルトであるが、1層～3層にはやや粘性があり、2層の一部は砂質気味である。おそらく自然堆積による埋没であろう。

[遺 物]

土師器の破片が29点出土しているが、小破片のため実測できたものはない。



第53図 D1溝跡-1・2出土遺物

坏一体部6点と底部1点の出土である。全てロクロ使用成形で、内面はミガキ後黒色処理される。底部切り離し技法は再調整のため不明である。器形は不明である。

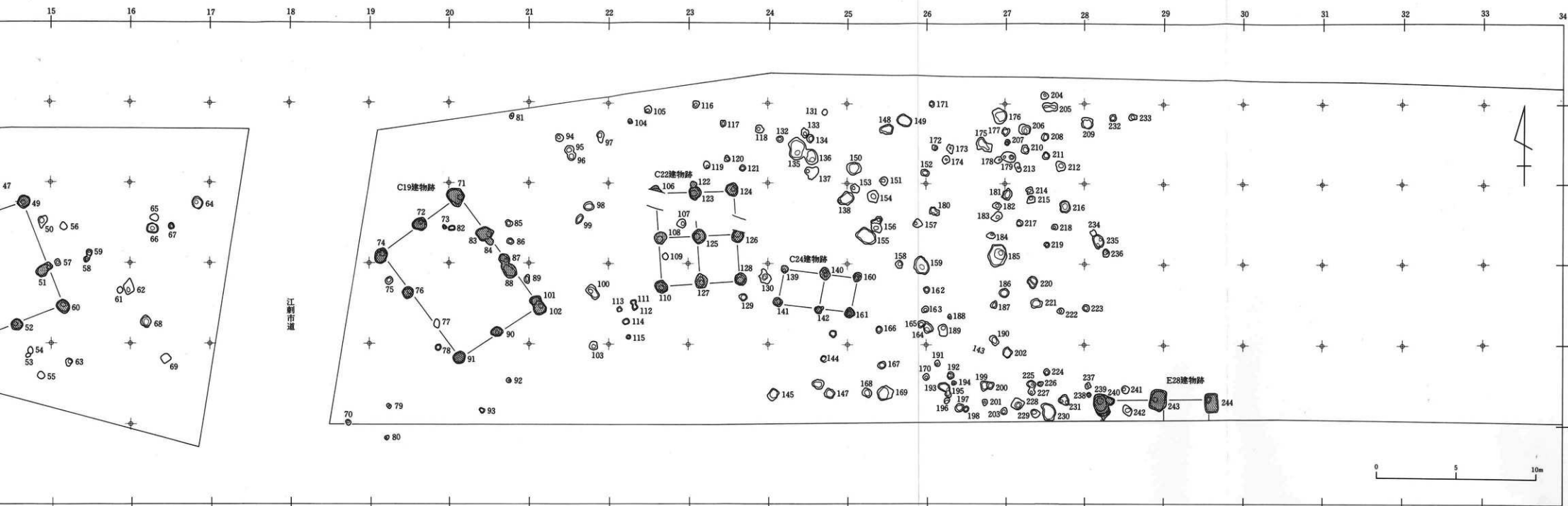
甕一体部21点、底部1点の破片が出土している。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものが混在し、外面にヘラケズリを付す以外の詳細は不明である。

[遺構の時期]

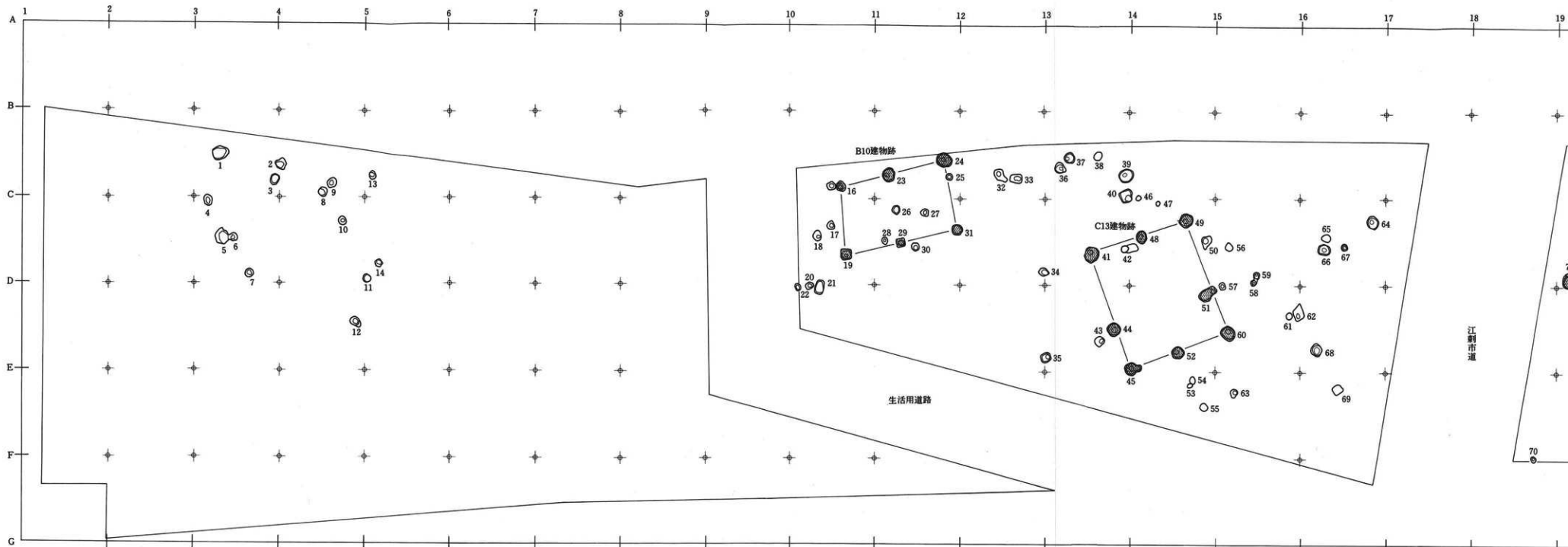
出土遺物は平安時代の土師器によって占められるが、D1溝跡-1と関連する溝跡と考えられることから、D1溝跡-1と同時存在した溝跡といえよう。

5) 柱穴群

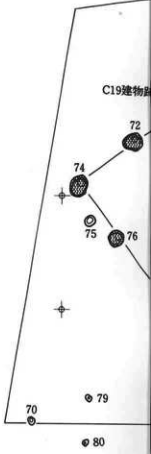
柱穴状の小土坑は東端のA31・32溝跡の西方と、調査区西端から東6m以上の範囲に分布す



第54号 柱穴群



江利市道



第54图 柱穴群

るものの、分布密度にはバラツキがあり、西方が少なく東端に密集する状況を示している。特にグリッドライン25～30の15m間にはほぼ半数が位置しA28住居跡の床面にも40個分布する。検出された全体は280個強であるが、A28住居跡床面から検出された柱穴は明確に時期区分できなかったために柱穴状土坑としてはそれらを除外した244個を登録した。

244個はグリッドライン3～5の7m間に14個、同10～17の21m間に55個、同18～24の18m間に78個、同25～29の12m間に97個がそれぞれ分布し、これらの中から既述した6棟の掘立柱建物跡を抽出したが、本項ではその掘立柱建物跡の柱穴をも含めて記述する。

規模には径10cm台～90cm台までであるが、縦径が10cm台-18個(7.4%)、20cm台-92個(37.7%)、30cm台-54個(22.1%)、40cm台-42個(17.2%)、50cm台-38個(15.6%)となり、20cm台が最も多く、20cm台と30cm台で146個と60%弱を占めている。横径をみると、10cm台-47個(19.3%)、20cm台-98個(40.2%)、30cm台-50個(20.5%)、40cm台-39個(17.2%)、50cm台-10個(4.1%)になり、20cm台が90個の40.2%と最も多く、20cm台と30cm台を合わせると148個で60.7%を占める。全体でみると、径の40cm以下が概164の67.2%、横195の80%となり、建物跡の柱穴と比較すると小規模である。因みに建物の柱穴の規模をみると、20cm台-1個(2.4%)、30cm台-9個(22%)、40cm台-15個(36.7%)、50cm台-11個(26.8%)、60cm台-2個(4.9%)、70cm台～90cm-各1個の3個(7.3%)となり、30cm台～50cmが35個と85.4%を占めるとともに、40cm台が最多であることは建物跡とした柱穴の方が規模が大きい傾向を示している。深さは、検出面からの深さを基準としたが、後世の削平によって浅くなっていることが推定され、さらに地点によって差があることも考えられることから、計測値が必ずしも正確なものとは断定し難い。計測値の集計は次のようである。10cm以下が68個の27.9%、10cm～20cmが99個の40.6%、20cm～30cmが45個の18.4%、30cm～40cmが21個の8.6%、40cm～50cmが10個の4.1%、50cm以上が1個の0.4%となり、30cm以下が212個と全体の86.9%を占め、比較的浅い柱穴状土坑が多いことを示している。掘立柱建物跡とした柱穴の深さは10cm以下が2個の4.9%、10cm～20cmが25個の61%、20cm～30cmが9個の22%、30cm～40cmが2個の4.9%、40cm以上が2個の4.9%、不明が1個の2.4%となり、他の柱穴状土坑のそれと全く差がない。平面形をみると、最も多いのは楕円形の176個の72.1%であり、以下円形の41個16.8%、方形の15個6.15%、長方形の8個3.2%、その他多角形・三角形・柄鏡形・不整形が各1個0.4%となり、楕円形と円形を含めた円系統が217個の88.9%を占める。

遺物を出土した柱穴状土坑は62個であり、その種類と出土点数は平安時代の土師器-254点、須恵器-10点、弥生土器-2点、縄文土器-79点、縄文時代か弥生時代の石器剥片-9点、時代不明の土師-1点である。出土した土師器類は全て小破片のため実面できざされたものはない。石器剥片にも使用痕や調整刻痕をもつものは全く含んでいない。

これらの柱穴状土坑がいつの時期に属するかを断定できる状況ではない。出土遺物には平安時代の土師器・須恵器と縄文土器や弥生土器が含まれるものの、これのみによって時期を決定することは不可能である。まず縄文時代と弥生時代の可能性を考えると、仮に柱穴状土坑を住居跡の柱穴とした場合、住居内部の施設である炉跡が全く確認されないことや、その他一般的な遺構である貯蔵穴的な土坑も1基のみと少ないこと、出土した遺物も破片のみであることなどを総合的に判断すると、縄文時代や弥生時代の住居跡に伴う柱穴とするには無理がある。平安時代とした場合には、出土遺物の種類と量、住居跡や溝跡等他の遺構との関係から考えて最もその可能性が高い。しかし、B19溝跡から出土したカワラケや粗掘り中に表土から出土した中国青磁の存在を考慮すると、中世の遺構である可能性も全く否定することはできない。これは建物跡の位置づけられる時期とも大きな関わりをもつ問題であり、即断することは危険である。カワラケを出土したB19溝跡は古代の倉庫と一般的に言われる遺構と全く同じ柱配置をもつC22建物跡の柱穴を2箇所掘削しており、この事実を重視するならば建物跡は平安時代の遺構としても大過ないであろう。以上のことを総合すると、これらの柱穴状土坑群には平安時代から中世にかけての遺構が混在していると理解するのが妥当であり、個々の時期を特定することは不可能である。

第2表 柱穴計測一覧表

グループ	No.	ナメコ	深さ	高さ	形状	遺物	備考	グループ	No.	ナメコ	深さ	高さ	形状	遺物	備考
B3	1	58×42	20.0	39.54	楕円形			No.6と重複 No.5と重複	27	26×24	19.0	40.23	*		
	*	2	40×38	10.0	39.67	*			28	25×22	11.0	40.25	*		
	*	3	38×28	8.0	39.70	*			29	32×30	15.0	40.25	方形		B10建物跡
C3	*	4	36×18	12.0	39.66	*		30	30×28	11.5	40.29	円形		B10建物跡、 C11土坑より新	
	*	5	55×50	22.0	39.46	*		31	38×35	12.0	40.33	*	土師2, 弥生1		
	*	6	28×24	10.5	39.56	*		B12	32	56×36	5.2	40.40	楕円形		
B4	*	7	30×28	23.0	39.56	円形		33	44×27	8.0	40.40	長方形	縄文1, 割片1		
	*	8	32×32	37.0	39.59	*		C12	34	36×26	41.0	40.00	楕円形		B12溝跡より新しい
	*	9	36×32	24.0	39.72	楕円形		D12	35	36×36	34.0	40.05	円形	土師1, 縄文4	
C4	10	32×26	43.0	39.53	*		B13	36	42×38	27.5	40.23	楕円形	割片1		
	*	11	28×26	32.0	39.69	円形		37	36×36	7.5	40.44	*			
	D4	12	34×28	58.5	39.40	楕円形		38	34×30	1.0	40.56	円形			
B5	13	30×24	18.5	39.81	*		39	52×46	13.0	40.43	楕円形				
	C5	14	28×28	40.0	39.63	方形		40	42×42	7.0	40.42	方形			
	B10	15	32×16	8.0	40.28	多角形		C13	41	52×50	3.0	40.46	楕円形	縄文9	C13建物跡
C10	*	16	34×34	15.3	40.37	楕円形		42	25×22	3.0	40.46	楕円形			
	*	17	30×26	9.0	40.31	*		D13	43	36×35	3.6	40.40	円形		C13建物跡
	*	18	36×30	7.0	40.29	*		44	46×44	12.0	40.34	円形	土師1	C13建物跡	
D10	*	19	36×36	15.0	40.13	方形	縄文4	45	60×44	16.2	40.28	楕円形	縄文4		
	*	20	30×25	10.0	40.21	*		B14	46	20×18	8.0	40.48	円形		
	*	21	48×32	6.5	40.25	長方形		C14	47	18×14	8.0	40.46	楕円形		
B11	D10	22	22×20	6.0	40.24	楕円形	土師環2	48	42×36	11.0	40.40	*	縄文5	C13建物跡	
	*	23	48×44	21.7	40.25	円形	土師3, 縄文1 弥生1	49	46×46	21.3	40.36	円形	土師2, 縄文8 土師環1, 環1, 須恵1	*	
	*	24	56×48	18.0	40.34	楕円形	土師2, 縄文3 割片1	50	52×36	16.0	40.39	不整形			
C11	*	25	22×22	5.0	40.45	円形		D14	51	60×40	20.0	40.27	楕円形		C13建物跡
	*	26	28×28	4.5	40.39	楕円形		52	44×40	17.0	40.33	*	土師3, 縄文2		
								E14	53	20×16	4.0	40.35	方形		

グループ	No.	ナナメヨコ	深さ	標高	形状	遺物	備考	グループ	No.	ナナメヨコ	深さ	標高	形状	遺物	備考
C 26	176	80×54	11.0	40.41	*	土師20, 須恵3		C 27	211	28×28	9.3	40.43	*		
	177	30×30	11.0	40.40	*				212	38×38	19.2	40.33	*		
	178	30×23	13.0	40.41	*	土師1	No.179と重複		213	38×20	21.8	40.29	*	長楕円形	
	179	57×37	34.3	40.41	*		No.178と重複		214	28×26	12.8	40.38	*	方形瓦葺	土師1, 須恵1
	180	40×30	27.3	40.53	*	土師3			215	30×30	21.5	40.25	*		
	181	46×32	27.5	40.20	*				216	44×40	6.2	40.39	*		
	182	34×24	21.9	40.30	*	土師1			217	26×25	15.2	40.32	*	楕円形	
	183	40×30	32.2	40.16	*				218	22×20	12.8	40.23	*		
	184	34×24	29.1	40.23	*	土師1			219	20×18	16.6	40.32	*	円形	
	185	80×72	41.0	40.09	*	土師32			D 27	220	42×36	11.3	40.34	*	楕円形
D 26	186	36×34	14.1	40.31	*	円形		221	42×36	12.6	40.31	*			
	187	28×24	14.5	40.31	*	楕円形		222	27×24	16.5	40.25	*			
	188	20×17	22.5	40.19	*	土師1		223	26×22	11.8	40.25	*		土師2	
	189	42×32	23.5	40.19	*	土師3		E 27	224	24×22	17.9	40.18	*	円形	土師5
	190	40×26	28.3	40.14	*			225	30×26	40.0	39.92	*	方形瓦葺	No.227と重複	
	191	23×20	10.0	40.32	*	土師3		226	22×16	12.5	40.21	*	楕円形	土師4	
	192	26×24	14.6	40.32	*			227	28×18	31.4	40.00	*		No.225と重複	
	193	46×30	35.2	40.12	*		No.195と重複	228	48×42	21.0	40.09	*			
	194	16×16	4.9	40.38	*	円形		229	36×30	21.8	40.08	*			
	195	22×18	31.2	40.20	*	楕円形		230	62×48	34.0	39.93	*			
E 26	196	24×20	42.3	39.98	*		No.193と重複	231	46×46	34.0	39.95	*	三角形	土師14	
	197	30×30	32.3	40.08	*	円形		B 28	232	24×24	6.8	40.44	*	方形瓦葺	
	198	22×20	18.0	40.24	*	楕円形		233	30×24	7.2	40.41	*	楕円形		
	199	35×7	7.0	40.32	*			C 28	234	22×20	20.5	40.25	*		
	200	28×8	48.5	39.85	*		No.200と重複	235	52×40	6.2	40.38	*		No.234と重複	
	201	22×18	21.7	40.19	*		No.197と重複	236	30×24	8.0	40.34	*			
	202	40×38	20.0	40.19	*			E 28	237	23×20	10.0	40.17	*		土師1
	203	26×26	26.5	40.05	*	円形		238	19×13	8.0	40.19	*			
	A 27	204	30×28	13.0	40.38	*	楕円形		239	95×55	47.5	39.79	*	長方形	E 28遺物部
	B 27	205	60×32	14.8	40.37	*	長楕円形		240	35×25	21.0	40.02	*		No.239と重複
	206	44×40	46.0	40.06	*	楕円形		241	28×26	10.9	40.17	*	楕円形		
	207	30×16	7.5	40.44	*			242	40×30	29.5	39.96	*	長方形		
	208	28×25	12.0	40.50	*			243	80×62	31.0	39.97	*		E 28遺物部	
	209	46×38	13.5	40.39	*	方形瓦葺		F 29	244	70×50	46.0	39.82	*		E 28遺物部
	210	34×30	29.0	40.20	*	楕円形									

2. 遺構外の遺物

粗掘り中に表土や遺構検出時にⅡ層中から遺構に伴うことなく出土した遺物を一括したが、種類には土師器・須恵器・中国青磁・縄文土器・弥生土器の土器類、土製品、石器、金属製品がある。以下では各種類ごとにその概要を記すこととする。

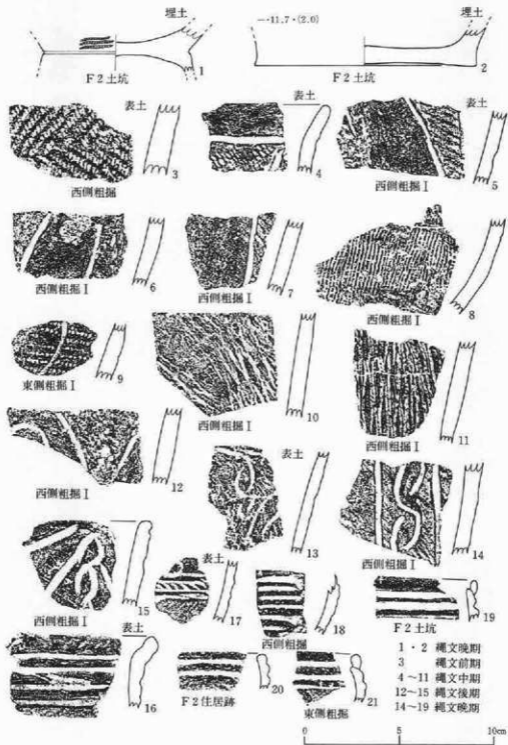
1) 土器類

(1) 縄文土器・弥生土器

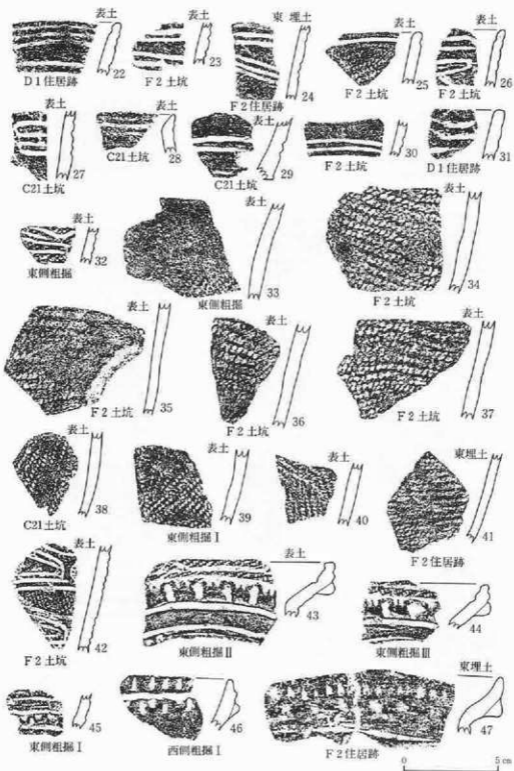
縄文土器と弥生土器を含めて約500点の破片を出土している。その中で縄文時代の遺物はC 5土坑のみであることから、この土坑から出土した32点以外は粗掘り中に表土から出土した破片や、平安時代や近現代の遺構内から出土したものであり、後者も広義では遺構外の遺物と同様であることから一括して記述する。また、縄文以外の文様を施文する土器は時期の判定が可能であるが、縄文のみの場合は不明確であるため特徴的なもの以外は縄文土器の中に含めることとする。

【縄文土器】 (第55図1～22、写真図版37・38)

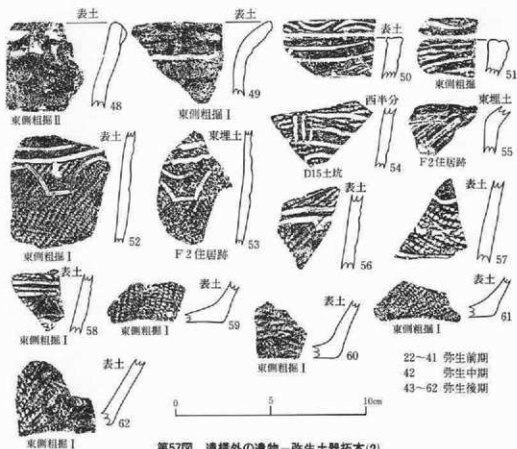
総数で263点の破片を出土しているが、その中に口縁部13点、体部248点、底部2点を含む。



第55図 遺構外の遺物—縄文土器拓本



第56図 遺構外の遺物—弥生土器拓本(1)



第57図 遺構外の遺物-弥生土器拓本(2)

施文された文様や縄文の特徴から、前期1点、中期16点、後期4点、晩期10点の破片があるものの、その他は時期の特定は困難である。

前期(3) - 西側の粗掘り中に表土から1点出土している。体部に0段多条のLR・RL連結による原体を横回転した羽状縄文を施文し、胎土に多量の繊維を混入する。厚さ約1cmとやや厚く破断面が磨耗しており、全体が覚れている。内外面の色調は淡い褐色であるが、中心部は黒褐色気味である。胎土には繊維のほか若干の細砂を混じるが、全体として均一で細かい土を使っている。器形は深鉢形と推定される。繊維の混入や縄文の特徴から前期初頭の大木1式に近似している。

中期(4-11) - 16点の出土であるが、8点を掲載した。9が東端部寄りからのほかはいずれも西端部寄りからの出土である。4-8は器面に縄文を施文した後沈線で区画し、区画した部分の縄文を磨消する共通した特徴をもつが、縄文には4・8は原体R単軸絡条体縦回転による縦-斜方向燃糸文、5-7は原体Rの原体を縦回転による斜行無節縄文を付した2種類がある。沈線は断面丸形であることから、竹管や丸棒の工具で付されたものであろう。9は原体L

単軸結条体による燃糸文のみを付す破片である。器種はいずれも深鉢形と推定されるが、器形は体部が若干膨らんだり口縁部が外反したりするらしい。胎土にはいずれも相当量の砂粒を混入し、焼成は良い。色調は黄褐色～黒褐色で、褐色が最も多い。文様の特徴から末葉の大木10式に相当する。

後期(12～15) - 西側の粗掘り中に掲載した4点が出土している。直線や曲線で区画された内側にS字状連鎖沈文を付した土器である。原体LR横回転による無節斜行縄文を付す個体もある(14)。沈線はいずれも断面丸形の竹管か丸棒状工具によって付される。胎土にはやや多量の砂粒や長石・石英のほか金雲母の混入も多く、12・13・15は破断面の磨耗が著しい。色調はいずれも褐色である。器種は深鉢形と推定されるが、口縁が波状を示す以外不明である。文様の特徴から初頭の題の内工式に位置づけられる。

晩期(1・2・16～21) - 21は東側からの出土のほかは全て西側の表土と平安時代のF2住居跡の床下に存在した風倒木痕の中から10点が出土している。いずれも断面丸形や三角形の並行沈線や並行する斜行沈線によって文様が付され、縄文はすべて原体LR横回転による単節斜行縄文である。口縁部には平縁(19～21)と三角状突起の波状口縁で口唇部に沈線による浅い刻みをもつ16の2種類ある。器種は鉢と推定され、胎土は少量の細砂を含む例もあるが、全体として均一で細かい土を使用しており、いずれも焼成良好であるが、20は二次焼成によって脆弱である。色調は黄褐色～黒褐色である。文様の特徴から後葉の大洞C式に相当するであろう。

【弥生土器】 (第56・57図、22～62写真図版38・39)

施文された縄文や各文様の特徴から明らかに弥生土器と考えられるものに267点の破片があり、その中に口縁部21点、体部240点、底部6点を含む。文様や縄文の特徴から、前期30点、中期6点、後期41点の破片があり、その他は時期を明確にしない。

前期(22～41) - 30点の出土であるが、その中から20点を掲載した。22～31は無文の器面に並行する断面三角形の沈線によって施文される土器(22～24・26・29～31)と器面に原体LR横回転による単節斜行縄文を付し、口縁部に断面丸形の沈線を1条入れる土器(25)やその両者の特徴をもつ土器(28)を含み、35～41には原体LR斜回転による単節横行縄文をもつ土器(33～37・41)と同横回転による単節斜行縄文の土器(38・39)や同縦回転による単節斜行縄文をもつ土器(40)がある。22～32は胎土に若干の砂粒を混じるが全体的に均一で細かい土を使用している。33～41は多くの砂粒や石英粒を混入し、全体として粗い。いずれも谷起高式に近似した特徴をもつ。

中期(42) - 6点の出土であるが小破片のため1点のみ掲載した。原体RL横回転による単節斜行縄文を付した器面に2条並行する沈線によって変形工字文的な文様を施文する。胎土は少量の砂粒を混じる均一な土を使用している。

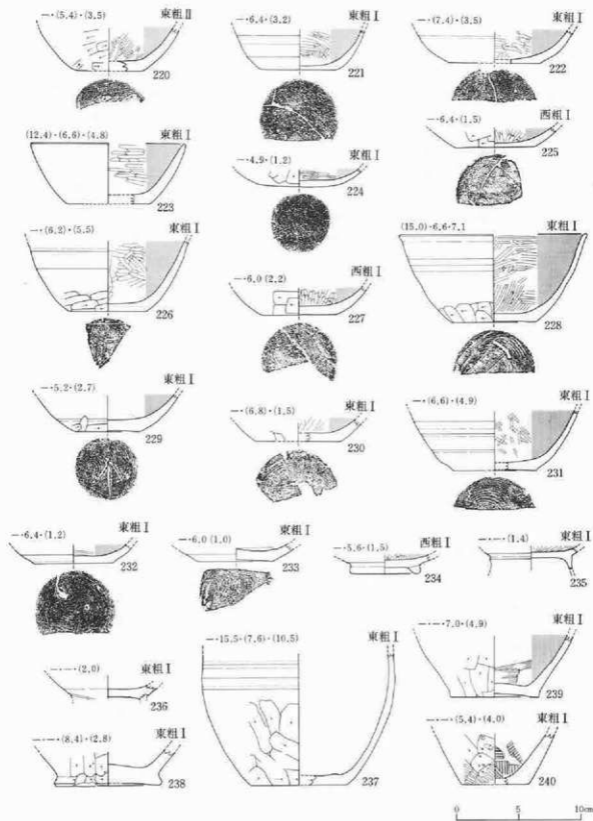
後期(43~58) - 41点の中から15点を掲載した。43~49は口縁部破片であるが、この中には43・44・46・47の受口状をなす器形の外面に縦方向の刻み目を付す凸帯をもち、48~51は凸帯をもたず直口や外反する。前者は無文の頸部に2条の並行する沈線を全周させ、口縁部は大きく外反した後端部が直立する。直立部分の外面には原体L R横回転による単節斜行縄文を付した後1条の沈線を全周させる。口縁はゆるい波状を示す(47)ものがある。48・49は無文の器面に1条の沈線(49)や列点文(48)を全周させているが、48は直線的に外傾し49は外反する。50・51も無文の器面に多くの直線や曲線によって文様を施し、平坦な口唇部にも同様の文様をもつ。52~58は体部破片であるが、いずれも原体L R横回転による単節斜行縄文を付した後沈線によって文様を施す。52・53は逆台形状の山形の沈線区画文を特徴とし、54は直線的な変形工字文の文様、55~58は全体的なことは不明である。胎土には極く少量の砂粒が混じるほか際立った混入物のない微細で均一な土を使用するが、焼成にはバラツキがみられる。このような土器は水沢市常盤広町遺跡出土の常盤式に近い特徴と考えられる。

底部(59~62) - 6点の中から4点を掲載した。全て原体L R横回転による単節斜行縄文を付し、胎土は後期のそれに近い様相を示すが、時期の特定は困難である。

(2) 土 器 (第58~60図220~259、写真図版33・34)

破片3,094点と実測可能個体40点が出土している。3,094点は市道の東側2,217点、西側877点であり、全体の71.65%が東側の出土であり、しかも東端部のA28住居跡付近からの出土であることから、本来は同住居に伴う遺物の可能性がある。実測個体も破片の出土状況と同じ様相を示し、5点以外は東端部からの出土である。器種別にみると、3,094点の破片には坏1,020点、鉢30点、甕18点、小型土器2点がある。以下に器種ごとにその概要を記すことにする。

坏(220~233) - 1020点の破片は破片全体の32.97%を占め、また実測個体14点は35%に相当する。破片には、口縁部181点、体部691点、底部148点を含み、この中の79.4%は東端部付近からの出土であり、実測個体14点も85.7%は東端部の出土で同じ様相を示している。全てロクロ使用成形であるが、内面がミガキ後黒色処理される個体の他、1個体(233)と破片2点の非内面黒色処理の個体を含む。底部切り離し技法には回転糸切り無調整2個体(231・232)と破片21点、回転糸切りで周辺部再調整の3個体(228~230)と破片18点、全面再調整で切り離し技法不明の8個体(220~227)と破片27点がある。後者の多いのが特徴であり、再調整が体部上位~下端にも及ぶ例が8個体(220・224~230)と多くの破片で観察される。全体が知られる破片が223・238と少数であるが、体部が内湾や内湾気味に外傾する器形を示し、223が口径12.1cm、底径6.6cm、器高4.8cm、228が口径14.8cm、底径6.6cm器高7.1cmと大小関係がある。底径で大小関係を見ると、4cm台1個体、5cm台2個体、6cm台10個体、7cm台1個体と、



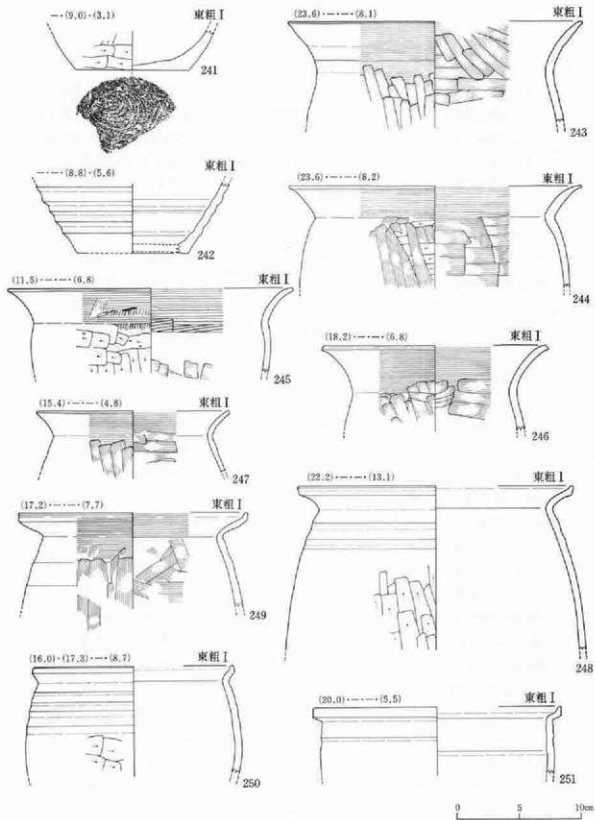
第58圖 遺構外出土遺物—土師器(1)

全体の71.43%が6cm台を占めており、A28住居跡のそれと同様である。

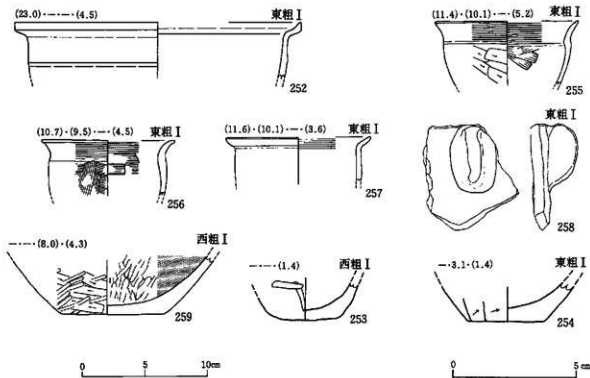
高台付坏 (234~236) - 実測3個体のみ出土であり、全てロクロ使用成形される。内面がミガキ後黒色処理される2個体(234・235)と無調整非黒色処理のもの1個体(236)を含むが、底部のみの残存であるため、全体的なことは不明である。234の高台は断面U字状で0.5cmの高さがあつて八字状に軽く広がるが、235は量付部を欠失し、236は高台部全体を剥落している。3個体とも貼付けによって付された高台で、235は234より薄造りで高いものと推定される。

鉢 (239・255・259) - 30点の破片と実測個体3点がある。破片の30点には口縁部14点、体部12点、底部4点が含まれ、全て内面がミガキ後黒色処理される。実測できた3点の、体部~底部を残す239・259の2点は内面ミガキ後黒色処理で、255は口縁部~体部を残し内面ミガキ非黒色処理の小型の変形である。3点ともロクロ使用成形の可能性をもつが、外面が全面ヘラケズリとヘラナデが施され、ロクロ目を残していないことにより断定できない。255は体部最大径を肩部にもち、頸部が軽く穿んだ後口縁部が外反し、口唇部は丸くおさまり口縁部の内外面はヨコナデ調整される。大きさは239が底径7cm、259は底径8cm、255は口径11.4cmで、前2者特に259が最も大きい。

甕 (237・238・240~252・256~258) - 2,043点の破片と20点の実測個体がある。破片の2043点には口縁部69点、体部1885点、底部69点がある。ほとんどは体部破片であり、破片全体の66%強を占める。実測された20点には口縁部~体部を残す243~252・256・257の12点、体部~底部を残す237の1点、底部のみの238・240・241の3点がある。破片・実測個体ともロクロ使用成形(237・241・242・248~252・257)と非ロクロ使用成形(238・240・241・243~247)があり、後者もロクロ使用成形の可能性はあるが、器面調整や器形は前時代の技法を継承している。ロクロ使用成形の個体は、249以外は体部の外面全体や上半部にロクロ目を明瞭に残し、下半部はヘラケズリされる例が多く、器形は体部最大径を上・中位にもって頸部で窄み、口縁部は外反して口唇部は角形をなし、上方に挽き出されて受口状を呈する。器形には大小があり、大型は口径20cm以上(248・251・252)、中型は口径15cm以上(237・249・250)、小型は口径15cm以下(256・257)である。241は底部が回転糸切り技法によって切り離され、周辺部が再調整される。249は器形がロクロ使用成形のものと同形であるが、口縁部内外面ヨコナデ・体部内外面ヘラナデ調整される違いがあり、器面調整は非ロクロ使用成形のそれに近い様相を示している。非ロクロ使用成形とした個体は、全て頸部~口唇部の器形と器面調整に違いがみられる。体部の器形はロクロ使用成形のそれと同様である。口縁部は外反し、口唇部は先細りとなって小さな丸味をもっておさまるものや(243~245)、単純な丸形(247)、角気味(246)のものがあつて、角形で上方に挽きだされ受口状をなすものは全くない。器面調整は249と同様で体部外面のほぼ全面がヘラナデやヘラケズリ調整される。器形には前者同様大小関係がみられ、その



第59圖 遺構外出土遺物—土師器(2)



第60図 遺構外出土遺物—土師器(3)

大きさも前者と同様である。258は全体形が不明であるが耳付である。

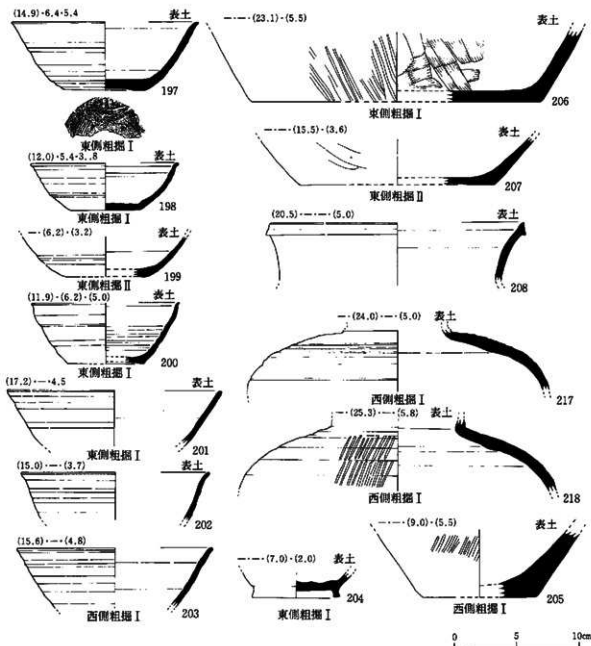
壺—実測個体ではないが、破片の中に口縁部～肩部を残すものが1点含まれる。ロクロ使用成形され、頸部から大きく張り出す体部は肩部に最大径をもち、口縁部は直線気味に軽く外反し、口唇部は角形をなし、内外面にヨコナデ的なロクロ目を残している。

小型土器(253・254)—実測された2点のみである。ともに体部下位～底部を残すが、253は非ロクロ使用成形で、254はロクロ使用成形と考えられるが判然としない。253は丸底気味な底部に内湾気味に外傾する体部をもち、内外面ともナデ調整される。254は平底で直線的に外傾する体部をもち、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整される。

(3) 須恵器 (第61・62図197～219、写真図版35・36)

141点の破片と実測個体14点、拓本個体9点が出土している。器種には坏、甕か大甕、瓶か壺等があるものの、全体形の判明するものは坏のみで、他の器種は全て部分的な破片である。

坏(197～203)—口縁部3点、底部1点の破片と、実測個体7点の出土であるが、実測された7点は口縁部～底部を残すもの3点、体部～底部を残すもの1点、口縁部～体部を残すもの3点を含む。全てロクロ使用成形され、底部切り離し技法には回転糸切り周辺部再調整(197)



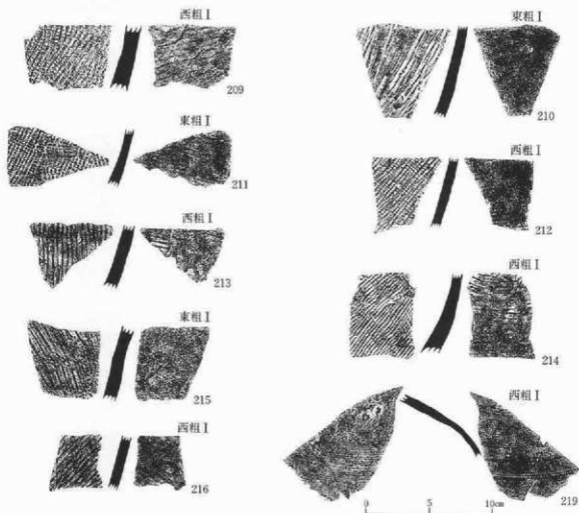
第61図 遺構外出土遺物—須恵器(1)

と回転糸切り無調整(198~200)がある。体部は内湾気味に外傾し端部が外反や直線的な器形を示す。器形には大小関係がある。

高台付坏(204)—実測された1点のみであり、体部下位~高台部である。ロクロ使用成形され、断面角形で畳付けが内側に軽く肥厚し八字状に踏んばる。坏部は残存しないので不明

である。

甕や大甕（205～216）一口縁部1点、体部110点の破片と実測個体4点の出土であり、実測個体には体部下位～底部を残すもの3点と口縁部1点を含む。体部破片110点には外面がロクロ目やヘラケズリで内面がロクロ目やナデの75点と、外面に叩き具痕をもつ36点を含むが、後者には外面が細い並行叩き具痕で内面がロクロ目や円形凸面無文当て具痕のもの9点、太い並行叩き具痕の外面に内面がロクロ目や円形凸面無文当て具痕6点、外面が格子目叩き具痕で内面円形凸面無文当て具痕の4点、内外面とも並行叩き具痕15点、外面格子目叩き具痕で内面並行当て具痕2点の各種が含まれる。実測個体の205・206は外面に並行叩き具痕をもち、内面ナデ調整され、207は外面ケズリ、内面ナデである。208は外反する口縁部で口唇部が角形に挽き出されて縁帯状をなし、椀状である。拓本の個体も大同小異であり、器形には大小関係がある。ロクロ使用成形と非ロクロ使用成形を含むが、判然としないものが多い。



第62図 遺構外出土遺物—須恵器(2)

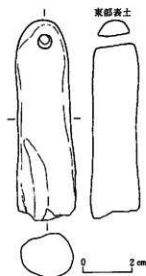
瓶か壺(217~219) 一口縁部6点、肩部8点、体部12点の破片と実測された肩部2点、拓本1点の3点がある。全てロクロ使用成形で、内外面にロクロ使用のみをもつものとカキ目や並行叩き具痕とロクロ目をもつもの等を含むものの、瓶か壺を特定できない。

(4) 中国青磁 (写真図版17)

1個体2点の破片が出土している。器種は碗と推定され、体部下位~腰部に相当する破片である。3.7cm×3.5cmの大きさと台形状をなし、厚さ7mm~4.5mmである。体部の器形は丸味をもって外傾し、腰部はロクロ回転によるヘラケズリで面取り調整される。釉は不透明な淡い灰緑色を示し鈍い光沢をもつ青磁釉が非常に薄く施され、腰部は露胎である。胎土は粒子が細かく均一であるが、断面に多く的小粒穴をもち光沢がある。色調は淡い緑灰色で中心部は器表より淡い青灰色を示すサンドイッチ状である。面取り調整や胎土、釉等の状況から13世紀頃の製品と考えられる。

2) 土製品 (第63図、写真図版39)

東部の道路側の粗掘り中に、表土から棒状のの形をした1点出土している。実測図の下端を欠失するが、残存部で全長8.1cm、太さが2.1cm×1.8cmの楕円形、実測図の上端は丸くなる形状を示し、径0.7cmの貫通する円孔を穿つ。下端を欠失するため全体形が不明のため器種名の特定は困難であるが、斧状土製品である可能性が強い。



第63図 遺構外の遺物・土製品

3) 金属製品

全部で16点の出土であるが、4点は最近のボルトやナット、針金等であることから、本報告にはその4点を除いた12点を掲載した。12点は材質によって鉄製品10点と銅製品2点に分けられる。鉄製品には鉄鍔1点、鎌千枚通し1点、釘3点、不明5点の器種があり、銅製品には貨幣・煙管各1点がある。以下にその概要について記す。

(1) 鉄製品 (第64図、写真図版37)

鉄鍔(2a) 一西部の粗掘り中に表土から1点出土している。基部を欠失するため全体的なことは不明である。鍔身の形状は柳葉形を示すが、鋒から2.5cm付近に約2cmの最大幅をもち、残存長8.4cm、厚さ0.2cm、重さ12.85gの大きさがあり、最大幅の位置から基部に向かって僅かに細くなる左右対称形をなし、横断面は凸レンズ状である。

煙管 (13) 一曲って変形した吸口である。大きさは長さ7cm、径1.0cm、厚さ0.05cm、重さ6.2gである。

4) 石器 (第 一 図、写真図版39~41)

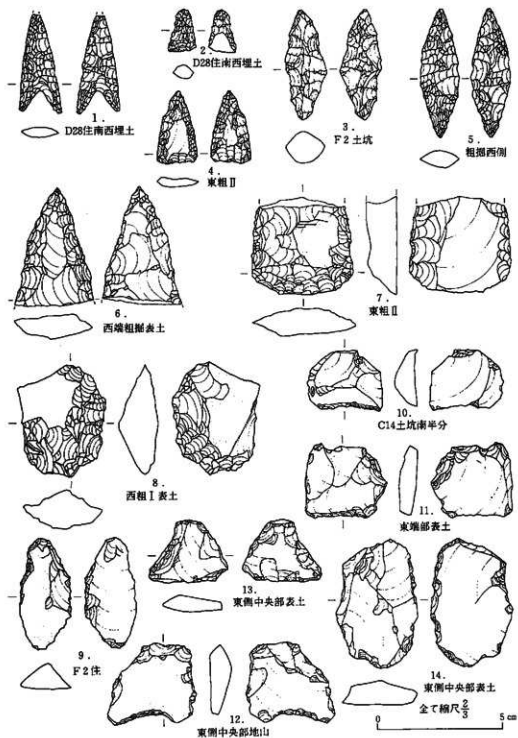
203点の剥片と38点の石器が出土しており、器種には石鏃、石槍、石鏃、搔器、削器、使用痕をもつ剥片、磨製石斧、凹み石、砥石がある。これらの多くは時代を特定し難いが、縄文時代か弥生時代に属すると推定され、砥石の一部は古代のものであろう。

石鏃 (1~5) - 5点の出土であるが、これらはD28住居跡埋土から2点 (1・2)、F2住居跡粗土から1点 (3)、東端寄2層から1点 (4)、西端寄表土から1点 (5) が出土している。形態的にはやや大型で細長く基部が凹むもの (1)、大小はあるが二等辺三角形形で基部が平らなもの (2・4)、長い菱形的で左右対称となる所謂柳葉形で基部が尖るもの (3・5) の3種類ある。前者は先端部を欠損するが、全長4cm、最大幅1.5cm、厚さ0.4cm、重量1.65gである。薄い縦長の剥片を側縁から微細な押圧剥離を表裏両面に加えて整形し、最後に基部を両面に同様の剥離によって作り出し、約1cm凹ませる。2は全長1.7cm、最大幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量0.64g、4が全長2.9cm、最大幅1.6cm、厚さ0.3cm、重量1.98gと大きさに違いがあるものの、形態的には共通している。2点ともやや厚く、側縁からの両面剥離によって形態調整をしているが、4は表裏両面に一次剥離面を良く残し、いずれも側縁が鈍角に仕上げられる。最後に基部を作り出すが、2は片面が一次剥離面を無調整で残し、4は両面に押圧剥離される。柳葉形とした後者の3・5は、形態的には3が若干粗雑であり、5が基本的な形状であろう。3は全長4.3cm、最大幅1.6cm、厚さ1.3cm、重量6.4g、5は全長5.2cm、最大幅1.5cm、厚さ0.65cm、重量3.85gと、5が若干長く逆に3が2倍の厚みをもつ違いがある。2点とも形状を両面に対する押圧剥離によって調整しているが、3が全体的に粗雑な作りで形状もやや不規則で必ずしも左右対称とはならない。石材は北上山地古生界産の粘板岩 (1)、チャート質輝綠凝灰岩 (2) と奥羽山地新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩 (3)、珪質極粗粒凝灰岩 (4・5) が使用されている。

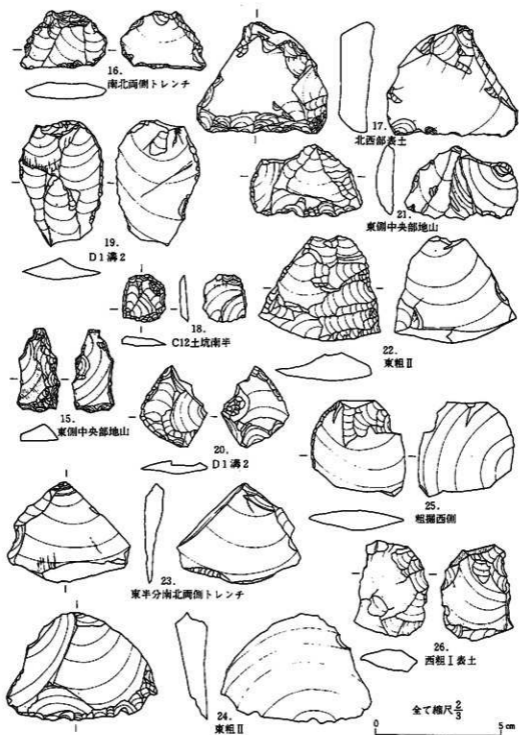
石槍 (6) - 西端部寄りの粗掘り中に表土から1点出土している。破損のため先端部なのか基部であるかは不明であるが、一端が尖る破片で残存長4.7cm、残存最大幅3.2cm、厚さ1cm、重量13.25gの大きさであり、左右対称的な二等辺三角形に近い形状を示す。表裏両面に一次剥離面を良く残し、側縁部からの両面に及ぶ押圧剥離によって調整されるが、剥離の仕方がやや粗雑で形態も若干不規則である。



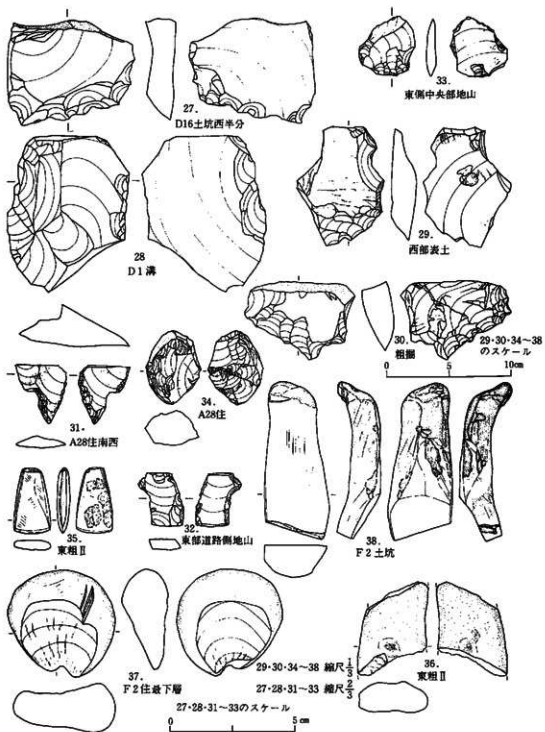
東側中央部表土銅製品
第65図 遺構外の遺物



第66図 遺構外の出土遺物—石器(1)



第67図 遺構外の遺物—石器(2)



第68図 遺構外の遺物—石器(3)

石材は奥羽山地新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩である。

石筥（7・8）—東側と西側の表土から2点出土している。いずれも先端部のみを残し、全体的なことは不明である。7は裏面に一次剥離面を良く残し、側縁は表面に大きく裏面に小さな敲打による剥離調整が付され、横断面は凸レンズ状を呈する。先端部は裏面から表面への敲打剥離によって調整される片刃に仕上げられ、刃部全体の平面形が丸味をもつ。8も基本的には7と同様であるが、7より全体形が不規則で粗雑なことから、先端部が両面剥離で右側縁が無調整の違いがある。大きさは残存長が7は3.9cm、8が4.5cm、幅が7は4cm、8が3.5cm、厚さは7が1.2cm、8は1.5cmである。石材は奥羽山地第三系中新統産の珪質極細粒凝灰岩を使用している。

削刮器（9-30）—本種には従来不定形石器と分類されたものを一括したが、形態も大きさも調整部位・技法にも大きな違いのあるものを含んでいる。分類の基準によっては削刮器や搔器に分けられる。大別すると、大型剥片の一边に裏面からの敲打剥離によって約45度の刃部を作り出した29、中型の平面三角形の一边に裏面や表面からの敲打や押圧剥離によって90度～75度の刃部をもつ17・24・27、前二型より薄形剥片の一边に裏面や表面からの敲打や押圧によって70度～75度の鈍角に作り出した9・12・15～21・23～26・28等が片面調整によって刃部を作り出し、分類に従えばこれらが搔器に該当する可能性をもち、12・13・15の3点は刃部が挟入する。しかし、18・20～23は刃部が薄くやや鋭角に作り出されており、搔器と分類するには問題がある。搔器というよりは削刮器やナイフ的な機能と考えられる。刃部を両面剥離によって調整するのは30の1点のみであり、削刮器やナイフ的な用途をもつものであろう。平面的な大きさは最大が9.5cmで最少が1.9cm、幅は最大8.5cm、最少1.6cm、厚さは最大2.5cm、最少0.3cm、重量は最大157g、最少1.79gと最大と最少には大きな開きがみられるが、全体でみると長さは2cm～4.9cmに16点が該当し、幅では15点が2cm～4.9cmに15点、厚さは1cm～2.9cmに20点、重量は0～19gに14点、0～39gに18点が該当することから、このような大きさが標準的な大きさと言えよう。素材としての剥片の選び方にも縦長（9・19）や横長（14・27・28）のものや蛤刃状（23）のもの等があり、自然面を残す剥片もある（9・10・12・15）。石材は奥羽山地新第三系中新統産の凝灰質珪質極細粒凝灰岩1点（29）、凝灰質珪質泥岩7点（9・14～16・18・27・28）、硬質泥岩3点（10・24・30）、珪質極細粒凝灰岩9点（11～13・17・19・21～23・25）と北上山地古生界産のチャート質輝緑凝灰岩1点（26）や産地不詳の玉髓1点（20）が使用されており、ほとんどの石器は奥羽山地産の石を使って作られている。

使用痕のある剥片（31～33）—一部に使用時の刃こぼれと考えられる剥離痕をもつ剥片を本種としたが、3点の出土である。いずれも小型で薄形の剥片を素材とし、31と33は若干人為的な押圧剥離調整がみられ、31はさらに挟入がある。大きさは長さ2.3cm、2.1cm、幅2.2cm～1.5

cm、厚さ0.45cm～0.4cm重さ1.93g～1.45gである。石材は奥羽山地新第三系中新統産の珪質極細粒凝灰岩である。

磨製石斧(35) - 北上山地中生界産の輝緑岩で作られた小型のものが1点出土している。片面と頭部に若干自然面を残すほかは全面が良く研磨され、頭部の幅1.5cm、刃部の幅3cm、全長5.3cm、厚さ0.8cm、重さ25.5gである。

凹み石(36) - 1点の出土である。両端を欠くため全体的なことは不明であるが、細長いと推定させる残存形の自然礫片面を凹み石として使用している。残存する大きさは、残存長5.7cm、幅5.4cm、厚さ3.9cm、重さ125gで、奥羽山地新第三系中新統産の凝灰珪質極細粒凝灰岩を石材としている。

砥石(37・38) - 2点の出土である。37は軟質の円礫を大きく打ち欠いているが、一面に線状の使用痕をもつ。38はやや不整な長方形気味の平面形を示し、4面に使用痕をもつが一面が特に強く使用され、断面が湾曲している。大きさは、37が長径8.6cm、厚さ3.9cm、重さ184g、38は全長11.7cm、全幅5.2cm、厚さ2.6cm重さ175gである。石材は奥羽山地新第三系中新統産の37は白色細粒凝灰岩、38は珪質細粒凝灰岩を使用している。

残核(34) - 1点の出土で産地不詳の玉髄である。長さ5.9cm、幅4.4cm、厚さ2.8cm、重さ76gである。一部に自然面を残し、大きく半割した後周辺部に向かって剥離された痕跡を残す。

V、ま と め

1、遺 構

本遺跡から検出された遺構は住居跡7棟、掘立柱建物跡6棟、土坑15基、溝跡7条であるが、本項では住居跡と掘立柱建物跡についてその特徴を示しまとめとする。

1)、住居跡

分布-7棟は調査範囲の東端5棟、河西端に2棟が分散し、東端ではその中の4棟が重複し、西の分布域と66m程の距離があるのも特徴である。また、西端でも1.5m～3mの間隔での立地と、東端での重複を考えれば、これらは全て同時存在ではなく東端で最少4期、西端で2期に細分される可能性を示すが、東端西端は同時存在するかも知れない。

規模と平面形-全体規模が判明または推定されるのは東端のA28住居跡-1・D28住居跡と西端のD1住居跡の3棟であるが、残る3棟も検出された一辺からある程度推定可能である。東

端ではA28住居跡-1が8m×7.5m、D28住居跡は2.85m×3.2m、その他はA26住居跡が3.35m×?、B27住居跡が3.9m×?であり、A28住居跡-1が特に大型の外はほぼ一辺3m～4mと極端な差はない。西端の2棟はD1住居跡が4.1m×4.2m、F2住居跡が5.7m×?と東端部のA28住居跡-1以外の3棟よりは大規模である。平面形は全体形の判明する前記3棟は四隅が若干丸味をもつ方形を示し、一部検出の3棟もほぼ同様と推定される。

カマドと主軸-カマドを北壁中央に設置するA28住居跡-1・D1住居跡・F2住居跡の3棟と、東壁の南東隅部寄りに設置するD28住居跡の1棟があり、その他は不明である。構築方法には袖部に土師器甕を芯として埋設するD1住居跡と、シルトのみのD28住居跡、焚口部のみに河川礫を埋設し他はシルトのみのF2住居跡の3種類ある。主軸は、東端の4棟はA28住居跡-1が北、D28住居跡が東の外は不明である。西端の2棟はともに北を示し、奈良時代が西～北、平安時代は東～南が一般的であることと比較すると、未だ奈良時代の伝統を残していると理解することができよう。

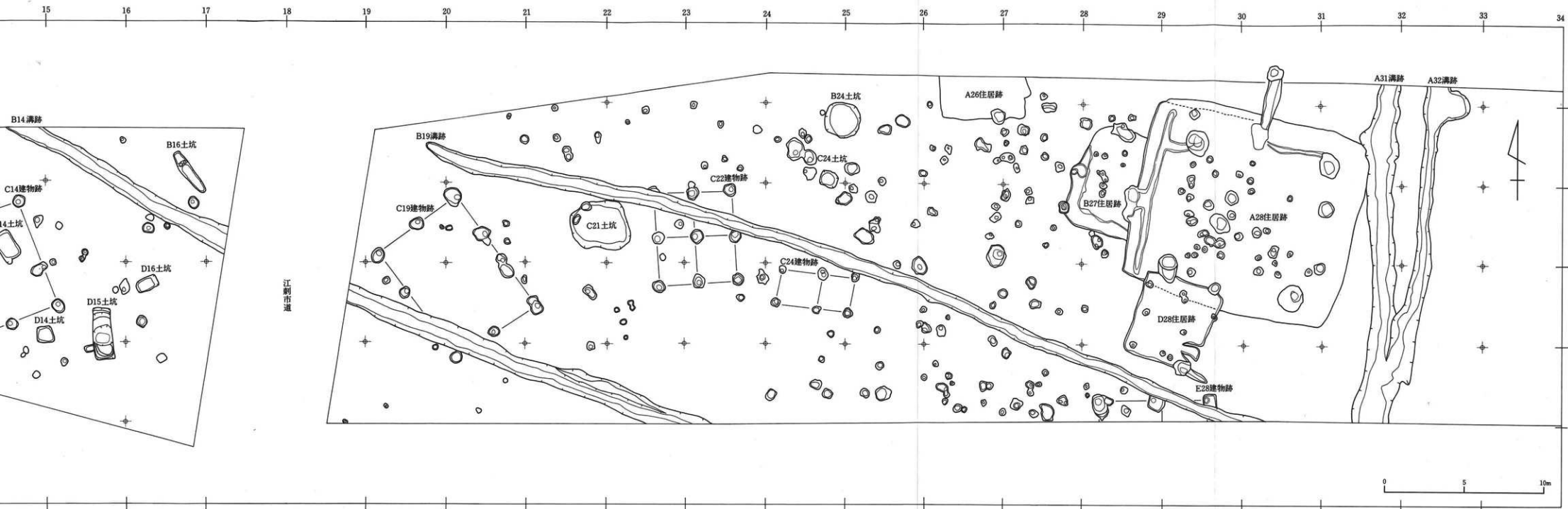
柱穴と壁溝-柱穴は東端のA28住居跡-1で4個、D28住居跡で7個が検出されたのみで、その他は不明である。壁溝は東端のA28住居跡-1、西端のD1・F2各住居跡の3棟で検出されたが、いずれも全周せず部分的に巡らす。その他では未検出である。

[小 結]

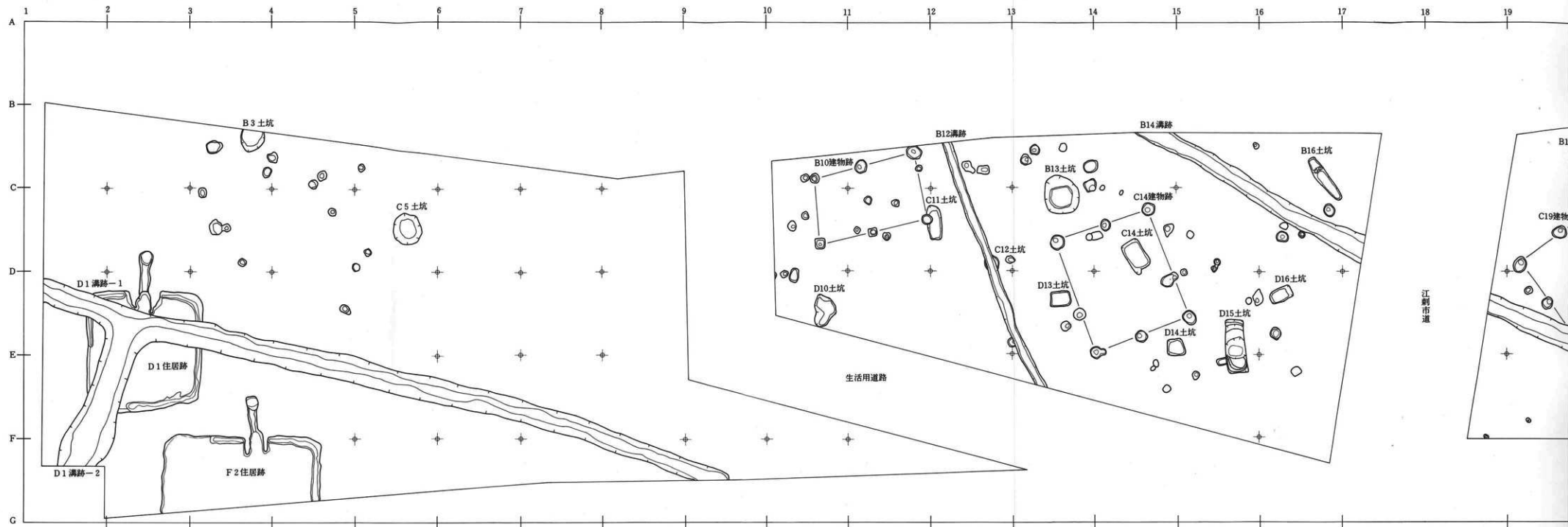
以上の特徴を他遺跡例と比較すると、平面形が方形や長方形は同様であるが、規模が一辺8mのA28住居跡-1は大型に属し、F2住居跡を除いたその他の3.2m～4mは一般的な規模で、F2住居跡はその中間的であることは、本遺跡も他遺跡例と同じ状況と理解される。カマドは北壁に設置する3棟は、平安時代では東～南が一般であることとの比較で特異的な状況と考えられるが、平安時代でも初期の段階には奈良時代の西～北の伝統をそのまま受け継ぐ例はあり江刺市宮地遺跡でも知られており、所属時期の反映と推定される。袖部の構築方法がシルトのみや土師器甕や河川礫を芯として埋設しシルトを貼り付けることは他遺跡と全く差がない。主軸方位についても同様である。柱穴は、平安時代の住居跡では不明の例が一般的で、明確な例が少ないことを念頭におけば、他遺跡例と何ら変わることがない。

2) 掘立柱建物跡

検出された6棟は調査範囲中央から東寄りにかけて建物跡相互や住居跡と重複することなく、東から12m、2m、7m、16m、6mの間隔で散在する分布状況を示し、規模は最大がC19建物跡の5.04m×3.6m、最少がD24建物跡の2.27m×1.37mで、総じて小規模である。柱配置をみると、3間×2間が1棟、2間×2間が2棟で内1棟は総柱、2間×1間が2棟、2間×



第71図 松川遺跡遺構配置図



第71図 松川遺跡遺構配置図

不明が1棟であり、全体として小規模であることが反映している。柱穴の掘り方は平面形が円形や楕円形と方形であるが、前2者が主体をなし、平面規模も径30cm～50cmと小さく、柱痕跡も径15cm前後と細い。

[小 結]

以上の特徴を他遺跡例と比較すると次のようである。本遺跡のように多数の建物跡が検出されているのは水沢市石田遺跡（7棟）、同西大畑遺跡（7棟）のみで、他は1～2棟の検出である。また、総柱建物跡は水沢市膳性遺跡に次いで2例目である。石田遺跡は最大8.5m×6mの片面廂、最少が4.6m×4mと本遺跡より大型で片面廂の建物跡2棟を含む。西大畑遺跡では廂のつく建物跡はないが、最少でも7.99m×4.8mの規模と雲泥の差がある。柱穴掘り方の平面形は前者が方形、後者は円形～楕円形を主とし、志波城跡等の官衙遺跡で検出される建物跡の掘り方が方形や長方形であることと違いがみられ、古代の建物跡の柱穴掘り方は方形や長方形の平面形であるという一般的な考え方は必ずしも一致しない。これは、官衙遺跡と集落遺跡という遺跡の性格の違いに起因する可能性がある。それは、官衙の場合は国家事業としての規格的な建物であり、専門工人の建設であろうし、集落の場合は在野の人々に技術移転されることによって建設された可能性が推定されるからである。

以上を総合すると、本遺跡の建物跡は先の両遺跡より小規模であるが、ほぼ同じ特徴をもつと考えて大過ないであろう。出土遺物は土師器・須恵器の小破片のみであり、断定資料を欠くが出土した土師器と重複する溝跡の時期から考えて、平安時代に属することは間違いないであろう。特に古代の倉庫の典型といわれる総柱建物跡の存在はその証明となろう。住居跡との関係は、住居跡と共伴して構成された集落ではなく、先の両遺跡と同様に建物のみで構成される集落と理解される。特に総柱建物跡との共伴は、倉庫と住家の組み合わせを想定することができる。時期的に検討すると、おそらく住居跡のみによる集落が廃絶したのち、若干空白期を経て、10世紀後半以降11世紀頃の集落と推定するのが自然であるが、確たる根拠はない。

2. 遺 物

本遺跡の調査では、土師器・須恵器の外縄文土器・弥生土器・カワラケ・中国青磁の土器類と金属製品、石器と石器剥片等多くの遺物を出土したが、本遺跡は平安時代の集落跡であることと、土師器・須恵器以外は前項で詳述したことから、本項では住居跡からの出土が最も多い土師器についての問題点を示しまとめとするが、住居跡出土のものに限定し、それらの特徴と組成から所属時期を考えることとする。

器種には坏・高台付坏・甕・壺・鉢・小型土器の5種類があり、以下では各器種ごとの特徴を記すものの、酸化炎焼成されたものを全て土師器とした。なお、代表例は第70図に示した。

[坏]

全てロクロ成形の製品であるが、内面調整や底部切り難しに違いがあり、以下に細分される。

I種-内面をミガキ後黒色処理する種類で本遺跡の主体をなすが、さらに分けられる。

A-底部の切り難しが回転蹴切りのもので、全点を観察した中に6点含む(1~3)。D28住居跡から1点(3)出土した以外はA28住居跡-1(1・2)の出土である。1・2は器形・法量・胎土ともほぼ同様であるが、3は1・2より器高が高く体部が内湾して外傾し、胎土も前者は砂粒が多量に混じって粗いのに対し水飯された微粒の粘土と、全く異なる様相を示す。しかし、底面や体部外面下部~下端のヘラケズリ調整は共通する。

B-底部の切り難しが回転糸切りのものである(4)が、底面や体部下位がナデやケズリによって再調整される例が多く、無調整は少ない。器高が1・2よりやや高いが器形的にはそれとほぼ同様で、胎土は3と共通する。

C-底面が全面ヘラケズリ調整のため切り難し技法が不明なもの(5~8)で、本遺跡出土の主体をなす。体部外面の下位をヘラケズリ調整することや、器形・法量・胎土はBとほぼ同様である。

II種-内面ミガキ後黒色処理のない種類で、本遺跡での出土は全体で3点のみであり、そのなかの2点7・8はF2住居跡からの出土である。底部切り難しは回転糸切り技法により再調整はない。器形・法量はIB・ICとほぼ同様であるが、胎土はIB・ICより粗く、IAの1・2よりは細密であり両者の中間的である。

[高台付坏]

本遺跡からの出土は全点で3点の出土と非常に少ない。9は坏よりも皿に近い器形であるが、本項では坏としておく。全てロクロ使用成形され、いずれも内面がミガキ後黒色処理される。全体の判る個体が1点であるため、詳細は定かでない。いずれにしても出土量が少ないのが最大の特徴である。

[壺]

ロクロ使用成形のものと非ロクロ使用成形ものを混在するが、いずれとも判別のできないものも多く含まれる。特に体部上半はロクロ使用成形的であるが、頸部~口唇部は奈良時代の伝統を強く残している。また、大・中・小の3型がある。

I種-非ロクロ使用成形のもの(14)で、A28住居跡-1から多く出土している。底部から外傾する体部は最大径を中位にもって頸部で窄む。口縁部は外反し、口唇部は丸くおさまる。体部は外面が縦方向ヘラケズリ、内面は横方向ヘラナデで調整され、口縁部は内外面ともヨコナ

デである。A28住居跡-1の実測可能なもの7点の外は破片である。大型と中型はあるが小型はない。

Ⅱ種—ロクロ使用成形のもの(13・15・17)であるが、口縁部～口唇部の造りによって細分される。

A—器形はⅠ種と同様であるが、体部上半にロクロ目を残し、同下半は縦方向や斜方向のヘラケズリで調整し、体部上端～口縁端部の内外面はヨコナデで口唇部は丸くおさまる。一部の体部に斜方向の並行叩き具痕をもつものがある。大・中型に多く小型は少ない。

B—器形はAのそれよりズン胴気味で、体部下半は縦方向ヘラケズリ、同上半～口唇部はロクロナデとする種類で、口唇部は角張ったり上方に挽きだされて受け口状をなす例も多い。大・中・小型ともにあるが、小型はほとんどがこの種類である。

[壺]

完形のものはないが、D15土坑(167)やD28住居跡(101)・D1溝跡(185・186)から各1点を実測したが、破片では10点ほどの出土である。先の壺と同様ロクロ使用成形のものと非ロクロ使用成形のものがある。167は頸部が大きく窄み、口縁部は直線的に外傾し、口唇部は角張り気味となるロクロ使用成形されたものである。101は非ロクロ使用成形で、器形は前者とほぼ同様である。体部上部～口縁部は内外面ともヨコナデで、口唇部は丸くおさまる。186は体部～底部を残すが、体部外面の全面がミガキである。

[鉢]

出土点数としては多くないが、器形や内面の黒色処理の有無によって細分される。

Ⅰ種—広口壺に近似した器形を示し(20)、内面が全面ミガキ後黒色処理される。体部外面もミガキで口縁部外面はヨコナデされる。

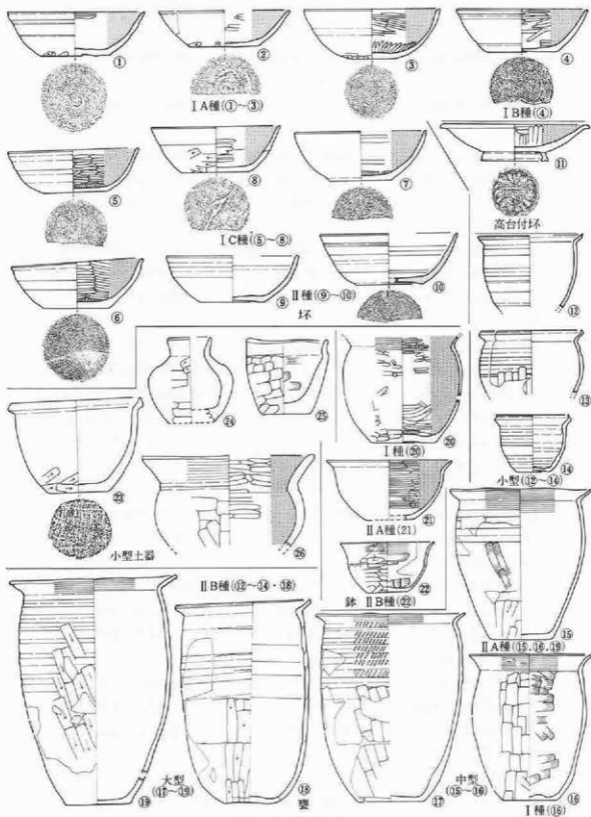
Ⅱ種—サラダボール形の器形を示すもので、以下のように細分される。

A—内外面ともミガキ調整され、内面が黒色処理されるものである。底部から大きく外傾する体部は上位で直立気味となり、口縁部は頸部で外反する器形を示し、器高に対する口縁部径は2.1倍である。断定できないがロクロ使用成形らしい。

B—体部外面は横方向のミガキ、同内面は同方向のヘラナデによって調整されるが、内面黒色処理がなく、口縁部は内外面ともヨコナデである。底部から大きく外傾する体部は端部で小さく内傾し、頸部で再び外傾して口縁端部で外反する器形を示し、器高に対する口縁部径は1.89倍である。ロクロ使用の有無は判然としない。

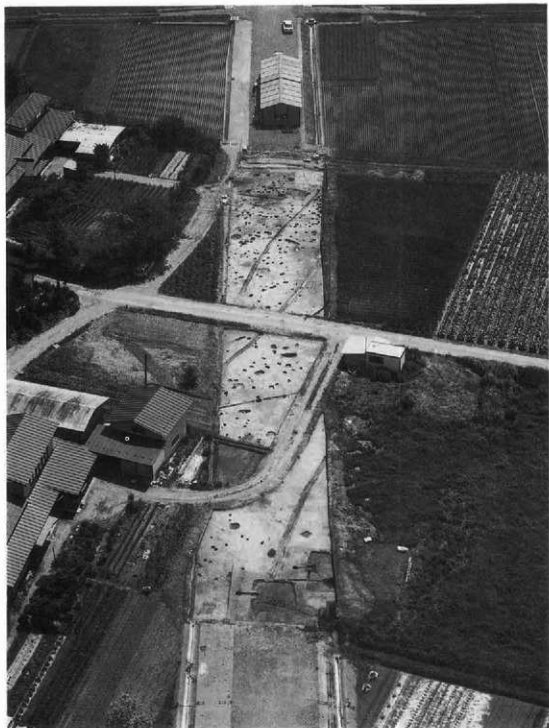
[小型土器]

所謂「形の小さな土器」であるが、器種には壺形(23・25)、壺形(24)、鉢形(26)が含ま



第70圖 土器分類圖

写 真 图 版



完掘後全景

西からの空中写真

写真図版 1



A. 調査前近景

東から



B. 調査後全景

東から



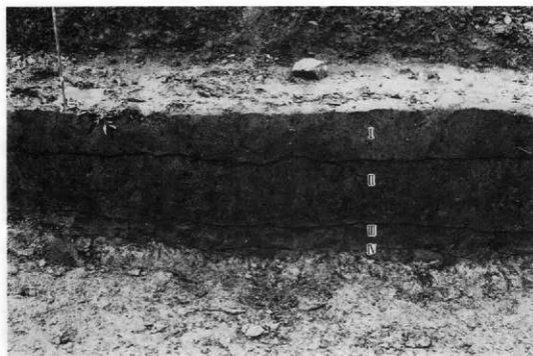
A. 相掘風景



B. 現地説明会



A. 田原小学校見学会



B. 基本層序

A2付近



A. A26住居跡

南から



完掘全景

東から



埋土土層
B. B27住居跡

写真図版 5 遺構(1)



完掘後全景

東から



埋土土層



カマド全景



カマド断面
A28住居跡



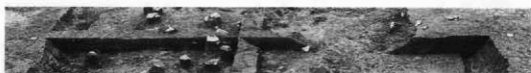
カマド断面

写真図版6 遺構(2)



完掘後全景

南から



埋土土層



カマド全景



袖部埋設の土師器

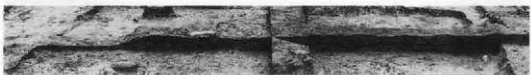
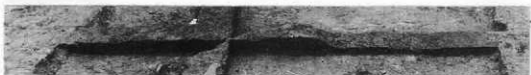
D1住居跡

写真図版7 遺構(3)



完掘後全景

西から



埋土土層



カマド全景



カマド断面

D28住居跡

写真図版 8 遺構(4)



完掘後全景

南から



埋土土層



カマド断面



カマド全景

F2住居跡

写真図版9 遺構(5)



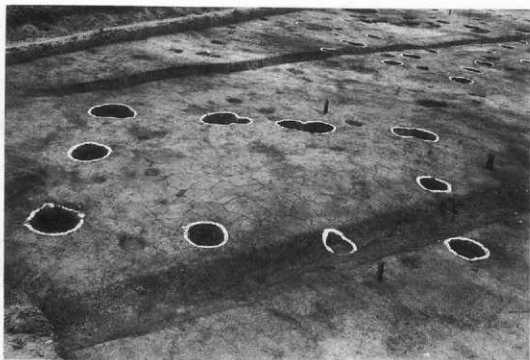
A. B10建物跡

南から

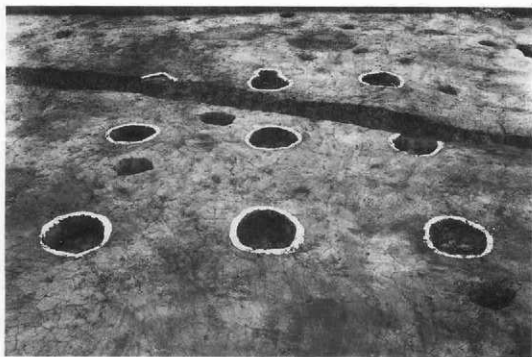


B. C13建物跡

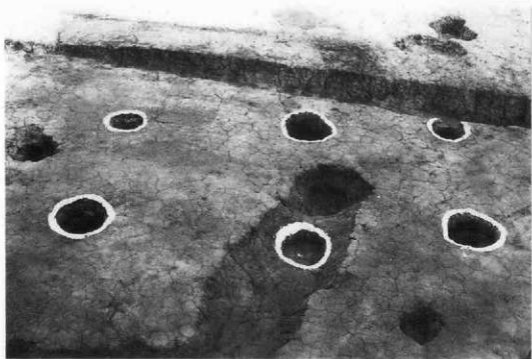
写真図版10 遺構(6)



A. C19建物跡

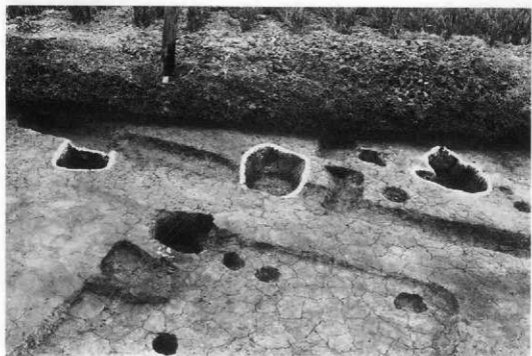


B. C22建物跡



A. C24建物跡

南から



B. E28建物跡

北から



(1) B3 土坑



(6) C11 土坑

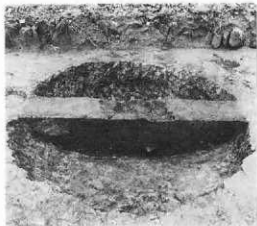
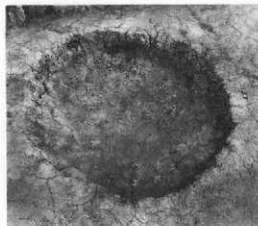


(2) B13 土坑

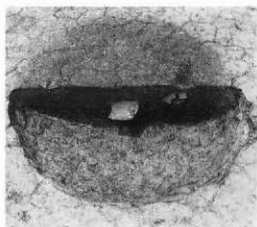


(3) B16 土坑

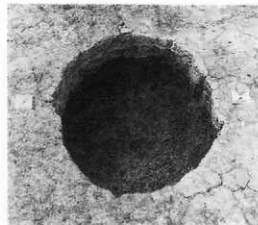




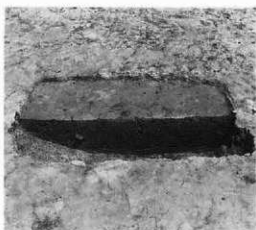
(4) B24 土坑



(5) C5 土坑



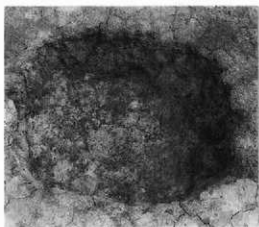
(7) C12 土坑



(8) C14土坑



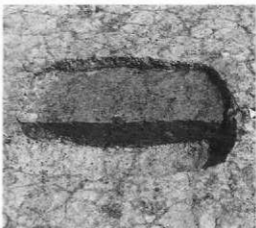
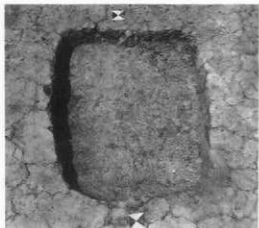
(9) C21土坑



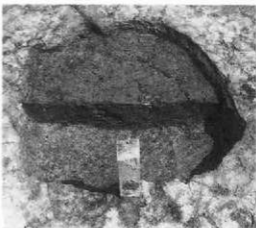
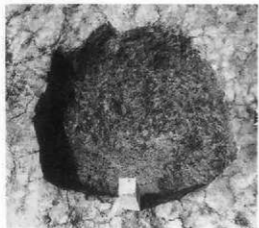
(10) C24土坑



01 D10土坑



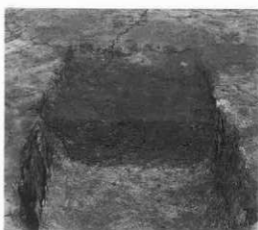
02 D13土坑



03 D14土坑



04 D15土坑



09 D16土坑

A. 土坑



(5) B19溝跡

実大



遺構外出土の中国青磁

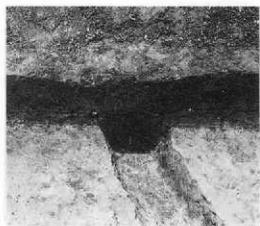
実大

B. 遺物(1)

写真図版17 遺構(13)・遺物(1)



(1) A31溝跡 (2) A32溝跡



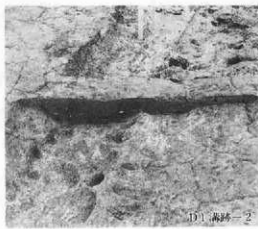
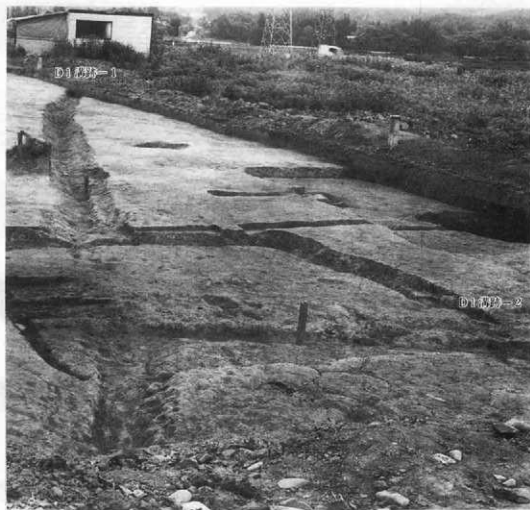
(3) B12溝跡



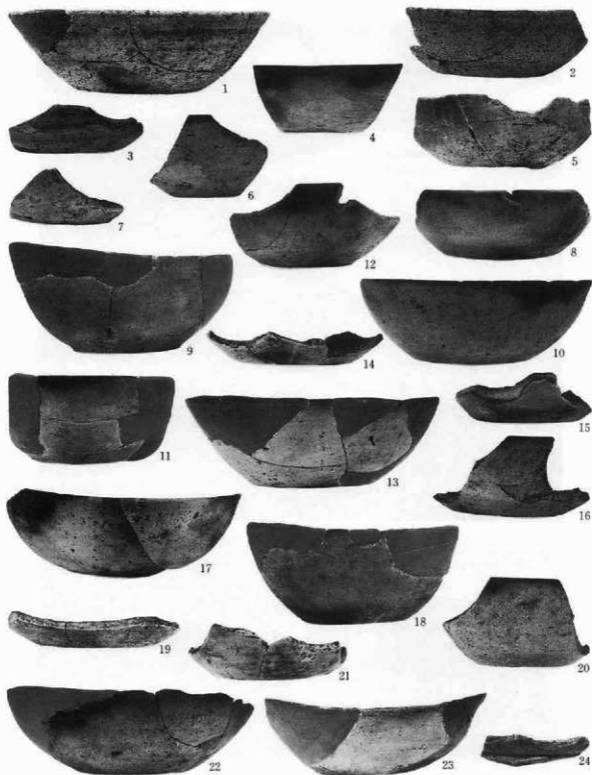
(4) B14溝跡



(5) B19溝跡



(6)D1溝跡-1。(7)D1溝-2



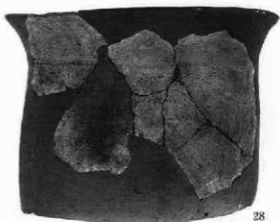
A28住(1)

S- $\frac{1}{2}$

写真図版21 遺物(2)



26



28



29



27



25



33



30



31



34



35



32

A28住(2)

S- $\frac{1}{3}$

写真図版22 遺物(3)



36



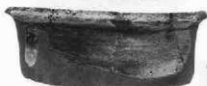
37



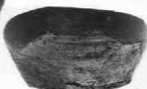
38



39



40



42



44



41



43



45

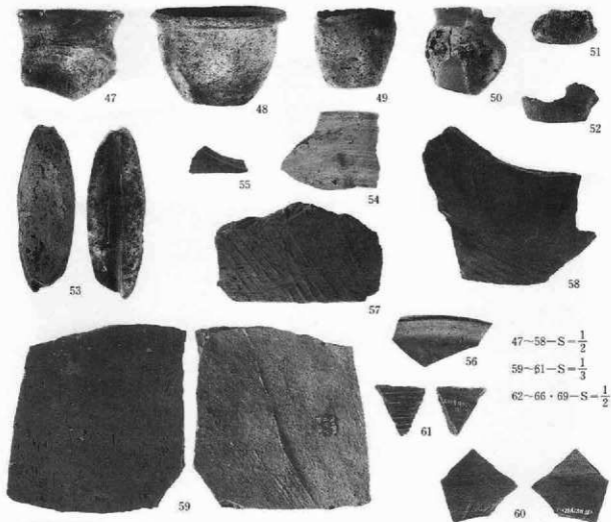


46

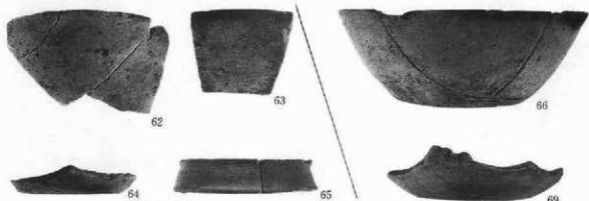
A28注(3)

S- $\frac{1}{3}$

写真図版23 遺物(4)



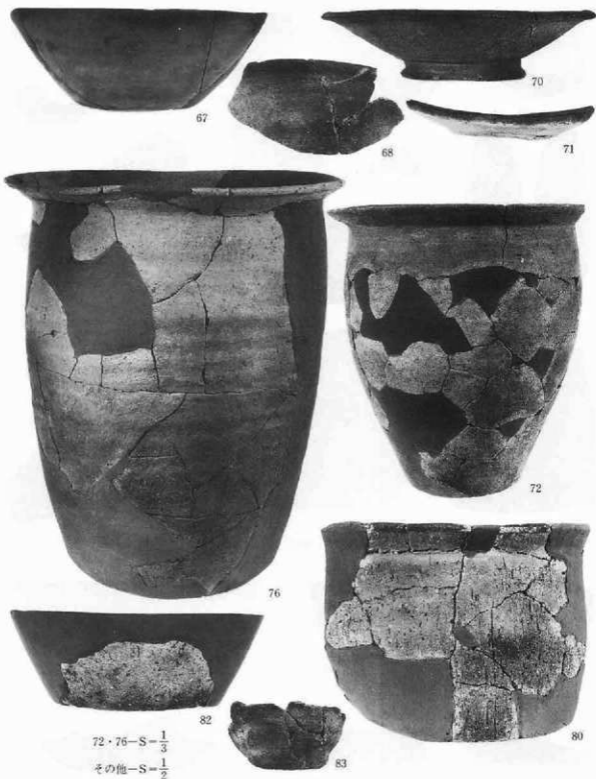
A. A28住(4)



B. B27住

C. D1住

写真図版24 遺物(5)



D1住(2)

写真図版25 遺物(6)



73



74



78



77

D11E(3)

S- $\frac{1}{3}$

写真図版26 遺物(7)



D1住(4)

75・89-S = $\frac{1}{3}$
 その他-S = $\frac{1}{2}$

写真図版27 遺物(8)



90

A. D1住(5)

90-S- $\frac{1}{3}$



91

93

94

92

96

95

98

97

99

100

102

103

104

101

106

107

108

B. D28住(1)

91-109-S- $\frac{1}{2}$

写真図版28 遺物(9)



110

111

110·111-S- $\frac{1}{3}$

A. D28住(2)



112



113



114



115



116



117



118



120



121



129

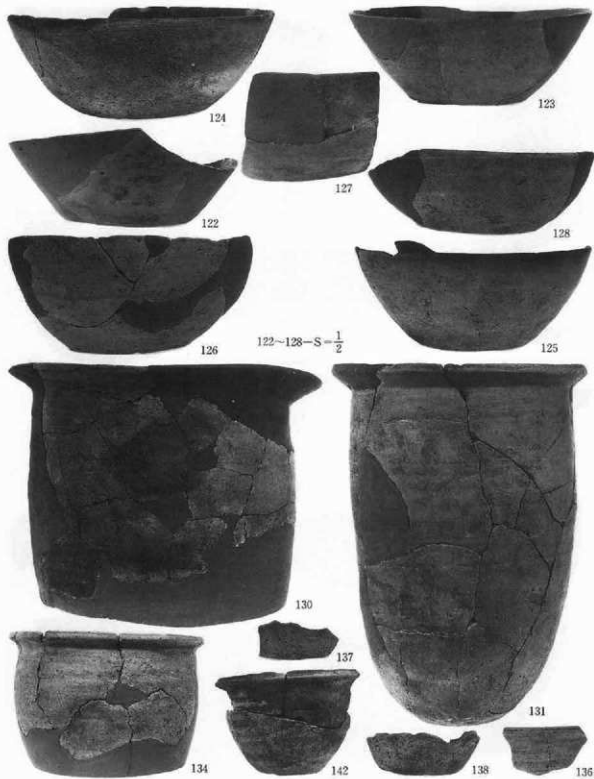


119

B. F2住(1)

112-121-S- $\frac{1}{2}$

写真图版29 遺物10



124

123

122

127

128

126

122~128-S = $\frac{1}{2}$

125

130

137

131

134

142

138

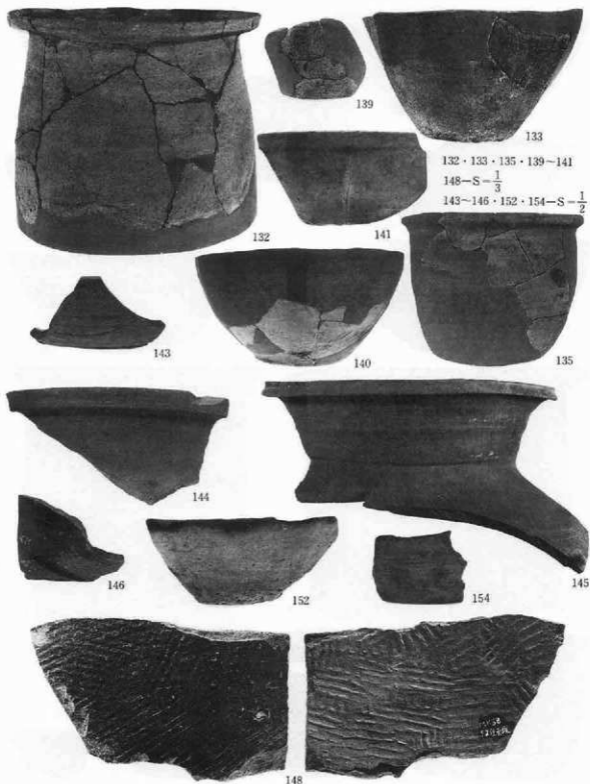
136

F 2 住(2)

130 · 131 · 134 · 142

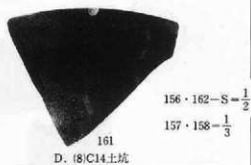
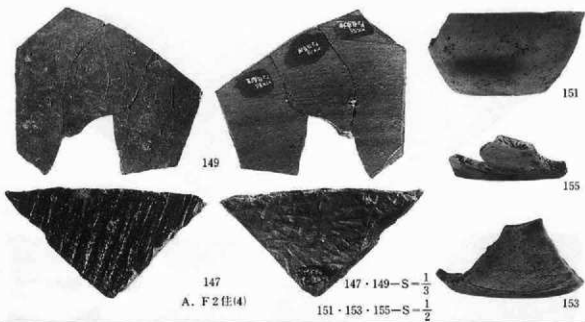
136~138-S = $\frac{1}{3}$

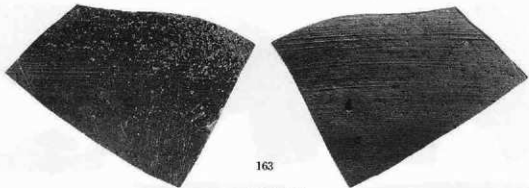
写真図版30 遺物(1)



F 2 住(3)

写真図版31 遺物02





163

A. (9)C21土坑



159



160

B. (5)C5土坑



165



167



166



170



164



171



169

C. (4)D15土坑



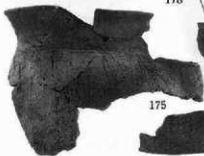
168



177



178



175



176



180



179



173



174

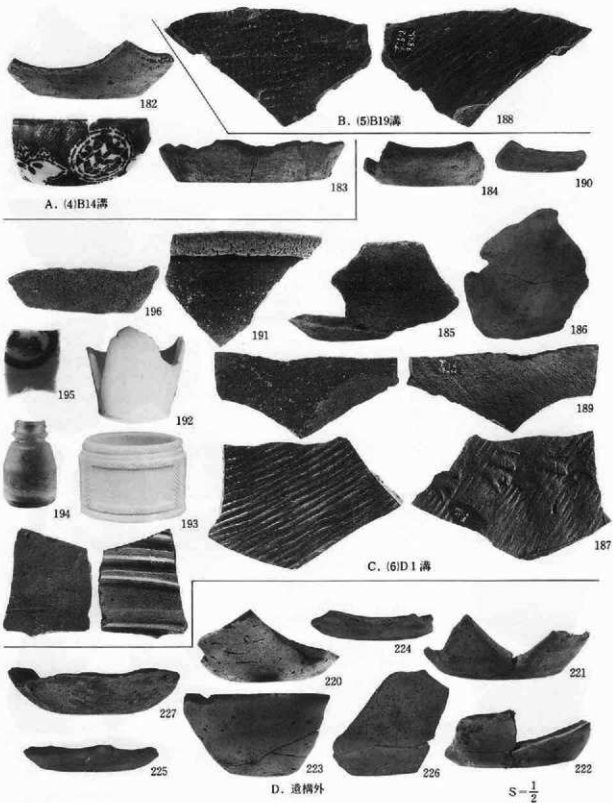


172

D11/A31・(2)/A32溝

164・172~174-S- $\frac{1}{2}$
その他 S- $\frac{1}{3}$

写真図版33 遺物(14)



A. (4)B14溝

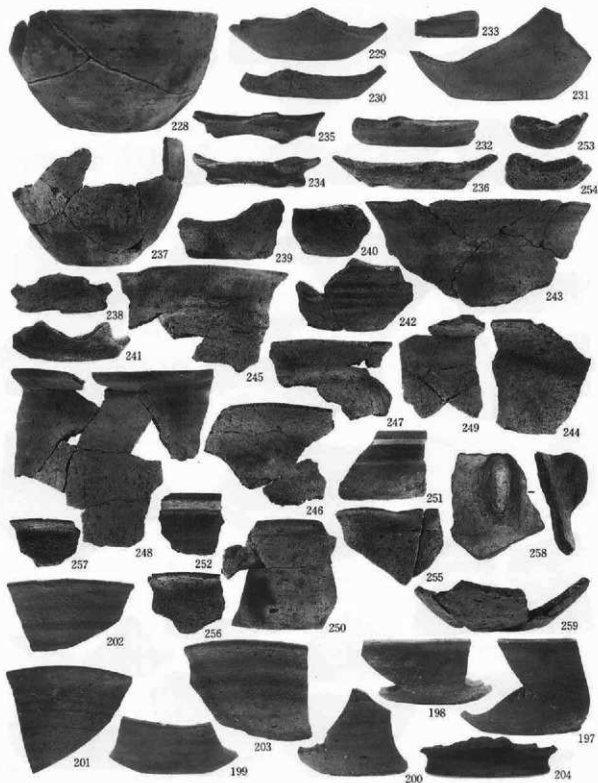
B. (5)B19溝

C. (6)D1溝

D. 遺構外

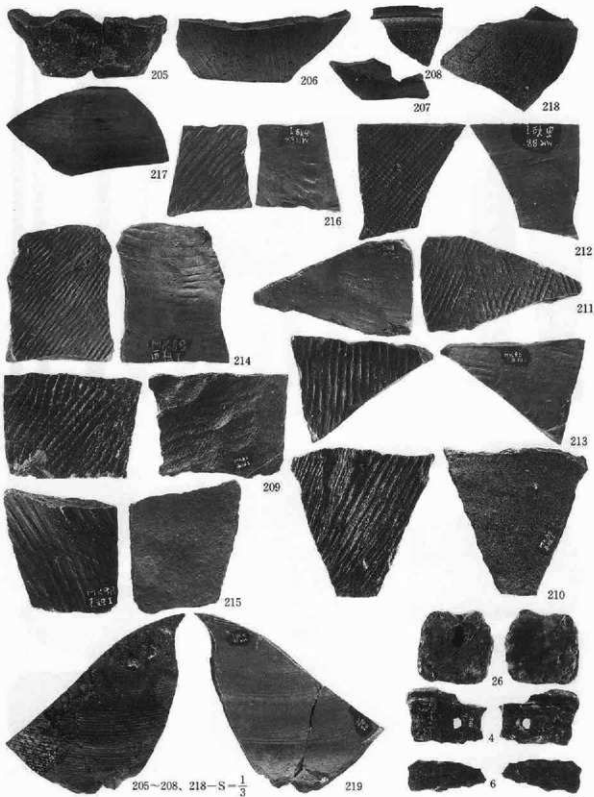
S- $\frac{1}{2}$

写真図版34 遺物15



197~203·228~236·253·254-S- $\frac{1}{2}$ 、237~252·255~259-S- $\frac{1}{3}$

写真図版35 遺物(16)

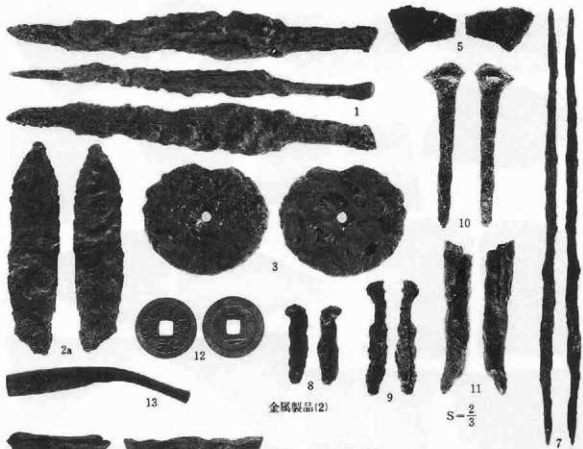


205-208, 218-S- $\frac{1}{3}$

209-219-S- $\frac{1}{2}$

写真図版36 遺物(17)

金属製品(1) 4・6・26-- $\frac{2}{3}$



金屬製品(2)

S- $\frac{2}{3}$



F2 土坑

縄文前期-3

縄文土器(1)

縄文中期 4-10

写真図版37 遺物(18)



縄文中期

縄文後期12~15



縄文晩期 16~21
A. 縄文土器(2)

S=1/2

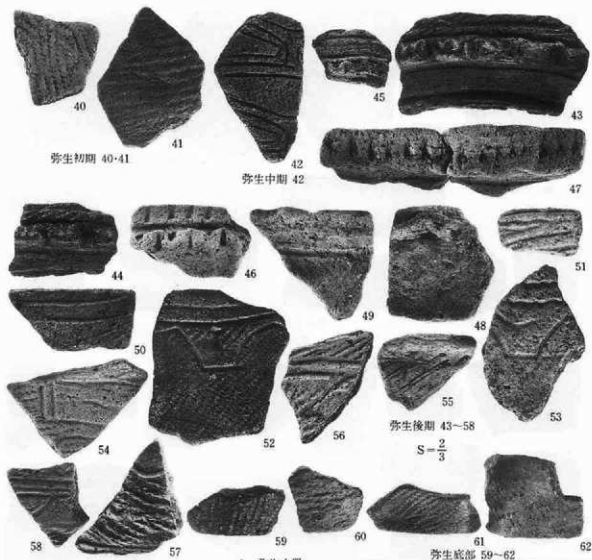


B. 弥生土器

1~20弥生初め

S=1/2

写真図版38 遺物(19)



A. 弥生土器

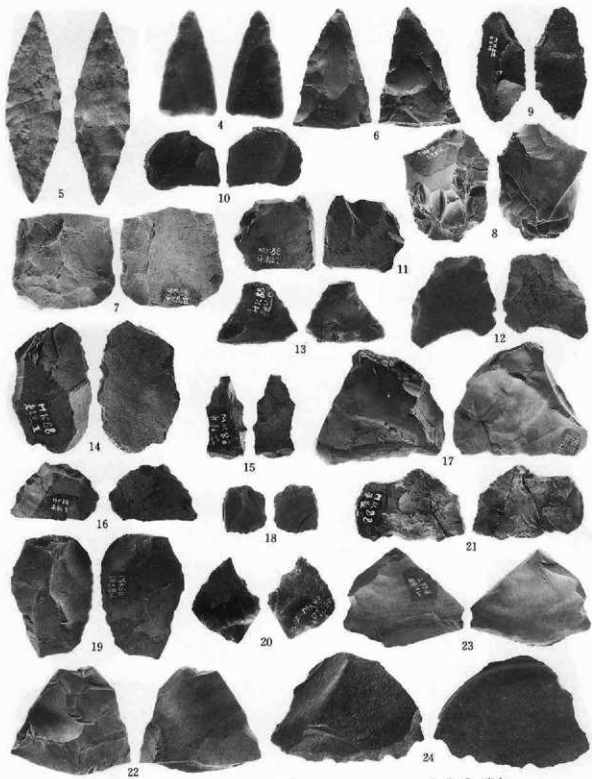


B. 土製品



C. 石器(1)

写真図版39 遺物20

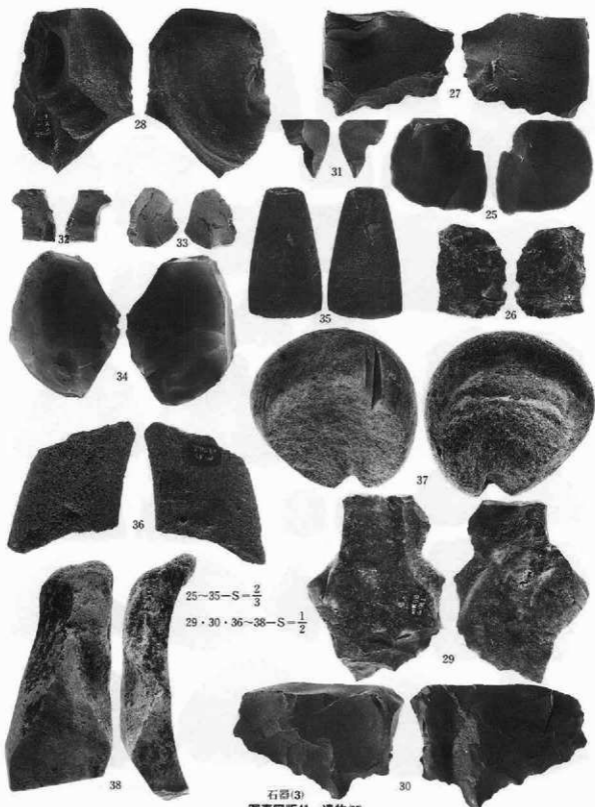


石器(2)

4・5-S-実大

6~24-S- $\frac{2}{3}$

写真図版40 遺物(2)



石器(3)
 写真图版41 遺物22

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二		
副 所 長	鎌 田 良 悦		
[管 理 課]			
管理課長(兼)	鎌 田 良 悦		
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎	嘱 託	吉 田 一 男
主 事	阿 部 隆 広	運 転 技 士 兼 技 能 員	佐 藤 春 男
[調 査 課]			
調査課長	昆 野 靖		
課長補佐	佐々木 嘉直		
主任文化財 専門調査員	小田野 哲憲	文 化 財 専 門 調 査 員	遠 藤 修 斎 藤 邦 雄 高 橋 義 介
◇	三 浦 謙 一	◇	◇
◇	工 藤 利 幸	◇	高 橋 信 一
◇	高橋 与右エ門	◇	佐々木 信 一
◇	平 井 逸	◇	小 原 眞 一
◇	中 村 良 一	◇	村 上 修 孝
◇	中 川 重 紀	◇	酒 井 宗 孝
文 化 財 専 門 調 査 員	藤 村 敏 男	期 限 付 専 門 調 査 員	菊 地 達 哉
◇	斎 藤 實	◇	相 原 信 裕
◇	光 井 文 行	◇	及 川 靖 世
◇	佐 瀬 隆 隆	◇	女 鹿 文 雄
◇	斎 藤 博 司	◇	濱 田 宏
◇	東海林 隆幹	◇	及 川 涉 之
◇	佐々木 弘均	◇	星 森 雅
◇	川 村 均 行	◇	下 橋 宏 堅
◇	鈴 木 貞 行	◇	高 橋
[資 料 課]			
資料課長	高 橋 薫 夫		
主任文化財 専門調査員	田 領 寿		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第143集

松川遺跡発掘調査報告書

県道水沢・玉里線改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成2年1月25日

発行 平成2年1月31日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23-27

TEL (0196) 25-2323